

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第541集

ほうろく
宝祿Ⅱ遺跡発掘調査報告書

地方特定道路整備事業（稲瀬工区）関連発掘調査

2009

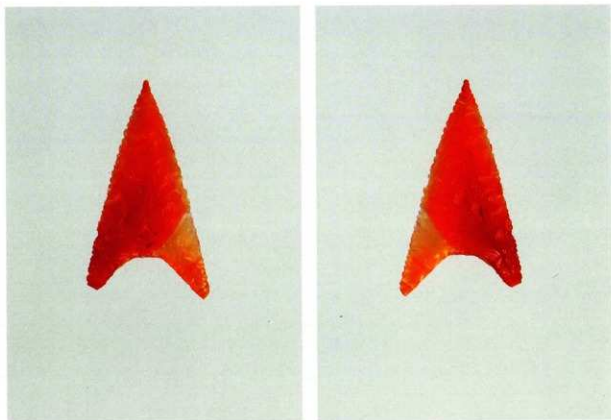
岩手県県南広域振興局土木部
(財)岩手県文化振興事業団

宝禄Ⅱ遺跡発掘調査報告書

地方特定道路整備事業（稲瀬工区）関連発掘調査



遺跡遺景



遺跡から出土した玉髓製の石鏃

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、地方特定道路整備事業（稲瀬工区）に関連して平成19年に行われた奥州市宝塚Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代後期の集落遺跡であることが判明し、竪穴住居跡2棟、住居状遺構4棟などの遺構を検出するとともに、縄文時代後期前葉を中心とする縄文土器や石器が多量に出土しました。本遺跡の近くには縄文時代後期の大きな集落遺跡である大文字遺跡などが位置しており、今回の調査成果は、そのような遺跡と比較検討する貴重な資料となると思われます。他にも古代や近世の土坑群を検出し、またそれらに伴い、土師器、須恵器や陶磁器類が出土していることから、本遺跡が縄文時代・古代・近世にも生活の場として利用されていたことが分かりました。特に近世では木製楸や曲物、木製椀など、類例の少ない木質遺物が出土しました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与されるとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立ちますよう切に希望致します。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県南広域振興局土木部、奥州市教育委員会に感謝いたします。

平成21年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田 牧 雄

例 言

- 1 本報告書は、岩手県奥州市江刺区稲瀬字宝祿276-1ほかに所在する宝祿Ⅱ遺跡発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 宝祿Ⅱ遺跡の岩手県遺跡登録台帳による遺跡番号と遺跡略号は、以下の通りである。
遺跡番号……ME97-1011
遺跡略号……HRⅡ-07
- 3 本遺跡の調査は、地方特定道路整備事業（稲瀬工区）に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、岩手県県南広域振興局土木部から委託を受けた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 調査期間・調査面積・調査担当者は以下の通りである。
調査期間 平成19年10月1日～12月14日
調査面積 1,850㎡
調査担当者 須原 拓・鳥居達人
- 5 室内整理期間と整理担当者は以下の通りである。
室内整理期間 平成19年11月1日～平成20年3月31日
整理担当者 須原 拓
- 6 本報告書の執筆、編集は須原が担当した。
- 7 出土遺物の鑑定、分析は次の機関に依頼した。
石質鑑定 花崗岩研究会
樹種同定 古代の森研究会
放射性炭化物年代測定（株）加速器分析研究所
木製品の保存処理 岩手県立博物館
- 8 基準点測量および航空写真撮影は次の期間に委託した。
基準点測量（株）アクト技術開発
航空写真撮影（株）東邦航空
- 9 本文中に表記する国家座標値は世界測地系によるものである。
- 10 野外調査では、奥州市教育委員会、並びに遺跡周辺の住民の方々にご協力いただいた。深く感謝いたします。
- 11 調査成果の一部は、現地説明会資料や「平成19年度調査報告書」、また当センターのホームページ上においても公表しているが、本書との記載事実が異なる場合は、すべて本報告書を優先するものとする。
- 12 本遺跡の出土遺物及び諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1 遺構について

(1) 本文中の図版縮尺

平面・断面：1/50 炉の平面・断面：1/30を原則としている。

(2) 遺構断面の土層注記

野外調査の際、土層の観察記録については以下の項目を基本とし、記録した。

色調（『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）を基準とする）

粘性（4段階表示：強い、やや強い、やや弱い、弱い）

しまり（4段階表示：密、やや密、やや疎、疎）

混入物の有無（混入量は5段階表示：微量：1～10%・少量：11～20%・中量：21～30%・やや多い：31～40%・多量：41～50%）

2 遺物について

(1) 本文中の図版縮尺

縄文土器：個体1/3・破片資料1/4

石器：2/3・1/3 古 銭：1/1

上記を基本とする。ただし、一部異なるものもあるため、各図にスケールおよび縮尺を付した。

(2) 観察表の表記項目について

層位・器種・残存部位・分類・外面文様、内面調整・色調（外・内面）・混入物・焼成について観察し、記載している。

文 様：口唇部（「唇」と表記）、口縁部（「口」と表記）、胴部（「胴」と表記）、底部（「底」と表記）に分けて記載している。なお、無文の場合は特に記載していない。

☆胎土：土器の表面、断面を観察し、含まれる砂粒（「砂」と表記）・石英（「石」と表記）・曇母（「曇」と表記）・白色粒子（「白」と表記）といった混入物を記載した。

☆焼成：土器の断面を観察し、断面にみられる黒色層を基準としてA、B、Cの3段階に分類し、記載した。

A→断面に黒色層がみとめられないもの。焼成が良好なものと思われる。

B→断面の中央部にのみ黒色層がみとめられるもの。焼成は良好であるが、Aほど土器に火が回っていないもの。

C→断面の半分以上が黒色層であるもの。焼成の際の火回りが悪く、焼成が悪いもの。

☆色調：外内面について記載した。観察に際しては『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）に示される色調を基準とした。

(3) 遺物の出土量について

土器は重量（g）、土製品・石器は点数（点）で表記している。土器については出土したものが完形から小片まで様々であり、点数で表記するのは難しいので重量を用いた。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	1
1	遺跡の位置と地理的環境	1
2	周辺の遺跡	3
III	調査の経過と方法	6
1	野外調査について	6
2	室内整理について	6
IV	遺物の分類基準	7
1	土器	7
2	石器	7
V	基本層序について	9
VI	検出した遺構と遺物	12
1	概 要	12
2	縄文時代の遺構と遺物	12
3	古代以降近世の遺構と遺物	83
VII	自然科学分析	106
1	宝祿Ⅱ遺跡より出土した木製品の樹種	106
2	放射性炭素年代測定結果報告書(AMS測定)	108
VIII	ま と め	112
1	本遺跡出土の第Ⅲ群土器について	112
2	本遺跡出土の石器について	116
3	遺構の変遷について	119

図版 目次

第1図	遺跡位置図	2	第41図	1・2号坑上遺構	56
第2図	周辺の遺跡	5	第42図	縄文土器分布図	56
第3図	基本層序	10	第43図	遺構外出土土器(1)	57
第4図	遺構配図とグリッド	11	第44図	遺構外出土土器(2)	58
第5図	1号住居跡	13	第45図	遺構外出土土器(3)	59
第6図	1号住居跡出土遺物(1)	14	第46図	遺構外出土土器(4)	60
第7図	1号住居跡出土遺物(2)	15	第47図	遺構外出土土器(5)	61
第8図	2号住居跡(1)	16	第48図	遺構外出土土器(6)	62
第9図	2号住居跡(2)	17	第49図	遺構外出土土器(7)	63
第10図	2号住居跡出土遺物(1)	18	第50図	遺構外出土土器(8)	64
第11図	2号住居跡出土遺物(2)	19	第51図	土製品	67
第12図	1号住居状遺構	21	第52図	遺構外出土土器(1)	69
第13図	1号住居状遺構出土遺物(1)	22	第53図	遺構外出土土器(2)	70
第14図	1号住居状遺構出土遺物(2)	23	第54図	遺構外出土土器(3)	71
第15図	1号住居状遺構出土遺物(3)	24	第55図	遺構外出土土器(4)	72
第16図	1号住居状遺構出土遺物(4)	25	第56図	遺構外出土土器(5)	73
第17図	2号住居状遺構	26	第57図	遺構外出土土器(6)	74
第18図	2号住居状遺構出土遺物(1)	27	第58図	遺構外出土土器(7)	75
第19図	2号住居状遺構出土遺物(2)	28	第59図	遺構外出土土器(8)	76
第20図	2号住居状遺構出土遺物(3)	29	第60図	遺構外出土土器(9)	77
第21図	2号住居状遺構出土遺物(4)	30	第61図	遺構外出土土器(10)	78
第22図	3号住居状遺構	31	第62図	遺構外出土土器(11)	79
第23図	3号住居状遺構出土遺物	32	第63図	遺構外出土土器(12)	80
第24図	4号住居状遺構	33	第64図	フレイク類分布図	81
第25図	4号住居状遺構出土遺物	34	第65図	遺構外出土土器(13)	82
第26図	1～3号土坑	37	第66図	20・21号土坑	84
第27図	4～7号土坑	38	第67図	22～25号土坑	85
第28図	8～11号土坑	39	第68図	26～29号土坑	87
第29図	12～16号土坑	42	第69図	土坑(古代以降)出土遺物(1)	88
第30図	17～19号土坑	44	第70図	土坑(古代以降)出土遺物(2)	89
第31図	土坑出土遺物(1)	45	第71図	土坑(古代以降)出土遺物(3)	90
第32図	土坑出土遺物(2)	46	第72図	土坑(古代以降)出土遺物(4)	91
第33図	土坑出土遺物(3)	47	第73図	土坑(古代以降)出土遺物(5)	92
第34図	土坑出土遺物(4)	48	第74図	1・2号性格不明遺構	93
第35図	土坑出土遺物(5)	49	第75図	3号性格不明遺構	95
第36図	土坑出土遺物(6)	50	第76図	1～6号溝跡	98
第37図	土坑出土遺物(7)	51	第77図	1～3号溝跡断面	99
第38図	土坑出土遺物(8)	52	第78図	4号溝跡断面	100
第39図	土坑出土遺物(9)	53	第79図	5・6号溝跡断面	101
第40図	土坑出土遺物(10)	54	第80図	溝跡出土遺物	101

第81図	土師器・須恵器・陶磁器分布図	102
第82図	遺構外出土遺物（古代以降）（1）	103
第83図	遺構外出土遺物（古代以降）（2）	104
第84図	銭貨・鉄製品	105
第85図	宝祿Ⅱ遺跡出土木製品の顕微鏡写真	107
第86図	参考値：暦年校正	111

第87図	Ⅲ群土器集成図（遺構内）	113
第88図	Ⅲ群土器集成図（遺構外）	114
第89図	石器属性分析（1）	117
第90図	石器属性分析（2）	118
第91図	遺構返還図（1）	120
第92図	遺構返還図（2）	121

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	4
第2表	放射性炭素年代測定結果	110
第3表	参考資料：暦年校正用年代	110
第4表	縄文土器観察表	122
第5表	土製品観察表	134
第6表	石器観察表	134

第7表	土師器・須恵器・陶磁器観察表	137
第8表	石製品観察表	138
第9表	木製品観察表	138
第10表	銭貨観察表	138
第11表	鉄製品観察表	138

写真図版目次

カラー写真図版1		
写真図版1	調査区全景・基本層序	140
写真図版2	1号住居跡	141
写真図版3	2号住居跡	142
写真図版4	1号住居状遺構	143
写真図版5	2・3号住居状遺構	144
写真図版6	3・4号住居状遺構	145
写真図版7	1～4号土坑	146
写真図版8	5～8号土坑	147
写真図版9	9～12号土坑	148
写真図版10	13～16号土坑	149
写真図版11	17～19号土坑・1号焼土	150
写真図版12	2号焼土・20～22号土坑	151
写真図版13	23～26号土坑	152
写真図版14	27・28号土坑	153
写真図版15	1・2号性格不明遺構	154
写真図版16	3号性格不明遺構	155
写真図版17	1・2号溝跡	156
写真図版18	2・3号溝跡	157
写真図版19	4・5溝跡	158
写真図版20	5・6号溝跡	159
写真図版21	1・2号住居跡出土土器	160
写真図版22	2号住居跡・1号住居状遺構出土土器	161
写真図版23	1号住居状遺構出土土器	162

写真図版24	1・2号住居状遺構出土土器	163
写真図版25	2号住居状遺構出土土器	164
写真図版26	2・3号住居状遺構出土土器	165
写真図版27	3～5号住居状遺構・土坑出土土器	166
写真図版28	土坑出土土器（1）	167
写真図版29	土坑出土土器（2）	168
写真図版30	土坑出土土器（3）	169
写真図版31	土坑出土・遺構外出土土器	170
写真図版32	遺構外土器（1）	171
写真図版33	遺構外土器（2）	172
写真図版34	遺構外土器（3）	173
写真図版35	遺構外土器（4）	174
写真図版36	遺構外土器（5）	175
写真図版37	遺構外土器・土製品	176
写真図版38	竪穴住居跡・住居状遺構出土土器	177
写真図版39	土坑・遺構外出土土器	178
写真図版40	遺構外土器（1）	179
写真図版41	遺構外土器（2）	180
写真図版42	遺構外土器（3）	181
写真図版43	遺構外出土土器・古代・近世の土器	182
写真図版44	近世石製品	183
写真図版45	近世木製品	184
写真図版46	銭貨・鉄製品	185

I 発掘調査に至る経過

宝祿Ⅱ遺跡は「地方特定道路整備事業の稲瀬工区」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

主要地方道一関北上線は一関と北上を結ぶ県土軸を構成する幹線道路であるとともに、国道4号線の機能を補完する重要路線である。事業対象地域である「稲瀬工区」においては、昭和42年に架設された岩瀬橋をはじめとし、近年の著しい交通量の増加や車両の大型化等により、歩行者の安全確保や車両の円滑な通行に資するために事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、県南広域振興局土木部から平成18年11月14日付県南広土第515号「道路改築事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会は平成18年12月1日に試掘調査を実施し、工事に着手するには宝祿Ⅱ遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年12月5日付教生第1194号「道路改築事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成19年8月29日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

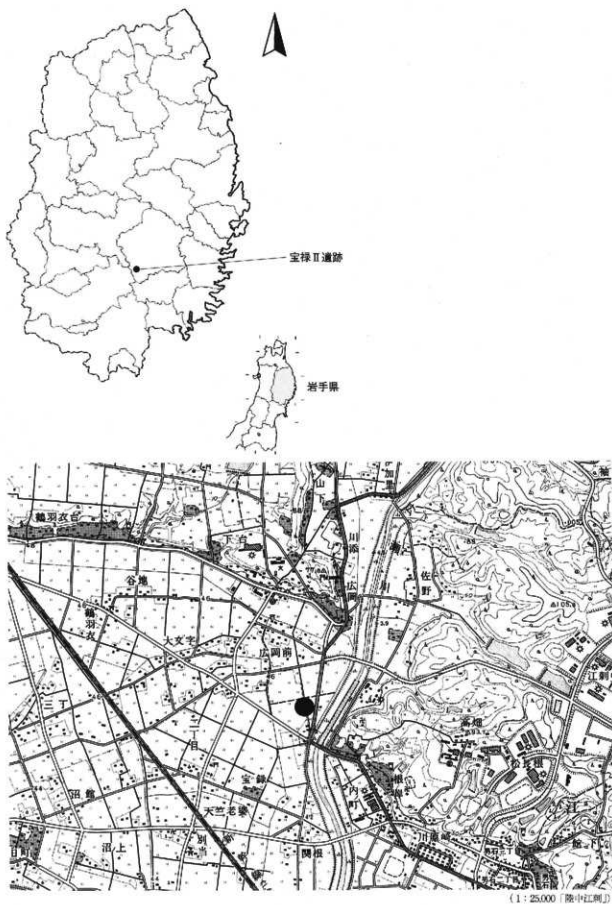
(岩手県南広域振興局土木部)

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

宝祿Ⅱ遺跡は岩手県奥州市江刺区稲瀬字宝祿276-1ほかに所在する。江刺区稲瀬は江刺区北西端にあたり、北は北上市と、また西は北上川を挟んで金ヶ崎町と接している。遺跡の位置は北緯39度12分29秒、東経141度9分34秒付近で、国土地理院発行の2万5,000分の1地形図「陸中江刺」(N J - 54 - 14 - 13 - 2)の図幅に含まれる(第1図下)。また本遺跡の標高は42~43m前後を測る。

北上川中流域には、西に連なる奥羽山脈から派生する和賀川と合流する地点があり、この地区より約4.5km下流から北上川自身が砂州を形成しながら大きく蛇行を繰り返す。同時にその東岸は、他ではみられない程の広大な沖積平野がみられる。この沖積平野は北上市と奥州市江刺区との境界あたりから10km以上南にまで伸び、北上川から最大で約4km東まで及ぶ。この平野は北上川中流域の沖積平野の中でも特に大規模に発達した平野で、俗に「江刺平野」と呼ばれる。大部分が北上川の沖積作用によって形成され、加えて平野部の中央を流れる広瀬川や、それよりも南側を流れる人首川の旧河道からも作用を受け、形成されたものと考えられる。江刺平野は東側に大きく膨らみ、低位段丘面が平野東側縁辺を帯状に縁取る。この低位段丘面は崖を形成しながら標高が高くなり始め、やがて段丘から丘陵地へと姿を変える。この丘陵地は標高100m~140m程度の底平な北上山地へと続き、奥州市江刺区の大半部分を占める。丘陵地には大小幾筋もの谷がみられ、北東から北上川に流れこむ広瀬川や人首川、伊手川などの小規模河川が谷筋を形成している。本遺跡は江刺平野のほぼ中心からにあり、広瀬川から約150m、北上川までは約2kmの位置である。



第1図 遺跡位置図

2 周辺の遺跡(第1表、第2図)

岩手県教育委員会のまとめによると、県内には12,072箇所の遺跡が確認されている(平成18年3月現在)。そのうち奥州市に1,069箇所の遺跡が所在し、江刺地区には298箇所の遺跡が登録されている。

宝祿Ⅱ遺跡が所在する江刺平野には古代を中心に多くの重要な遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡は少ないが、本遺跡の周辺に比較的集中して分布する傾向が認められる。江刺平野内では五十瀬神社前遺跡や瀬谷子遺跡、大文字遺跡で遺構・遺物が確認されている。五十瀬神社前遺跡では縄文時代中期末葉の堅穴住居跡がみついている。大文字遺跡は宝祿Ⅱ遺跡の西方約800mに位置しており、平成14・15年度に江刺市教育委員会により発掘調査が行われている。その結果、縄文時代後期前葉から中葉の堅穴住居跡が16棟見つかり、それらに伴う縄文土器が多量に見ついている。大文字遺跡から出土した縄文土器は本遺跡から出土した土器と比べて文様がほぼ類似する。大文字遺跡と本遺跡は同時期に存在したか、あるいは遺構どうしが連続していた可能性がある。また、広瀬川の東岸には宝性寺跡が所在する。宝性寺跡は寺院跡として登録された遺跡ではあるが、平成14年度の調査で、縄文時代前期後葉の集落遺跡であることが判明し、該期に比定される遺構・遺物が多数見つかった。

弥生時代の遺跡では愛宕地区の沼の上遺跡がある。沼の上遺跡は弥生時代前期の遺跡で集石遺構がみついている。

古代の遺跡に目を移すと、遺跡数は急増する。ただし、奈良時代に比定される遺跡は調査事例も少なく、宮地遺跡、力石Ⅱ遺跡、落合Ⅲ遺跡などが確認されている。落合Ⅲ遺跡では堅穴住居跡が確認されており、集落が点在していることは確実であるが、不確定といえる。他に後中野遺跡では8世紀代に営まれたと考えられる耕作地が検出されている。

平安時代の遺跡は多く、鴻ノ菜館遺跡、力石Ⅰ・Ⅱ遺跡、兎Ⅰ・Ⅱ遺跡、落合Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、朴ノ木遺跡、宮地遺跡、栄町遺跡、中屋敷遺跡などで多数の堅穴住居跡が確認されている。特筆すべきものとして律令体制との関わりが窺える遺跡が多いことがあげられ、力石Ⅱ遺跡で堅穴住居跡から石帯2点が出土、また落合Ⅱ遺跡では多量の墨書土器や木簡が出土している。なお本遺跡の周辺でも十三遺跡、宝祿遺跡、三丁遺跡、天然老婆遺跡など平安時代が中心時期となる遺跡が確認されているが、調査事例は決して多くなく、平安時代の集落が広く展開されていた可能性が示唆できるのみである。本遺跡に隣接する広岡前遺跡は平成14年度に当センターが発掘調査を行い、平安時代の堅穴住居跡3棟が見つかり、他に谷地遺跡でも平安時代の堅穴住居跡が確認され、鶴羽衣台遺跡では平安時代半ばから末にかけての集落が調査されている。瀬谷子窯跡群は東北地方屈指の土器生産遺跡であり、これまでに100基を超える窯跡が確認されている。

北上川対岸に位置する水沢市には西暦802年に設置された胆沢城跡が所在する。これまでに度々発掘調査が行われており、重要な遺構や遺物がみついている。この胆沢城と上記の古代遺跡群とを比較した場合、胆沢城設置と前後して、江刺平野では集落遺跡が増加する傾向が見て取れる。したがって胆沢城設置を契機とした周辺地域への急激な人口増加があった可能性が考えられる。

ところで宝祿Ⅱ遺跡は県の遺跡台帳にも登録されておらず、平成18年の県教育委員会の試掘において、はじめて存在が知られるようになった遺跡である。試掘では縄文土器小片と土師器片が出土しており、今回の調査でもそれらの時期の遺構・遺物がみつかることが期待されていた。

第1表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	主な時代	種別	検出遺物・出土遺物
1	谷地Ⅰ	平安	集落跡	須恵器
2	谷地	古代	散布地	須恵器
3	稲瀬古墳群		古墳跡	埴、土器、葬
4	瀬谷子遺跡	古代	埋跡	
5	白幡城(白旗城)	中世	城館跡	縄文、土師器、須恵器、石斧、石鏃、石匙
6	高ノ木	縄文・古代	散布地	縄文土器、土師器、須恵器、石器
7	五十瀬神社前	縄文	集落跡	土器、埴、漆器
8	瀬谷子	縄文・古代	集落跡	縄文土器
9	中嶋	古代	散布地	須恵器、土師器、扇形須恵瓦片、土器、布目瓦
10	錦羽衣台	古代	散布地	石鏃
11	錦羽衣	古代	散布地	須恵器、石鏃
12	錦羽衣塚	中世	城館跡	縄文土器(晩期)、石刀
13	稲瀬中学校	古代	散布地	縄文土器(中期)
14	稲瀬小学校	古代	散布地	縄文土器(後期)
15	富山古館	中世	城館跡	縄文土器(後期)、古代土器
16	佐野山	近世	塚	縄文土器(後期)、須恵器
17	佐野山館	中世	古墳・城館跡	縄文土器片・須恵器片
18	板碑	縄文	散布地	縄文土器
19	大文字	古代	散布地	縄文土器(中・晩期)、土師器、須恵器
20	広岡前Ⅱ	縄文・古代	散布地	縄文土器(後期)、土師器、須恵器
21	広岡前	古代	散布地	寺院跡
22	十二	古代・縄文	散布地	縄文土器(中・晩期)、須恵器、土師器、石鏃、布目瓦
23	宝塚	古代	散布地	縄文土器
24	宝塚Ⅱ	縄文・古代・近世		
25	根岸河内	縄文	洞穴	石鏃
26	庚申沢	縄文	集落跡	縄文土器
27	宝性寺跡	縄文・古代	集落跡	土師器(内黒)
28	根岸	縄文・古代	散布地	縄文土器
29	沼尻	古代	散布地	八咫鏡、軒瓦、什器、紡績鏡
30	三丁	古代	散布地	須恵器
31	天竺老塚	縄文・古代	散布地	縄文土器
32	沼館	中世	城館跡	縄文土器、銅片
33	沼の上	縄文	散布地	縄文土器、石器
34	別当	古代	散布地	縄文土器、石器
35	沼の上Ⅱ	古代	散布地	縄文土器
36	東岡	古代	集落跡	縄文土器(中期)
37	百瀬子		散布地	縄文土器(中期)、石鏃
38	駒込	古代	城館跡	縄文土器(中・後期)
39	北天間Ⅰ	古代	散布地	縄文土器(後期)
40	北天間Ⅱ	古代	散布地	須恵器
41	阿波陀堂跡	古代	祭祀跡	須恵器・石鏃・管玉・打撃・磨石器・石匙・曲玉・布目瓦
42	林	古代	散布地	土師器
43	二本木Ⅰ	古代	散布地	土師器、須恵器
44	二本木Ⅱ	古代	散布地	須恵器、埴器、青磁
45	小塚Ⅰ	古代	散布地	縄文器(晩期)
46	小塚Ⅱ	古代	散布地	縄文
47	新川Ⅰ	古代	散布地	縄文土器、石鏃、銅片
48	新川Ⅱ	古代	散布地	石鏃、裝飾品、勾玉
49	北八日市	古代	散布地	須恵器
50	馬場先Ⅱ	古代	散布地	須恵器、漆器
51	馬場先	古代	散布地	土師器
52	宮地	古代	集落跡	縄文土器(中期)
53	鎌倉堂沖Ⅱ	古代	集落跡	縄文土器、石鏃
54	池向城(田谷城)	古代・中世	集落跡・城館跡	縄文土器(後期)
55	池向	古代	散布地	土器、石鏃、石刀
56	後中野	縄文・古代	集落跡	縄文土器
57	金ヶ崎城(洞院館)	中世	城館跡	埴、漆
58	土館(古館・遠瀬館)	中世	城館跡	平塚、埴
59	北田中	平安	集落跡	土師器、須恵器、須恵器系土器
60	八ッ口	平安	集落跡	土師器、須恵器
61	巨沢城(方八丁)	平安	城館跡	土師器、須恵器、葬
62	北野(川原館・長倉館)	奈良・平安・近世	散布地・城館跡	散布地・城館跡
63	築園	平安	集落跡	土師器、須恵器
64	三ヶ町	平安	散布地	土師器、須恵器
65	梅屋敷	奈良	集落跡	土師器
66	八幡巾	縄文	集落跡	縄文土器(後期)、石匙、石鏃、小形、石斧
67	玉貫前	奈良	集落跡	土師器、須恵器



第2図 周辺の遺跡

Ⅲ 調査の経過と方法

1 野外調査について

平成19年10月1日から、調査面積1,850㎡を対象として、調査を開始した。調査開始に際しては、任意に調査区内にトレンチを設定し、表土下の地層状況を確認した上で、重機を使用して表土除去を行った。そして表土除去後、人力による遺構検出作業を開始した。

遺構検出が進むにつれ、遺構、遺物の検出量が当初に想定していたよりも多くなることが分かってきた。そこで検出作業と平行して、プランにトレンチを入れ、ある程度具体的な遺構数を先に確定することにした。11月1日に岩手県県南広域振興局土木部との現地協議を行い、調査期間を当初予定の11月15日から12月14日へと延長される事が決定した。

遺構精査にあたり、調査区にあらかじめグリッドを設定し、遺物取り上げはそのグリッド毎に行っている。グリッドの設定は平面直角座標第X系（世界測地系）に合わせている。グリッドは、まず100m四方の大区画を設定し、北から南へとローマ数字（Ⅰ・Ⅱ）、西から東にアルファベットの大文字（今回該当したのは「A」のみ）を設定し、さらに大区画を5m四方の小区画に細分し、南北方向に、北からアラビア数字1～20、東西方向に西からa～tに分割している。各グリッドの名称については、大区画と小区画の組み合わせで、例えば「II A 7 g」のように設定している。

検出した遺構は、規模や性格により、適宜に1分法と2分法を選択し精査を行った。各遺構について平面、断面、遺物出土状況の実測図作成および写真撮影を行った。写真撮影は35mm判カメラ（モノクロ）、デジタルカメラ（ニコンD40）各1台を主に使用し、必要に応じ、6×7判カメラ（モノクロ）1台も使用した。また航空撮影を東邦航空に業務委託しており、12月11日に実施している。

その他に、啓蒙活動の一環として、10月31日に江刺区稲瀬小学校6年生（19人）を対象に、また、11月12日には同小学校5年生18人を対象に発掘体験を実施した。また11月23日には現地説明会を開催し、調査成果を公表した（来訪者28人）。

平成19年12月12日に県南広域振興局土木部道路整備課、岩手県教育委員会の立ち会いの下、終了確認を受け、承認を得た。平成19年12月14日全ての調査を終了し、撤収した。

2 室内整理作業について

室内整理作業は平成19年11月1日から開始し、平成20年3月31日に終了した。

遺構図については、調査員が図面整理を行い、それを基に、トレース図作成、図版作成を行った。遺物は水洗、注記、接合・復元、実測・拓影作成、写真撮影、トレース、図版作成の作業を、作業員が分担して行った。調査員は図面の点検の他、原稿執筆、表作成などを行った。

また奥州市教育委員会の依頼に応じ、平成20年3月2日、「平成19年度 奥州市遺跡発掘調査報告会」において、調査成果を公表した。

IV 遺物の分類基準

1 土 器

本遺跡から出土した土器は大コンテナ箱で約26箱、総重量にすると261038.16gを測る。時期ごとにもみると縄文時代中期末葉から晩期後葉、弥生時代に属する。主体は縄文時代後期前葉である。また平安時代の土師器・須恵器や近世の陶磁器も出土している。縄文土器・弥生土器に関しては以下のように分類し、観察表に記載した。

第I群土器

縄文時代中期末葉に属する土器群である。

第II群土器

後期初頭に属する土器群である。口縁部から胴部へと連鎖状隆帯が垂下するのが特徴である。

第III群土器

後期前葉から中葉に属する土器群で、十腰内I～3式に相当するものと思われる。今回の調査で最も出土量の多い土器群であり、文様も多様である。ここでは一括し、第VIII章で詳しく述べる。

第IV群土器

晩期に属する土器群

第V群土器

弥生時代に属する土器群

第VI群土器

口縁部から胴部まで、無文あるいは縄文のみが施文される土器群を一括した。

☆なお、土師器、須恵器、陶磁器については、いずれも小片しか出土しておらず、分類などはしていないので、ここでは記述しない。

2 石 器

本遺跡から石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、筥状石器、尖頭器、礫器、磨製石斧、敲磨器類、石皿が出土し、また他にフレイク、リッターチドフレイク、石核もみつかった。各石器については次のように分類している。

石鏃

扁平で、二次加工により鋭角な先端部が作り出され、長さ5cm以下のもの。形態から以下のように分類した。

- | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1類：有茎平基 | 2類：有茎尖基 | 3類：有茎円基 | 4類：有茎凹基 | 5類：無茎円基 |
| 6類：無茎凹基 | 7類：尖茎平基 | 8類：尖茎尖基 | 9類：棒状 | |

石錐

二次加工により錐状の端部が作出されるもの。形態から以下のように分類した。

- 1類：柄み部のあるもの。さらに細分した。

a類：柄み部より錐部の方が長いもの。 b類：柄み部より錐部の方が短いもの。

2類：柄み部の無いもの。

石匙

突出した柄み部を作出し、また二次加工により幅広の刃部が作出されたもの。出土数が少ないので、細分はしていない。

尖頭器

やや幅広で、二次加工により鋭角な先端部が作出され、長さは5cm以上のもの。出土数が少ないので、細分はしていない。

篋状石器

平面形が撥形を呈し、縁辺の一端あるいは両端に二次加工による刃部が作出されるもの。出土数が少ないので、細分はしていない。

スクレイパー

定形化した形状をもたず、縁辺部に刃部が作出されているものを一括した。刃部角度や刃部の形状から2分類した。

1類：縁辺の半分以上に刃部が作出され、扁平で、刃部の角度が60°以下のもの。所謂、「削器」。

2類：縁辺の半分以上に刃部が作出され、刃部の角度が60°以上のもの。所謂、「搔器」。

3類：刃部と思われる二次加工が施されているが、不連続か縁辺部の半分以下のもの。1・2類にあてはまらないもの。

礫器

礫または大形の剥片を素材とし、周辺の一部に大きな剥離を連続的に加え、刃部としたもの。出土数が少ないので、細分はしていない。

両極石器

2つの側縁から互いに向き合う方向の両端剥離が表裏面に生じるもの。出土数が少ないので、細分はしていない。

磨製石斧

平面形が撥形、長方形を呈し、剥離や敲打によって整形された後、研磨を施して仕上げられた石斧。出土数が少ないので、細分はしていない。

敲磨器類

大きさは長軸あるいは長径が10cm以下で、磨痕、敲打痕、凹痕が確認できた礫石器。所謂「磨石」、「凹石」、「敲石」を一括した。使用痕の種類や組み合わせで7分類した。

1類：正裏面ないし、側面において磨痕のみが確認されるもの。磨面が複数になるものも含む。

2類：正裏面に凹痕のみを有するもの。複数面に有するものも含む。

3類：端部や側面に敲打痕のみを有するもの。複数の敲打痕をもつものも含む。

4類：磨痕と凹痕とが認められるもの。

5類：磨痕と敲打痕とが認められるもの。

6類：凹痕と敲打痕とが認められるもの。

7類：磨痕、凹痕、敲打痕が認められるもの。

石皿類

扁平で、長軸、短軸ともに10cm以上で、正裏面に磨痕、凹痕が確認できた礫石器で、所謂「石皿」、「台石」を一括した。使用痕跡から以下のように3分類した。

- 1類：正裏面に磨痕が認められるもの。
 2類：正裏面に凹痕が認められるもの。
 3類：正裏面に磨痕、凹痕が認められるもの。

リタッチドフレイク（以下、Rフレイクと表記）

上記の分類項目からはずれた剥片で、刃部以外の二次加工が施されているものをRフレイクとした。

フレイク

以上の分類項目全てからはずれた剥片石器。打面と背面の形状から以下のように分類した。

まず打面の調整具合で3分類した。

- 1類：自然面を打面とするもの 2類：1回、剥離作業が行われた面を打面とするもの
 3類：2回以上、剥離作業が行われた面を打面とするもの。

また、背面にみられる自然面の残存状況により3分類した。

- a類：背面の全てが自然面（剥離なし） b類：背面の一部が自然面（一部に剥離作業を行う）
 c類：背面に自然面が見られないもの（面全体で剥離作業が行われている）

これらの組み合わせで9分類とした。また打面が欠損しているものなど、分類不能なものについては、以下のように2分類した。

- 4 a類：いずれかの面に自然面が残るもの。 4 b類：自然面が全く残らないもの。

V 基本層序について

土層の堆積状況は調査区の数カ所を深掘りして確認した。本遺跡では下記のIV、V層が遺構底面となる。そこで深掘りによる土層確認はV層上面まで行った。

基本層序（第3図・写真版1）

- I a. 10Y R 3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり疎 土壌粒子粗い 礫少量含む。
 (耕作土)
- I b. 10Y R 4/1 褐灰色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや疎 土壌粒子やや粗い
 川砂（雲母粒）少量、礫少量含む。(耕作土か盛土)
- II a. 10Y R 3/2 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 土壌粒子やや緻密 炭化物微量、
 酸化鉄微量含む（後期の包含層。古代以降の遺構はII a層上面で検出）
- II b. 10Y R 4/4 褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 土壌粒子緻密
- III a. 10Y R 4/2 灰黄褐色粘土 粘性強 しまり密 土壌粒子緻密 酸化鉄少量含む
- III b. 10Y R 5/2 灰黄褐色粘土 粘性強 しまり密 土壌粒子緻密
- III c. 2.5G Y 4/1 暗オリーブ灰色粘土 粘性強 しまりやや密 土壌粒子緻密
- IV a. 10Y R 4/6 褐色粘土 粘性強 しまりやや密 土壌粒子緻密 酸化鉄少量含む
- IV b. 2.5G Y 3/1 暗オリーブ灰色粘土 粘性強 しまりやや密 土壌粒子緻密
- V. 10Y R 4/3 ぶい黄褐色細砂 粘性弱 しまりやや密 土壌粒子やや緻密

I層は現地表面から約50cm堆積している。混入物の有無により、二分した（I a、I b層）。

II層は約20cm堆積している。二細分したが、主体はII a層である。II a層は、その上面で溝跡など

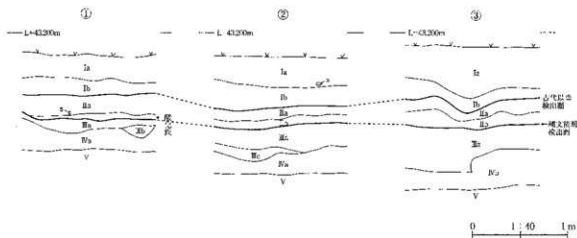
の遺構を検出したが、縄文時代後期の遺物包含層にも相当する。

Ⅲ層は20～50cm堆積している。主体はⅢa層であるが、部分的に変色しているところもあり、細分している。Ⅲa層上面で縄文時代後期前葉の竪穴住居跡や住居状遺構を検出面としている。

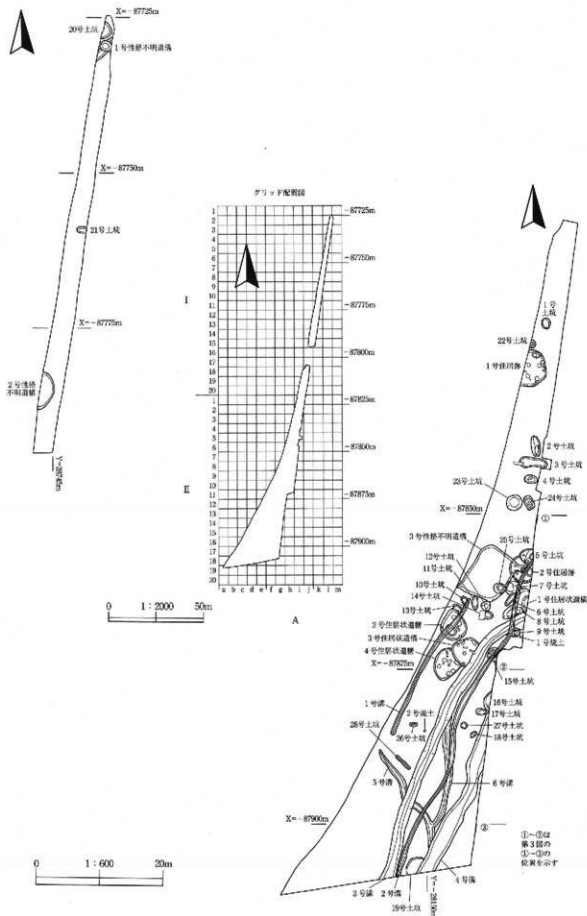
以上のような土層の観察から、本遺跡においては検出面がⅡa層上面（古代以降面）とⅢa層上面（縄文時代後期面）の2面あることが判明した。ただし遺構検出の段階ではこのような堆積様相を把握できず、溝跡などの人形の遺構を除き、古代以降の遺構もⅢa層上面まで掘り下げてから検出している。

Ⅳ層は粘土層であり、約20cm堆積する。下から水が湧く場所も見受けられ、グライ化して変色している場所も認められる。基本的に遺構の床面・底面はこの層内になる。

Ⅴ層は細砂層であり、ここまで掘り下げると、ほぼ例外なく水が湧く。ただし深い遺構はこの層をやや掘り下げて構築されている。



第3図 基本層序



第4図 遺構配置とグリッド

VI 検出した遺構と遺物

1 概 要 (第4図)

今回の調査で検出された遺構は大きく3つの時代に区分される。まず、縄文時代では後期の堅穴住居跡2棟、住居状遺構4棟、土坑18基、そして古代では土坑2基、性格不明遺構2基、近世では土坑7基、性格不明遺構1基を検出した。他に古代～近世と考えられる溝跡6条がみついている。

出土遺物は大コンテナ(40ℓ)で30箱分に相当する。なかでも土器は大コンテナ箱26箱分になった。主体は縄文土器で後期前葉に比定されるものが大半を占め、また同時期のものと思われる土製品(土偶11点、土製耳飾り2点、土錘3点、土製門板3点など)も出土した。他に晩期の土器や弥生土器が少量みついている。一方、古代・近世は遺構は見つかるものの、土師器、須恵器、近世陶磁器は、いずれも小片で、図示できないものがほとんどであった。また、いずれの時代の土器にも言えることだが、磨滅が激しく、残存状態が悪い。隣接する広瀬川の氾濫による作用や、元々の土器の胎土に問題があったなど、原因はいくつか考えられるが、詳しいことは定かではない。

石器・石製品は大コンテナ4箱分が出土した。縄文時代に比定されるものでは石鏃、石錘、石匙、尖頭器、打製石斧、筈状石器、スクレイパー、阿極石器、磨製石斧、敲磨器類、石皿、また他に石核、Rフレイク、フレイクが出土した。他に近世では砥石、石臼などがみついている。

近世に比定される遺物は、陶磁器が少ないが、その他の遺物は様々なものがある。銭貨(元祐通寶1枚・永樂通寶2枚・寛永通寶1枚)や煙管の雁首の一部、また少量ではあるが木製品(曲物や楸など)が出土した。

2 縄文時代の遺構・遺物

(1) 堅穴住居跡

1号住居跡(第5～7図、写真図版2・21・38)

〈位置〉調査区中央、II A 1、2 i グリッドに位置する。8m南側に2号土坑がある。

〈検出状況〉Ⅲ a 層上面で暗褐色の不明瞭なプランとして確認した。任意にベルトを設定し、その脇をサブトラ状に掘り下げたところ、床面や壁の立ち上がりを確認したので遺構と判断した。

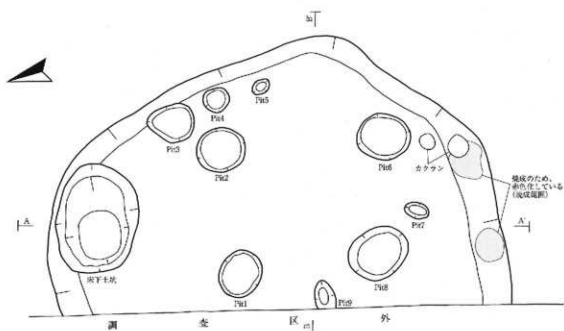
〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉西側の一部が調査区外に及ぶため、全容が分からないが不整な楕円形を呈するものと推定される。規模は検出できた部分で5.9×3.6mを測る。深さは検出面から最深29cmである。

〈埋土〉暗～黒褐色粘質シルトを主体とし、9層に分けられる。床下土坑の埋土(4～6層)は本遺構の埋土3層を切っている。ただし1・2層には及んでいないので、床下土坑も本住居跡に伴うと判断した。このような層状となったのは遺構の埋没段階で、床下土坑がやや遅れて埋没していき、住居本体の埋没と時間差が生じたためと考えられる。

〈床面・壁〉Ⅲ a 層を床面とした。ほぼ平坦である。硬化面は認められない。壁は調査区外に及んでいる西側を除き、全周する。緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴〉9個確認したが、遺構が調査区外に及ぶので、これが全てか定かではない。柱穴の配列は Pit 1・2・6・8 は方形に並ぶようにも捉えられるが、調査区外にもある可能性もあり、定かでは



A L=4330m

A'



B L=4330m

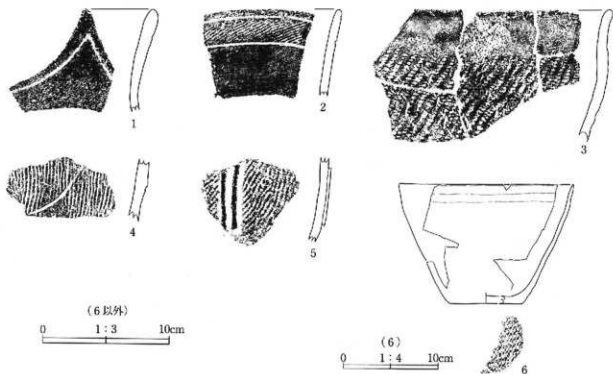
B'



- | | | | | |
|------------|----------|-------|--------|-------------------------|
| 1. 10Y33/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまりやや強 | 炭化物微量、黒褐色粘土少量含む |
| 2. 10Y32/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、黄褐色細砂少量含む |
| 3. 10Y33/4 | 暗褐色粘質シルト | 粘性強 | しまり密 | 炭化物微量、黄褐色細砂少量、灰白色粘土少量含む |
| 4. 10Y32/1 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物微量含む |
| 5. 10Y32/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物微量、炭上粒微量含む |
| 6. 10Y33/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまり密 | 炭化物微量含む |
| 7. 10Y33/4 | 暗褐色粘質シルト | 粘性強 | しまり密 | 炭化物微量含む |
| 8. 10Y33/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物微量、炭上粒多量含む |
| 9. 10Y33/4 | 暗褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、黄褐色細砂少量含む |

0 1:50 2m

第5図 1号住居跡



第6図 1号住居跡出土遺物(1)

ない。

〈炉〉本住居跡から炉は検出してない。ただし南壁面で焼成により壁面が赤化している箇所(焼成範囲)を2個確認した。2個の焼成範囲は65cm離れている。規模は径40~45cmで、にぶい橙色を呈する。焼土の堆積は認められない。

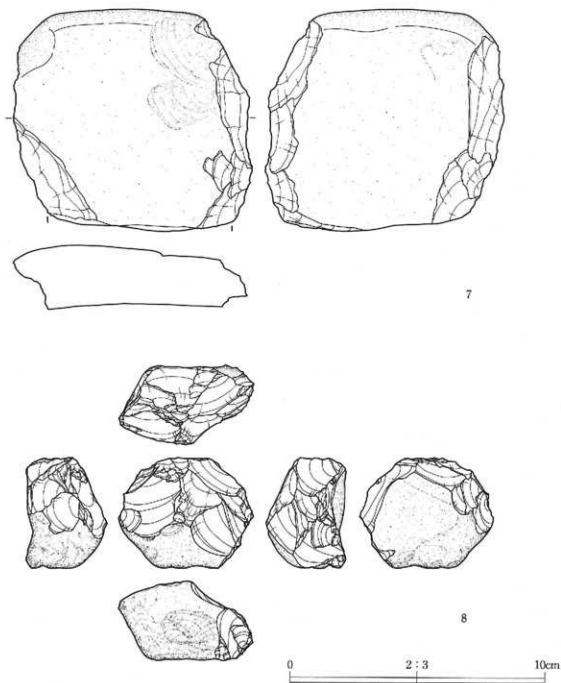
〈その他〉北壁付近に床下土坑1個確認した。140×110cmの楕円形を呈し、深さは床面から20cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトを主体とし、層中には土器片や石器が多量に混入していた。

〈出土遺物〉土器、6623.34g分が出土している。いずれも小片で、器形まで復元できるものはない。

1は深鉢の口縁部片で、波頂部に沿って、沈線が巡る。2は深鉢の口縁部片で、口縁部には横位に2条の沈線が巡り、沈線間には縄文が充填される。3は床下土坑内から出土した深鉢の口縁部片である。口縁部がやや幅広に無文となり、胴部は縄文が施文される。4は深鉢の胴部片で、縦位の撚糸文の上に、沈線が施文される。5は深鉢の胴部片で、縄文を施文した後に、縦位の隆帯が2条付く。第I群土器に相当し、大木8b~9式古段階に比定されるので他の土器とは時期が異なる。埋土上位から出土しており、流れ込みによるものと考えられる。6は無文の深鉢の大形破片である。口縁部に非常に浅く、横方向に整形した痕跡が認められる。また底部は全体の3分の1程度しか残存していないが、底面に網代痕が認められる。

石器は打製石斧1点、敲磨器類1点、石皿1点、石核1点、フレイク6点、Rフレイク1点が出土しており、そのうち、2点を図示した。7は打製石斧で、刃部を欠損する。側縁部は両面から二次加工が施されている。8は石核である。扁平な素材を利用し、側面を打面とし、幅広の面から剥離作業を行っている。

〈時期〉出土遺物から縄文時代後期前葉に比定される。



第7図 1号住居跡出土遺物(2)

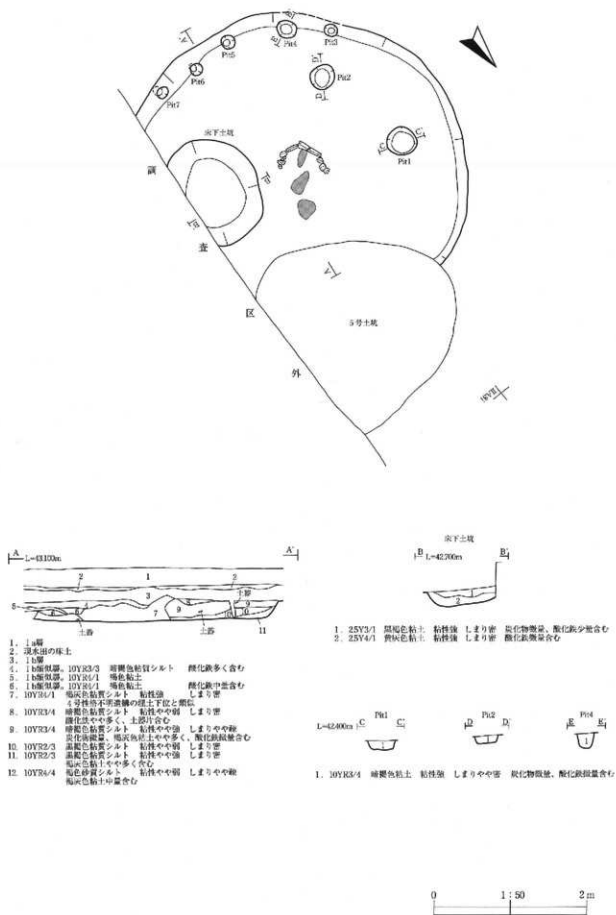
2号住居跡(第8~11図、写真図版3・21・22・38)

〈位置〉調査区中央、II A 8 h~8 i グリッドに位置する。本住居跡の東側は調査区外に及んでいる。

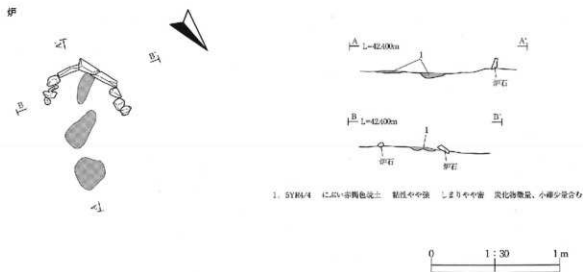
〈検出状況〉3号性格不明遺構の東側を精査中に本遺構の炉を検出した。

〈重複関係〉5号土坑、3号性格不明遺構と重複する。本住居跡が最も古い。なお、3号性格不明遺構は本住居跡の上に構築されており、したがって3号性格不明遺構による本住居跡の削平は壁のみであり、床面には及んでいない。

〈形態・規模〉北側を5号土坑に削平され、また東側の一部は調査区外に及んでいるため、形態につ



第8図 2号住居跡(1)



1. 5YR6/4 に近い赤褐色粘土、黒土や中強、しまりややや、炭化物微量、小礫少量含む

第9図 2号住居跡(2)

いては全容が分からない。検出できた部分から、円形になると推定され、規模は検出できた部分で直径4.5mを測る。深さは検出面から最深23cmである。

〈埋土〉暗褐色粘質シルトを主体とし、5層に分けられる。第8図の断面図8～12層がこれに相当する。また7層は8～12層を切っており、堆積状況も不自然であることから、3号性格不明遺構からの流れ込みの可能性がある。

〈床面・壁〉炉が検出したⅢ a層を床面とした。ほぼ平坦である。硬化面は認められない。壁は東側と北側の一部を除き、全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

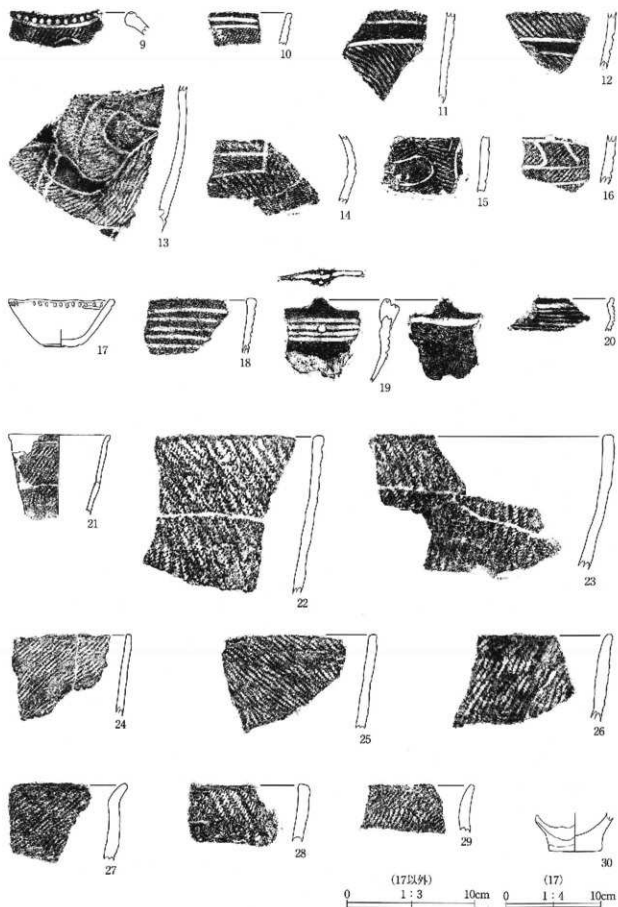
〈柱穴〉7個確認した。遺構の東側は調査区外に及んでいるため、全ての柱穴を検出できたか定かではない。Pit 1・2は南北方向に並んでいるとも捉えられる。またPit 3～7は南壁際に並んでおり、所謂壁柱穴と考えられる。いずれも埋土は暗褐色粘土を主体とする単層である。

〈炉〉床面、ほぼ中央部に位置する。3箇所に集中する焼土範囲を中心に西側から南側にかけて炉石が並んでいる。石囲炉と考えられるが、焼土範囲の西側から北側にかけては、炉石が無く、また抜き取り痕も認められないので、元々無かったものと思われる。3箇所の焼土範囲には、焼土が2～4cm堆積しており、また、その周辺にも焼土粒が微量分布していた。

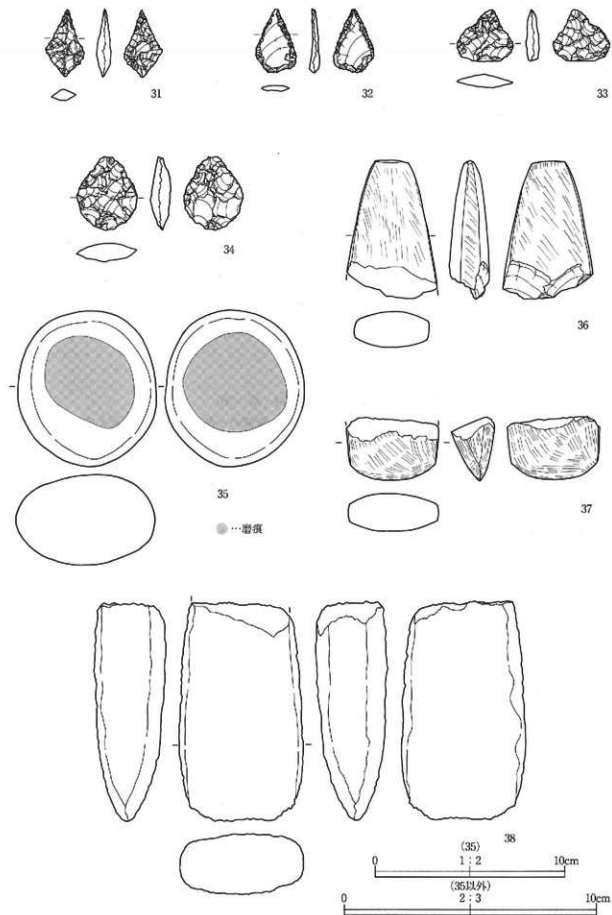
〈その他〉床面東側に床下土坑1個が認められる。床下土坑は調査区外に及ぶが、形態は楕円形と推定され、検出部分で1.5×0.9mを測る。埋土は黄褐色粘土を主体とし、土器片が混入する。

〈出土遺物〉縄文土器は9785.25g出土している。出土量が多い割に小片がほとんどで、形態まで復元できたものは17と21だけであった。22点図示した。9は口縁部に棒状工具による押印文が巡り、その下には沈線による曲線文と縄文が施文される。10は口唇部直下に2条の沈線が横位に巡り、下には縄文が施文される。11・12は深鉢の胴部片で沈線による区画文が描かれ、区画内は無文である。13～15は深鉢の胴部片で入り組み文が描かれている。16は平行沈線が施文され、弧状の沈線が連結する。17は小形の鉢で、口縁部に浅い刻みが巡る。底部にも一条の沈線が巡っている。

18～20は第Ⅳ群に相当する土器群である。18は深鉢の口縁部で数条の沈線が横位に巡る。19は鉢の口縁部で口唇部には突起が付く。口縁部には4条の沈線が横位に巡り、中央に棒状工具による刺突が付く。20は浅鉢の口縁部片で口縁部に沈線が巡る。



第10図 2号住居跡出土遺物(1)



第11図 2号住居跡出土遺物(2)

21～29は第VI群の深鉢である。いずれも単節の縄文が施文される。形態などの特徴から時期は縄文後期と考えられる。

石器は石鏃3点、石錐1点、磨製石斧3点、敲磨器類2点、スクレイパー14点、フレイク73点、Rフレイク13点が出土している。フレイクの出土量が突出して多い傾向がある。8点を図示した。31、32は石鏃である。31は完形で8種に相当する。32は5類に相当するもので縁辺部の両面に二次加工が施され、刃部を作出している。33はスクレイパーで両面に二次加工が施されている。端部の一部が尖っており、石鏃の先端部とも考えられるが、ここではスクレイパーの1類と判断した。34はスクレイパー2類で、円形を呈する。両面に二次加工が施され、刃部を作出する。35は敲磨器類でやや厚みがあり、両面に磨痕が認められる。36～38は磨製石斧である。36は蛇紋岩製で、基部のみ残存する。37は頁岩製で刃部のみが残存した。38は未成品である。敲打による成形途中で制作を放棄したものと考えられる。はんれい岩製である。

〈時期〉出土し器から縄文時代後期前葉に比定される。

(2) 住居状遺構

竪穴住居跡とほぼ同規模で、柱穴は認められるが灰や焼成の痕跡が無いものを竪穴住居跡と区別して、「住居状遺構」とした。今回の調査で4棟検出した。

1号住居状遺構(第12～16・51図、写真図版4・22～24・37・38)

〈位置〉調査区中央ⅡA 9 h～9 i グリッドに位置する。東側の一部は調査区外に及んでいる。

〈検出状況〉Ⅲa層上面で、暗褐色のプランを検出した。不明瞭なプランだったが、検出面上に炭化物や土器片が多量に分布していた。

〈重複関係〉8号土坑と重複する。本遺構の方が古い。

〈形態・規模〉本遺構は東側の一部が調査区外に及んでいるため、形態の全容は定かではないが、検出できた部分は不整な隅丸方形を呈し、3.7×2.2mを測る。深さは検出面から最深37cmである。

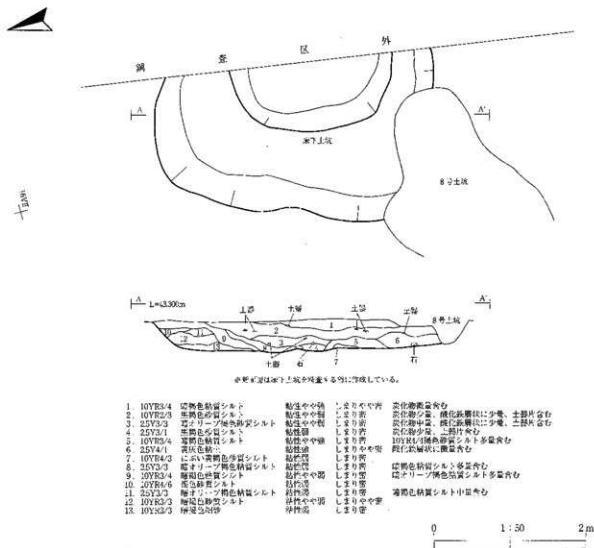
〈埋土〉黒褐色砂質シルトを主体とし、13層に分けられる。層中に酸化鉄が含まれ、また粘質シルトと砂質シルトが互層を形成する箇所もある。水性堆積によるものと思われる。

〈床面・壁〉Ⅲa層を床面とした。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁は東側と南西側の一部を除き、全周する。緩やかに外へとひらきながら立ち上がる。

〈柱穴〉なし。

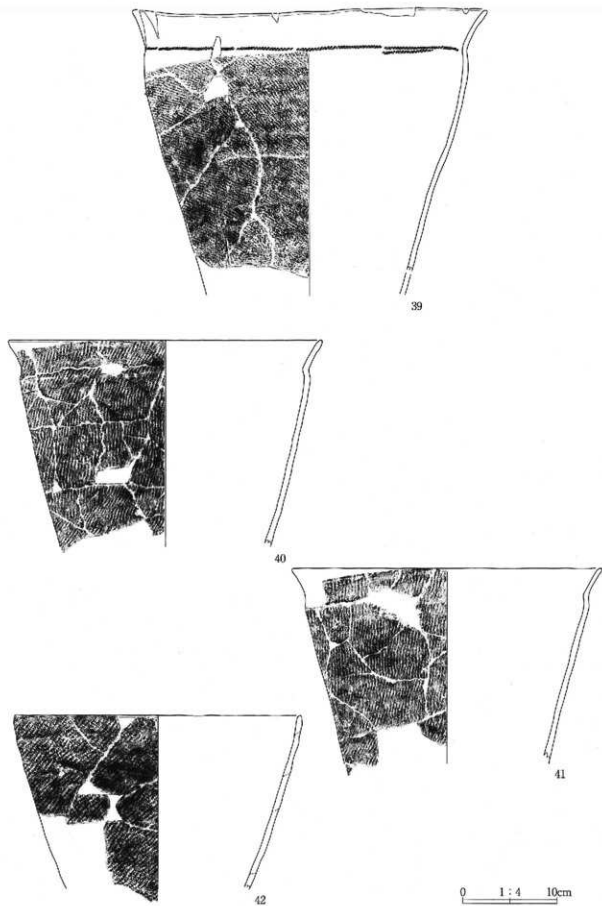
〈その他〉床面ほぼ中央に床下土坑が認められる。調査区外に及んでいるため、形態の全容は定かではないが、検出できた部分は2.1×0.9mの楕円形を呈する。埋土中に土器片が多量に混入していた。

〈出土遺物〉縄文土器26122.03gが出土している。今回、検出した遺構の中では最も出土量が多い。第VI群の土器を中心に形態が復元できたものもある。ただし、第Ⅲ～Ⅴ群まで出土しているが、主体は第Ⅲ群である。44点図示した。39～42は形態まで復元できた第VI群の土器である。39は頸部でくびれ、口縁部が外反する器形である。頸部には縄文原体を押し、文様帯を区画する。口縁部は無文で、胴部には縄文が施文される。40～42は大きく外に広がりながら立ち上がる器形で、40、41は頸部がやや屈曲する。43は壺の胴部で沈線による入り組み文と、充填技法による縄文が施文される。45は白付鉢の底部片で底面には網状痕が認められる。47は第IV群の深鉢で口唇部下には刻みが巡り、またその下には2条の沈線が巡る。胴部は縄文のみが施文される。48～82は破片資料である。48は深鉢の口縁部片で、波状口縁を呈する。縄文を施文した後に沈線と刺突文が巡る。49、53、54は深鉢の胴部片で、

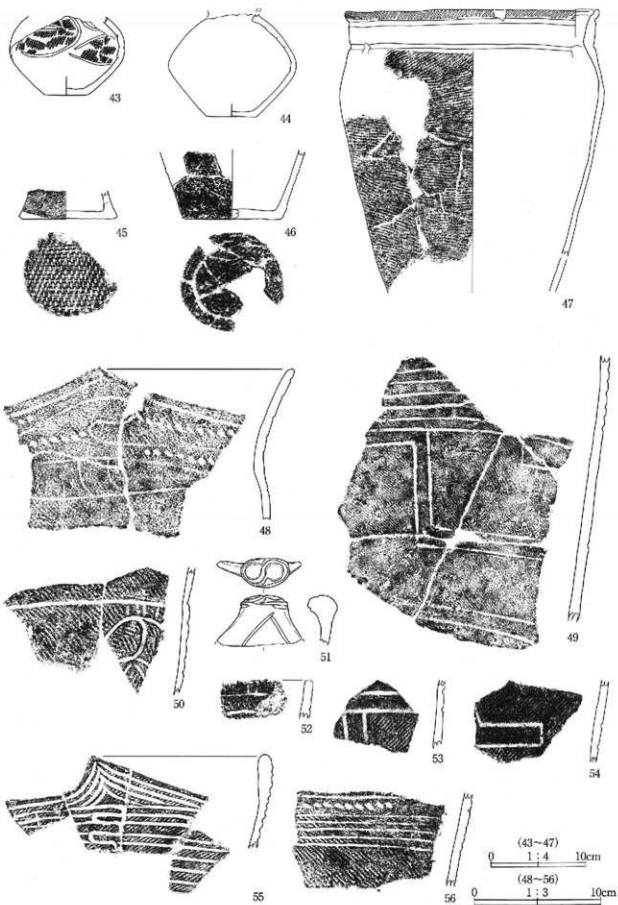


第12図 1号住居状遺構

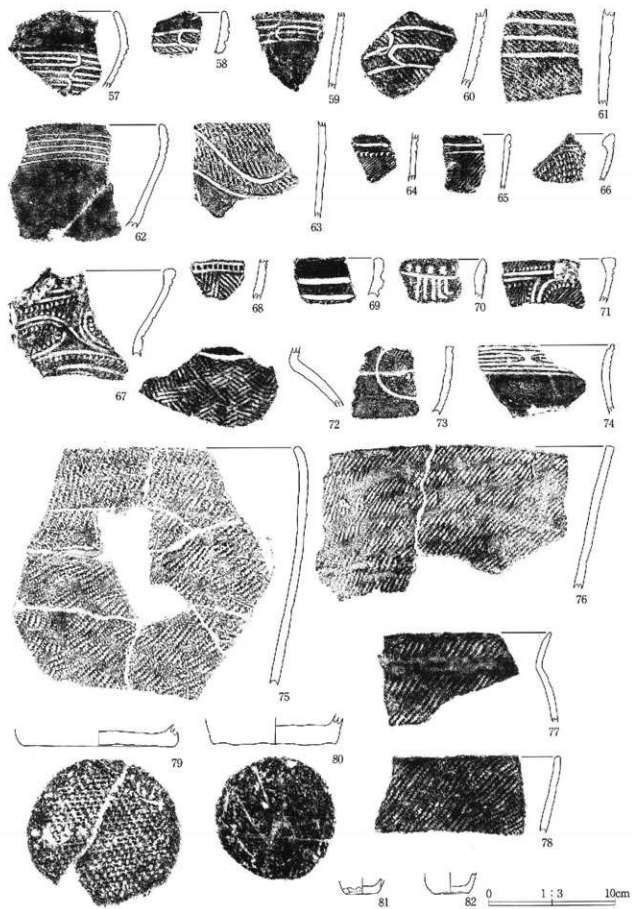
縄文施文後、クランク状の区画文を付す。50は深鉢の胴部片で、縄文を施文後、入り組み文を描いている。51は波状口縁部の波頂部片である。口唇部には沈線により「S」字状の文様が付される。55は深鉢の口縁部片で、波状口縁を呈する。縄文施文後、数条の平行沈線が横位に巡り、また波状の沈線が縦位に垂下する。57～60は口縁部に平行沈線文が巡り、沈線による縦位の曲線文が連結する。62は鉢の口縁部片で口縁部に縄文施文後、5条の沈線が横位に平行する。63は胴部片で、縄文施文後、弧状に沈線が巡る。64は施文された沈線文と平行して細い工具による刺突文が巡る。66は口縁部の波頂部片で、波頂部に沿うように沈線が一条巡り、その下には刺突文が充填される。67は大きく外へと開く深鉢で、摩擦が激しいが、沈線文とそれと沿うように刺突文が施文される。71も同様の文様が描かれている。68は胴部片で、2条の沈線が平行し、その間には刻みが巡る。その下は縄文が羽状に施文される。72は壺の胴部片で、胴部に羽状縄文が縦位に施文される。74は第VI群に相当する。壺の口縁部片で、変形「S」字文が施文される。75～78は第VI群に相当する土器群である。77は屈曲する頸部のみ無文である。79、80は深鉢の底部片である。79は底面に網代痕が、80は底面にケズリ痕が見受けられる。81、82はミニチュアの土器底部片である。



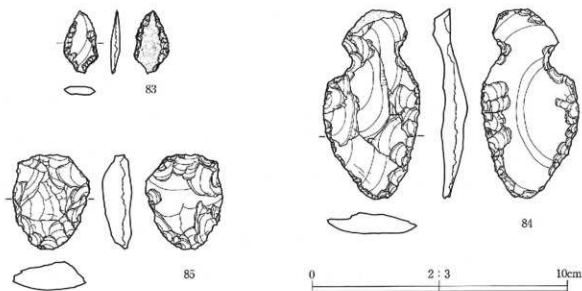
第13図 1号住居状遺構出土遺物(1)



第14図 1号住居状遺構出土遺物(2)



第15図 1号住居状遺構出土遺物(3)



第16図 1号住居状遺構出土遺物(4)

土製品は土偶の腕部片2点(470、473)が出土している。

石器は石鏃2点、石匙1点、石皿1点、敲磨器類1点、礫器1点、スクレイパー6点、石核1点、フレイク72点、Rフレイク7点、チップ6点が出土している。そのうち3点図示した。83は石鏃で、3類に相当する。先端部の片面には二次加工が施されていない。84はスクレイパーで2類に相当する。先端部の両面に二次加工が施されている。84は石匙である。横型の剥片を素材とし、縁辺部の両面に二次加工を施す。つまみ部も同様に両面から二次加工を施している。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

2号住居状遺構(第17～21・51図、写真図版5・24～26・37・38)

〈位置〉調査区中央、ⅡA10h～10gグリッドに位置する。

〈検出状況〉1号溝跡精査中に、その壁や底面から多量の土器が検出し、ⅡA10hグリッド付近を再度、クリーニングしたところ、黒褐色のプランを検出した。

〈重複関係〉1号溝跡と重複する。本遺構の方が古い。ただし1号溝跡は本遺構の上部に位置するので、壁上部を壊したにすぎない。

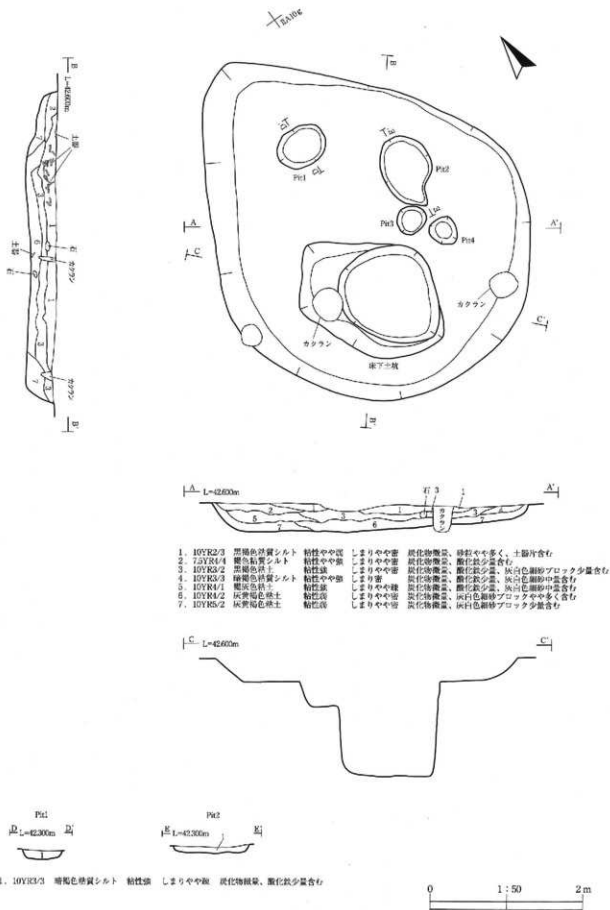
〈形態・規模〉北側が突出する不整な楕円形を呈する。規模は5.1×4.2mを測る。深さは検出面から最深38cmである。

〈堀土〉7層に分けられる。1・2層と3～5層、6・7層で主体土が異なる。したがって本遺構は一定の段階毎に埋没していったものと推測される。1層中には、多量の土器が混入していた。

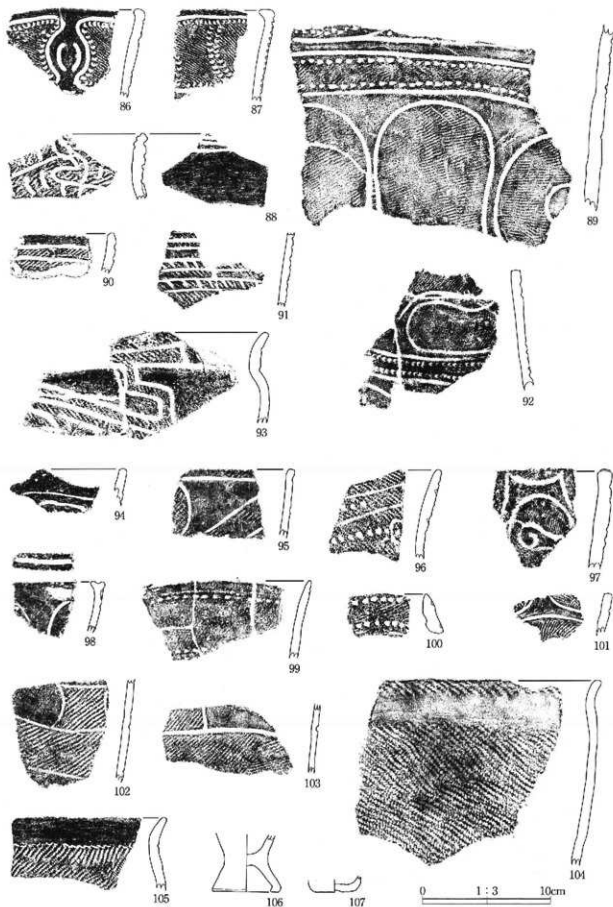
〈床面・壁〉Ⅲa層を床面とした。ほぼ平坦であるが西から東へと約10cm傾斜している。硬化面は認められない。壁は全周する。外へと緩やかに広がりながら立ち上がる。

〈柱穴〉4個確認した。配列に規則性はなく、また深さも床面から約10cmと、浅いものがほとんどである。埋土は暗褐色粘質シルトを主体とする単層である。

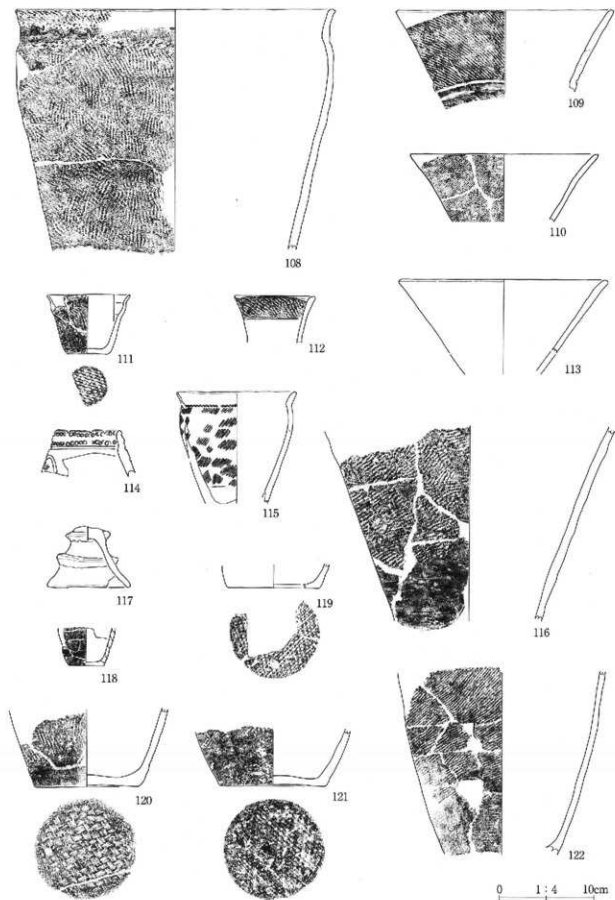
〈その他〉床面の南側に床下土坑が認められる。規模は開口部が2.1×1.6m、底面は径1.1mを測り、深さは床面から1.3mである。埋土は灰オリーブ～緑灰色の粘土を主体としており、また炭化物や土器が混入する。特に珪質頁岩製のフレイクが埋土中位から下位にかけて多量に出土した。



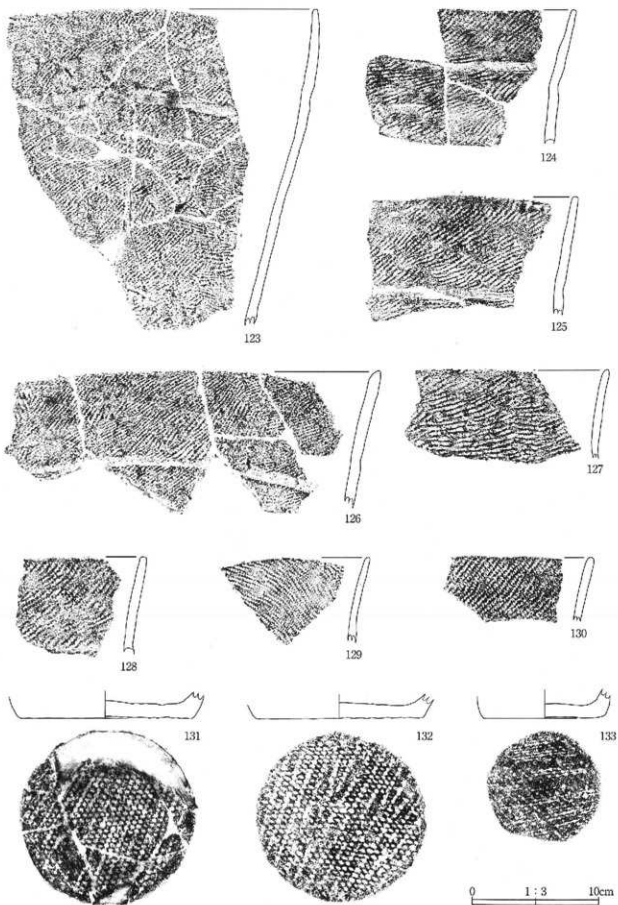
第17図 2号住居状遺構



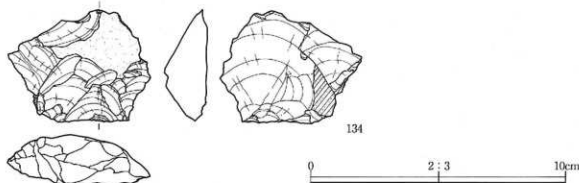
第18図 2号住居状遺構出土遺物(1)



第19図 2号住居状遺構出土遺物(2)



第20図 2号住居状遺構出土遺物(3)



第219図 2号住居状遺構出土遺物(4)

〈出土遺物〉縄文土器7678.05g出土している。出土量も多く、形態が復元できたものも認められるが、完形のものではなく、また出土状況にも特徴はない。48点を図示した。86、87は沈線による区画文が施され、区画内には縄文と刺突文が充填される。88は波状口縁部の波頂部片で、先端には表裏通して3条の沈線が巡る。外面には縄文の上から弧状文や入り組み文が描かれている。89は胴部の大形破片で、床下土坑内から出土している。沈線による区画文が施文され、区画内には縄文や刺突文が充填される。91は胴部片で縄文を施文し、数条の沈線が横位に巡る。沈線間には刺突文が充填される。92は口縁部がすままる形態の深鉢の胴部片で、縄文を施文後沈線による区画文や刺突文が巡る。95は深鉢の口縁部片で、帯縄文が巡り、縄文は充填技法で施文される。96は口縁部片で縄文施文後、沈線文と刺突文が充填される。97は大形の突起部分で沈線による入り組み文が施文される。99は摩滅が激しいが沈線と刺突文が平行して施文される。100も摩滅が激しいが、2段の刺突文が横位に巡り、その間に縄文が充填される。101～103は沈線による区画文が施文され、区画内には縄文が充填される。104は深鉢の大形破片で口縁部が無文化する他は縄文のみが施文される。105は口縁部は無文で、胴部との間には縄文原体が押圧される。106は台付き鉢を模したと思われるミニチュア土器である。107はミニチュア土器の底部片である。108は胴部上半が膨れ、口縁部が外反する。104と同様に口縁部下が無文化し、他は縄文が施文される。109、110、113は口縁部が外へ大きく開く形態である。109は口縁部下に沈線が施文される。111は小形の深鉢で外面には縄文のみが施文され、底面には網代痕が見受けられる。114は口縁部がすままる形態で、口縁部には2段に円形刺突が巡り、胴部には沈線による区画文が施文され、縄文が充填する。115は小形の深鉢で108とほぼ同じ器形を呈する。口縁部は無文で、胴部との境に縄文原体を押圧する。117は台付き鉢の台部片である。器面には2条の隆帯が巡る。118はミニチュア土器の胴部片で、器面は無文である。119～121は深鉢の底部片で、底面には網代痕が見受けられる。123～130は第Ⅵ群の深鉢である。131～133は深鉢の底面をみの破片で、いずれも網代痕が見受けられる。

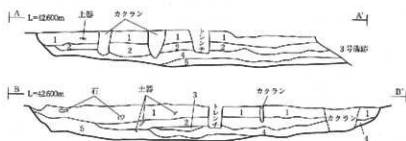
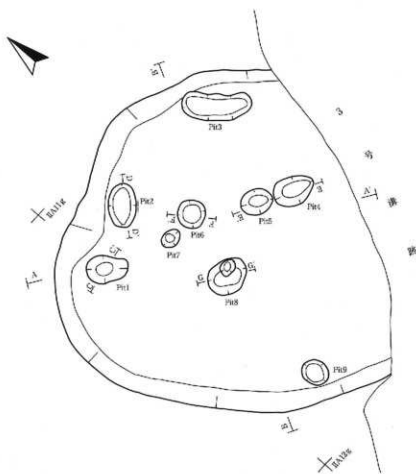
土製品は土製耳飾り1点(478)が出土している。

石器は石鏃2点、両極石器1点、礫器1点、スクレイパー2点、敲磨器類3点、石皿2点、フレイク90点、Rフレイク3点、チップ30点が出土している。そのうち両極石器1点を図示した。134は上下方向からのみ打撃が加えられている。

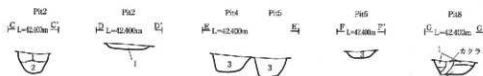
〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

3号住居状遺構(第22・23・51図、写真図版5・6・26・27・37・38)

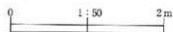
〈位置〉調査区中央、ⅡA11f～ⅡA11gグリッドに位置する。



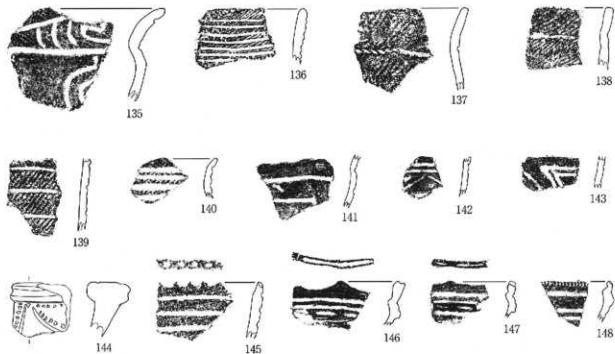
- | | | | | |
|------------|----------|-------|--------|------------------------|
| 1. 10YR3/2 | 茶褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物燻染、赤褐色中心 |
| 2. 10YR3/4 | 暗褐色粘土 | 粘性強 | しまりやや疎 | 炭化物燻染、炭化灰少量含む |
| 3. 10YR3/2 | 灰青色粘土 | 粘性強 | しまり疎 | 炭化物燻染、炭化灰少量含む |
| 4. 10YR2/3 | 黄褐色粘土 | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物燻染、炭化灰燻染含む |
| 5. 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物燻染、炭化灰燻染、黄灰白色粘土少量含む |



- | | | | | |
|------------|----------|-----|--------|-----------------|
| 1. 10YR3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物燻染、炭化灰少量含む |
| 2. 10YR4/2 | 灰青色粘土 | 粘性強 | しまりやや疎 | 炭化物燻染、黄灰色粘土少量含む |
| 3. 10YR3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや疎 | 炭化物燻染、黄灰色粘土少量含む |



第22図 3号住居状遺構



0 1:3 10cm

〈検出状況〉Ⅲ a層上面に黒褐色のプランで検出した。

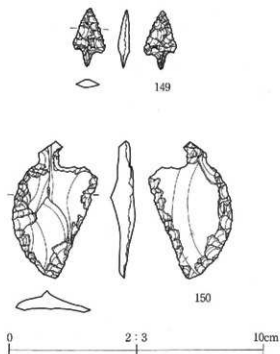
〈重複関係〉3号溝跡、4号住居状遺構と重複する。3号溝跡より古く、4号住居状遺構より新しい。

〈形態・規模〉3号溝跡により南東側を削平されているため、全容が定かではない。検出できた部分是不整な楕円形を呈し、規模は4.7×4.1mを測る。深さは検出面から最深49cmである。

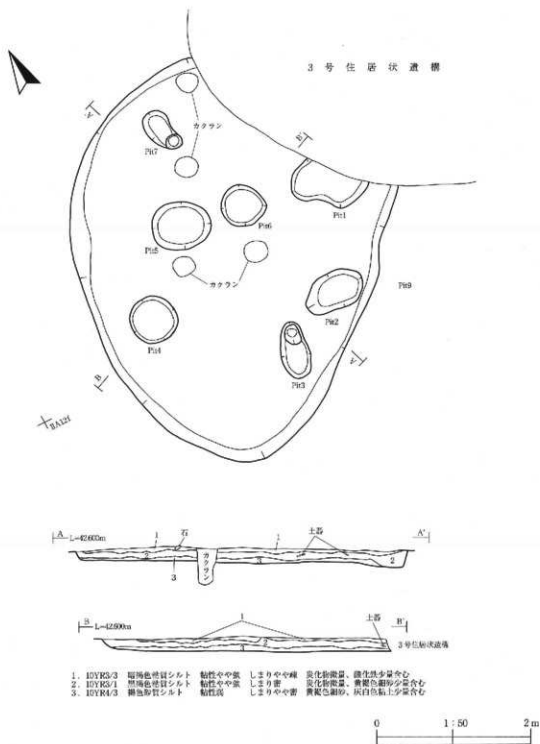
〈埋土〉5層に分けられる。2層以下は粘土が主体となる。全体的に炭化物や酸化鉄が混入する。

〈床面・壁〉Ⅳ a層を床面とする。床面は中央部分がややくぼんでいる。硬化面は認められない。壁は3号溝に壊されている南東側を除き、全周する。緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

〈柱穴〉9個確認した。配列は不規則であるが、北西から南東方向に集中する傾向が認められる。長軸60~80cmの楕円形を呈するもの(Pit 2・3・4)も認められる。深さも5~25cmと様々に規則性がない。埋土は暗褐色粘質シルトを主体とし、単層か、2層に分かれる。

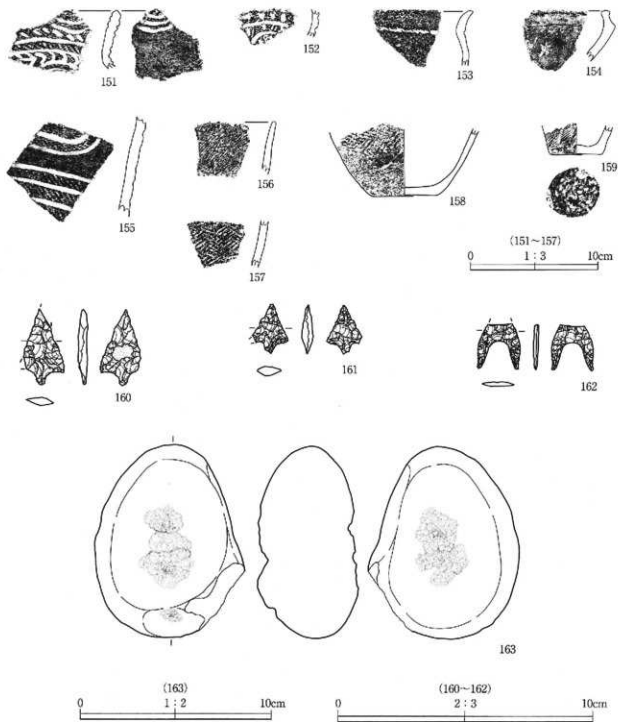


第23図 3号住居状遺構出土遺物



第24図 4号住居状遺構

〈出土遺物〉縄文土器、205447gが出土している。いずれも小片である。14点図示した。135は胴がふくらみ、口縁部が外反する深鉢の口縁部片である。口縁部は縄文施文後、沈線による文様が施される。136は口縁部片で縄文施文後に横位に沈線文を平行に数条巡らせている。137、138は器面に縄文が施文され、口縁部と胴部の境に縄文原体が押圧されている。139は深鉢の胴部片で、縄文施文後、横位の沈線が数条巡る。144は口唇部に付く大型突起で端部が平坦な円形を呈する。口縁部には刺突と沈線による文様が描かれている。145～148は第IV群に比定される土器群で、145は深鉢で口唇部に



第25図 4号住居状遺構出土遺物

は押圧文が巡り、口縁部には沈線が横位に巡る。146～148は鉢の口縁部片で沈線が横位に巡る。他に土鍾が1点出土している（482）。正表面と側面にそれぞれ十字に溝を巡らせている。

石器は石鏃3点、石匙1点、スクレイパー1点、敲磨器類3点、フレイク11点、Rフレイク3点が出土している。2点図示した。148は完形の石鏃で1類である。149は縦型の石匙で縁辺部の両面に二次加工が施されている。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

4号住居状遺構(第24・25図、写真図版6・27)

〈位置〉調査区中央、II A11 f～II A12 g グリッドに位置する。

〈検出状況〉III a 上面に暗褐色のプランで検出した。また重複する3号住居状遺構の壁面に本遺構の床面や壁の立ち上がりをも認めた。

〈重複関係〉3号住居状遺構と重複する。本遺構の方が古い。

〈形態・規模〉東側の一部を3号住居状遺構により壊されており、全容は定かではないが、検出できた部分は不整な楕円形を呈し、規模は5.4×4.2mを測る。深さは検出面から最深21cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。

〈床面・壁〉IV a 層面を床面とする。ほぼ平坦である。硬化面は認められない。壁は3号住居状遺構に壊されている北東側を除き、全周する。やや外へと開きながら直立気味に立ち上がる。

〈柱穴〉7個確認した。床面上から偏りなく分布するが、規則性は見いだせない。断面図は図示していないが、深さは15cm前後を測る。埋土は暗褐色粘質シルトの単層であった。

〈出土遺物〉縄文土器、3057.92g出土している。いずれも小片である。9点図示した。151は深鉢の波状口縁部片である。波頂部の内外面に沈線が横位に巡り、口縁部は縄文施文後、沈線文が巡る。152は胴部片で縄文施文後、沈線と刻みが巡る。153は口縁部と胴部の境に縄文原体が押圧されている。155は胴部片で、沈線を平行に施文し、沈線間には縄文が施文される。

石器は石鏃2点、スクレイパー1点、敲磨器類2点、フレイク12点、Rフレイク1点が出土した。3点図示した。160は珪質頁岩製の石鏃で、基部の一部が欠損する。161は1類に相当する石鏃である。160と比べると長さが短い。162は先端部を欠損する石鏃で、赤色頁岩製である。6類に相当し、基部が長い。162は敲磨器類で、正表面に磨痕、凹み痕が認められる。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

(3) 土 坑

1号土坑(第26図、写真図版7)

〈位置〉調査区中央、I A20 i グリッドに位置する。4m南側に1号住居跡がある。

〈検出状況〉III a 層上面で、黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉楕円形を呈し、規模は1.7×1.4mを測る。深さは検出面から最深28cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。粘質シルト主体と細砂主体とに二分される。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦で、中央部がやや窪む。壁は全周する。

〈出土遺物〉縄文土器が343.76g出土している。いずれも小片なので図示していない。石器はRフレイク1点が出土したが、図示していない。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期に比定される。

2号土坑(第26・31図、写真図版7・27・39)

〈位置〉調査区中央、II A4 i、II A5 i グリッドに位置する。1m南側に3号土坑がある。

〈検出状況〉III a 層上面で、黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な楕円形で、規模は3.4×1.5mを測る。深さは検出面から最深53cmである。

〈埋土〉5層に分けられる。おおむね暗～黒褐色粘質シルトを主体とする。

〈底面・壁〉底面は南側はほぼ平坦であるが、北側は一段下がる。壁は全周する。

〈出土遺物〉縄文土器が4251.25g出土している。出土量が多いが小片が多く、器形が復元できたのは164のみである。6点図示した。164は器面には条線による曲線文が描かれる。165はやや古く、Ⅱ群に相当し、口縁部に連鎖状隆帯が付く。166は沈線と半円形の刺突文が巡る。167は沈線による区画が描かれる。石器は石鏝1点、スクレイパー1点、敲磨器類2点、Rフレイク1点が出土している。2点を図示した。286は縦型の剥片を素材としたスクレイパーである。287は敲磨器類で4類に相当する。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期に比定される。

3号土坑（第26・31・51図、写真図版7・27・37）

〈位置〉調査区中央、ⅡA4i、ⅡA5iグリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲa層上面で、暗褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な楕円形で、規模は4.4×1.8mを測る。深さは検出面から最深47cmである。

〈埋土〉6層に分けられる。おおむね暗～黒褐色粘質シルトを主体する。

〈底面・壁〉底面は南側はほぼ平坦で、東側がやや下がる。壁は全周する。

〈出土遺物〉縄文土器、1198.10g出土している。1点図示した。170はミニチュア土器の底部片である。土製品は分銅形土製品1点（489）が出土している。石器はフレイク1点が出土したが図示していない。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期に比定される。

4号土坑（第27・31図、写真図版7・27）

〈位置〉調査区中央、ⅡA5iグリッドに位置する。2m北側に3号土坑がある。

〈検出状況〉Ⅲa層上面で、暗褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な楕円形で、規模は2.2×1.3mを測る。深さは検出面から最深45cmである。

〈埋土〉8層に分けられる。おおむね暗～黒褐色粘質シルトを主体する。

〈底面・壁〉底面は凹凸が激しく、北側はさらにくぼんでいる。壁は全周する。

〈出土遺物〉縄文土器が419.96g出土している。5点図示した。171～173は胴部片で、沈線による区画文が描かれる。174は口縁部片で沈線により方形の区画文を描き、区画内には縄文が施文される。石器はフレイク4点が出土したが、図示していない。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

5号土坑（第27・31・32・51図、写真図版8・27・28・37・39）

〈位置〉調査区中央、ⅡA8h、ⅡA8iグリッドに位置する。本遺構は東側が調査区外に及ぶ。

〈検出状況〉Ⅲa層上面で、暗褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉2号住居跡と重複する。本遺構の方が新しい。

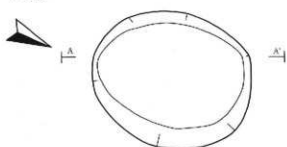
〈形態・規模〉東側が調査区外に及んでおり、全容は定かではない。検出部分は不整な楕円形を呈し、規模は2.5×2.2m、深さは検出面から最深44cmである。

〈埋土〉6層に分けられる。暗～黒褐色粘質シルトを主体とし、埋土下位には粘土層が堆積する。

〈底面・壁〉底面はやや歪で、北西から南東へと緩やかに傾斜する。壁は東側を除き全周する。

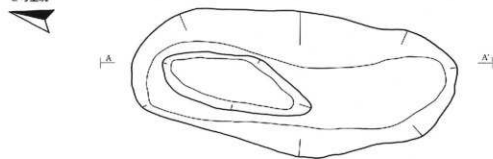
〈出土遺物〉縄文土器が9004.36g出土している。出土量は多いが小片がほとんどである。13点図示した。177は胴部片で、隆帯と刺突が巡る。胴部には入り組み文が施文される。178は口縁部に刺突が巡り、胴部に沈線による曲線が横位に巡る。179は縄文施文後、数条の沈線を平行に巡らす。180は波状

1号土坑



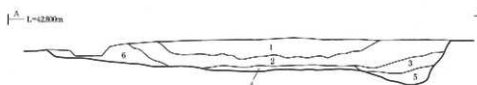
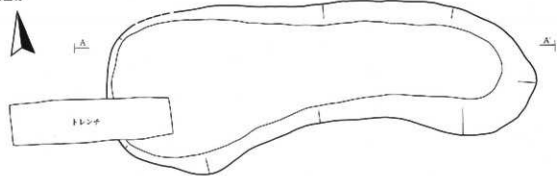
1. 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強、しまりやや強 炭化物炭素含む、炭化物炭素含む
2. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強、しまりやや強 粘性強、しまりやや強
3. 10YR4/1 黄灰色砂礫 粘性弱、しまりやや強 炭化物炭素、土器片含む

2号土坑

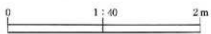


1. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強、しまりやや強 炭化物炭素、オリーブ黒色粘土少量含む
2. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強、しまりやや強 炭化物炭素、オリーブ黒色粘土少量、黄褐色砂少量含む
3. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強、しまりやや強 炭化物炭素、酸化鉄少量含む
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘二 粘性強、しまりやや強 炭化物炭素、酸化鉄炭素含む
5. 25G2/1 黒色粘土 粘性強、しまりやや強 炭化物炭素含む

3号土坑

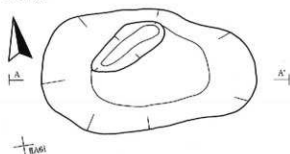


1. 10YR5/4 暗褐色粘質シルト 粘性強、しまりやや強 炭化物炭素、オリーブ黒色粘土少量含む
2. 10YR5/3 暗褐色粘質シルト 粘性強、しまりやや強 炭化物炭素、オリーブ黒色粘土やや多く含む
3. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強、しまり強 オリーブ黒色粘土少量、土器片含む
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘土 粘性強、しまりやや強 酸化鉄少量含む
5. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強、しまりやや強 オリーブ黒色粘土少量含む
6. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強、しまりやや強 炭化物炭素含む



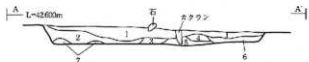
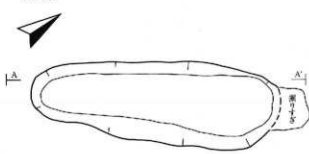
第26図 1～3号土坑

4号土坑



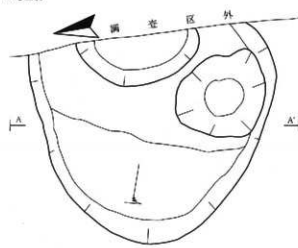
1. 10YR5/1 黒褐色粘土 粘性強 しまり密 酸化鉄少量含む
2. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや強 炭化物微量
3. 10YR2/3 暗褐色粘質シルト ナリープ黒色粘土中量、下部に酸化鉄少量含む
粘性やや強 しまりやや密 炭化物微量
4. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 黄褐色少量含む
5. 10YK3/1 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 酸化鉄少量含む
炭化鉄少量含む
6. 10YR2/3 黒褐色粘土 粘性やや強 しまりやや弱 黄褐色少量含む
7. 10YR4/4 暗褐色砂 粘性弱 しまり密 暗褐色粘質シルト
ブロック少量、酸化鉄少量含む
8. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物微量
黄褐色粘質多量含む

6号土坑



1. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物中量、土砂少量含む
2. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物微量含む
3. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性強 しまり密 暗褐色粘土中量含む
4. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 暗褐色粘土中量含む
5. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性やや強 しまり密 暗褐色粘土中量含む
6. 10YR5/8 黄褐色砂質シルト 粘性強 しまりやや密 暗褐色粘土中量含む
7. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密
8. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性弱 しまり疎

5号土坑

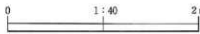


1. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 炭化物ブロックで微量、酸化鉄中量含む
2. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物中量、土砂片含む
3. 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 暗褐色中量含む
4. 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 炭化物中量、酸化鉄少量含む
5. 25Y4/1 黄褐色粘土 粘性強 しまりやや強 炭化物微量、土砂片含む
6. 25Y3/1 暗褐色粘土 粘性強 しまりやや弱 酸化鉄少量、土砂片含む

7号土坑

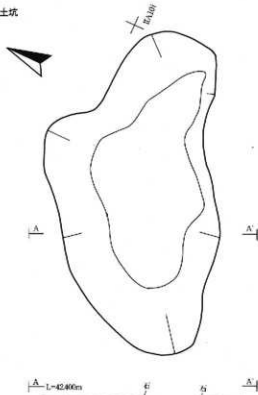


1. 10YR3/1 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや密 酸化鉄多量含む
2. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 酸化鉄多量含む
3. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性弱 しまり密 酸化鉄少量、黄褐色粘質多量含む
4. 7.5YR6/8 黄褐色砂 粘性弱 しまり密 暗褐色粘質シルト多量含む
5. 5Y3/2 ナリープ黄褐色シルト 粘性弱 しまり密 酸化鉄少量含む
6. 7.5Y4/2 灰ナリープ黄褐色砂 粘性弱 しまり密 酸化鉄少量含む



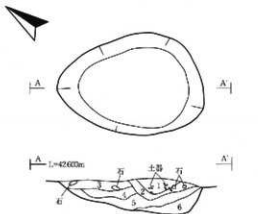
第27図 4～7号土坑

8号土坑



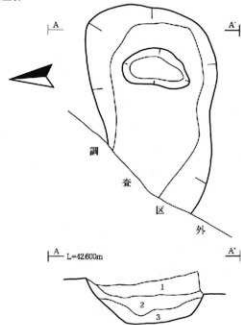
1. 10YR6/4 褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 酸化鉄少量、褐色粘土少量含む
2. 5YR4/1 灰白色粘土 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、酸化鉄少量、
3. 5YR4/3 暗オリーブ色粘土 粘性強 しまりやや密 黄褐色細砂中量、土器片含む
4. 5Y4/2 灰オリーブ色粘土 粘性強 しまりやや密 黄褐色細砂少量含む
5. 5Y4/4 灰オリーブ色細砂 粘性弱 しまりやや密 灰オリーブ色粘土少量、土器片含む
6. 5Y3/4 オリーブ色細砂 粘性弱 しまりやや疎 灰オリーブ色粘土微量含む

10号土坑



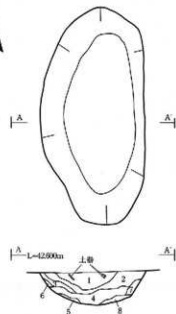
1. 10YR6/6 褐色砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 酸化鉄少量、褐色粘土少量含む
2. 10YR5/1 褐色粘土 粘性やや強 しまりやや密 褐色粘質シルト多量、土器片含む
3. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 灰黄褐色粘土多量
4. 10YR3/6 黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 灰黄褐色粘土多量
5. 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性弱 しまり密
6. 10YR4/4 褐色細砂 粘性弱 しまり密

9号土坑

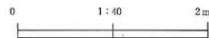


1. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり疎 炭化物微量、酸化鉄微量含む
2. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、オリーブ褐色粘土少量含む
3. 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや密 炭化物微量、灰白色粘土少量含む

11号土坑



1. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、暗赤褐色粘質シルト微量、土器片含む
2. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密 炭化物微量含む
3. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまり密
4. 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密
5. 10YR5/4 褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや密
6. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密
7. 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや密
8. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり疎 炭化物微量含む



第28図 8~11号土坑

口縁の波頂部に付く突起片である。181は胴部片で入り組み文が施文される。185はⅥ群で口縁部に1箇所、補修孔が認められる。187は台付き深鉢の台部で、無文である。土製品は土偶の腕部片が1点(469)出土している。石器はスクレイパー3点、フレイク29点、Rフレイク3点が出土している。1点図示した。288は横型の剥片を素材としたスクレイパーである。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

6号土坑(第27・31図、写真図版8・28)

〈位置〉調査区中央、ⅡA9hグリッドに位置する。1m東側に1号住居状遺構、8号土坑がある。

〈検出状況〉Ⅲa層上面で、黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉7号土坑と重複する。本遺構の方が新しい。

〈形態・規模〉楕円形を呈し、規模は2.6×0.9mを測る。深さは検出面から最深19cmである。

〈埋土〉7層に分けられる。暗～黒褐色粘質シルトを主体とし、褐色砂質シルトが混入する。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は掘りすぎた北東側の一部を除き、全周している。

〈出土遺物〉縄文土器が2663.11g出土している。4点図示した。189は深鉢の口縁部片で縄文施文後、数条の沈線を平行に巡らす。192は口縁部に付く突起である。石器はフレイク10点が出土しているが、図示していない。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

7号土坑(第27・32・51図、写真図版8・28・37)

〈位置〉調査区中央、ⅡA9hグリッドに位置する。1m北東側に2号住居跡がある。

〈検出状況〉Ⅲa層上面で、黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉6号土坑と重複する。本遺構の方が古い。

〈形態・規模〉楕円形を呈し、規模は2.5×2.3mを測る。深さは検出面から最深60cmである。

〈埋土〉6層に分けられる。埋土は暗～黒褐色粘質シルト主体と、砂質シルト・細砂主体とに二分される。

〈底面・壁〉底面は凹凸が激しく、安定しない。壁は6号土坑に壊された南壁以外は全周する。

〈出土遺物〉縄文土器が3558.95g出土している。出土量は多いが全て小片であった。7点図示した。193、194は平行沈線を横位に巡らす。196は口唇部には刻みが巡り、口縁部は4条の沈線が横位に巡る。土製品は1点出土している(483)。用途は不明である。石器はスクレイパー2点、礫器1点、石皿1点、フレイク20点、Rフレイク1点、チップ1点が出土しているが、図示していない。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

8号土坑(第28・32・33・38・51図、写真図版8・28・29・37・39)

〈位置〉調査区中央、ⅡA10hグリッドに位置する。1m北側に6・7号土坑がある。

〈検出状況〉Ⅲa層上面で、褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉1号住居状遺構と重複する。本遺構の方が新しい。

〈形態・規模〉歪な不整形円形で、規模は3.4×1.8mを測る。深さは検出面から最深70cmである。

〈埋土〉6層に分けられる。1層は粘質シルト主体で、2層以下は粘土や細砂が主体となる。

〈底面・壁〉底面は丸く窪んでおり、壁も含めて断面が半円状を呈する。壁は全周する。

〈出土遺物〉縄文土器が5065.57g出土している。211・212のように器形が復元できるものは少なく、ほとんどが小片である。14点図示した。200～203は沈線による曲線の区画文が描かれる。205はⅥ群の深鉢の口縁部片で口縁部は無文化し、胴部との境に縄文原体が押圧される。207は口縁部に刺突文が充填される。211はⅥ群に比定される深鉢である。212はミニチュア土器で、台付きの鉢を模してい

る。土製品は土偶の脚部片が1点(476)出土している。石器は石鏃2点、両極石器1点、スクレイパー2点、フレイク22点、Rフレイク2点が出土している。4点図示した。289は石鏃で、基部の一部を欠損する。290は円形のスクレイパーである。291は縦型の剥片を素材とするスクレイパーである。292はフレイクで、3a類に相当する。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

9号土坑(第28・33・34図、写真図版9・29・39)

〈位置〉調査区中央、II A10hグリッドに位置する。1m北東側に1号焼土がある。

〈検出状況〉Ⅲa層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉3号溝と重複する。本遺構の方が古い。

〈形態・規模〉本遺構は3号溝に壊されており、全容は定かではないが、検出できた部分是不整な楕円形を呈し、規模は2.1×1.8mを測る。深さは検出面から最深47cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。黒褐色粘質シルトが主体となり、炭化物が混入する。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は3号溝に壊された西壁の一部を除き全周する。

〈出土遺物〉縄文土器が9892.98g出土している。出土量は多く、214や218のように器形が復元できるものも認められる。14点図示した。214は外へと大きく広く深鉢で、波状口縁を呈し、液頂部には瘤状の突起が付く。縄文施文後、複数条の沈線が横位に巡る。216は口縁部片で、器面に数条の条線が曲線や幾何学的な文様を描いている。218は口縁部が欠損する甕で、入り組み文が描かれる。石器はスクレイパー2点、石核1点、フレイク24点、Rフレイク5点、チップ2点が出土している。1点を図示した。293は黒曜石製のフレイクで3c類に相当する。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

10号土坑(第28・34図、写真図版9・30・39)

〈位置〉調査区中央、II A9gグリッドに位置する。2m南西側に13号土坑が隣接する。

〈検出状況〉Ⅲa層上面に褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉1号溝と重複する。本遺構の方が古い。1号溝には壁の上面を壊されたにすぎない。

〈形態・規模〉卵形を呈し、規模は1.5×1.1mを測る。深さは検出面から最深32cmである。

〈埋土〉6層に分けられる。黄褐色砂質シルトや褐色砂質シルトを主体とする。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦であるが、北西から南東側にかけて傾斜し、比高差は18cmを測る。壁は全周する。北壁付近は緩やかに外へとひらきながら立ち上がり、南壁付近はほぼ直立気味である。

〈出土遺物〉縄文土器が2417.95gが出土している。4点を図示した。228は口縁部に付く大形突起で、先端部が円盤状を呈する。口縁部には沈線と刺突文により文様が描かれている。石器はフレイク3点、Rフレイク1点出土しているが図示していない。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

11号土坑(第28・34・39図、写真図版9・30)

〈位置〉調査区中央、II A9gグリッドに位置する。2m西側に10号土坑がある。

〈検出状況〉Ⅲa層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

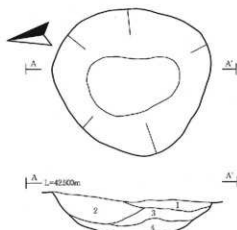
〈形態・規模〉楕円形を呈し、規模は2.3×1.1mを測る。深さは検出面から最深37cmである。

〈埋土〉8層に分けられる。主体は黒～暗褐色粘質シルトで、砂質シルトが混入する。

〈底面・壁〉底面は丸く窪んでおり、壁も含めて断面が半円状を呈する。壁は全周する。

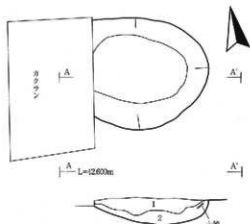
〈出土遺物〉縄文土器が1773.07g出土している。4点図示した。232はVI群に相当し、口縁部には縄文

12号土坑



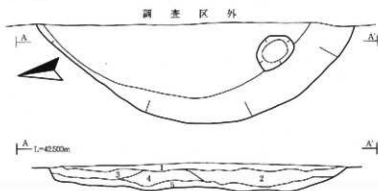
1. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性や中級 しまりやや弱 炭化物微量、褐色細砂少量含む
2. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性や中級 しまり弱 炭化物微量、褐色細砂多量含む
3. 10YR4/4 褐色細砂 粘性質 しまりやや弱 炭化炭少量、暗褐色粘質シルトアロックス中量含む
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 粘性質 しまりやや弱 炭化炭少量、暗褐色粘質シルトアロックス少量含む

14号土坑



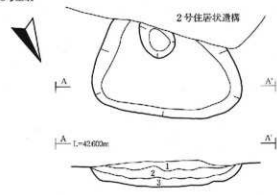
1. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや弱 炭化物少量、粘土粒微量、黄褐色細砂少量含む
2. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや弱 炭化物微量、炭化炭少量、灰白色粘土少量含む
3. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性質 しまりやや弱 炭化物微量、灰白色粘粒中量含む

16号土坑



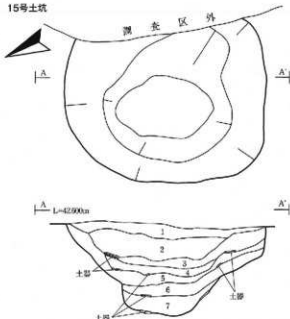
1. 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや弱 炭化物微量含む
2. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや弱 炭化物微量、黄褐色細砂少量含む
3. 10YR3/2 暗褐色粘質シルト 粘性質 しまりやや弱 炭化物微量、灰白色粘粒少量含む
4. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまりやや弱 炭化物微量、灰白色粘土中量含む
5. 10YR4/3 褐色粘土 粘性質 炭化物微量、炭化炭少量含む

13号土坑



1. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性質 しまり弱 炭化物微量、灰色粘土アロックス中量含む
2. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 粘性質 しまりやや弱 炭化物微量、灰色粘粒やや多く含む

15号土坑



1. 10YR2/3 暗褐色粘質シルト 粘性質 しまりやや弱 炭化物微量含む
2. 10YR3/2 暗褐色粘質シルト 粘性質 しまりやや弱 炭化物微量含む
3. 10YR3/1 暗褐色粘質シルト 粘性質 しまりやや弱 炭化物微量含む
4. 10YR4/1 褐色粘土 粘性質 しまりやや弱 炭化物微量、炭化炭少量含む
5. 10YR3/1 暗褐色粘土 粘性質 しまりやや弱 炭化物微量、炭化炭少量含む
6. 25Y3/1 黒褐色粘土 粘性質 しまり弱 炭化物微量、炭化炭少量含む
7. 75Y4/1 灰色粘質シルト 粘性質 しまり弱 炭化物微量、粘土アロックス多量含む

第29図 12~16号土坑

が施文され、頸部は無文化する。235は台付鉢の台部片で沈線が2条巡る。石器は石鏃1点、磨製石斧1点、石皿1点、フレイク3点、Rフレイク2点が出土している。2点図示した。294は磨製石斧で刃部を欠損し、体部片面は大きく剝離する。295は石皿である。いびつな形状の扁平鏢を用い、平坦面には浅い凹み痕が見受けられる。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

12号土坑（第29・35・39図、写真図版9・30・39）

〈位置〉調査区中央、II A 9 g、II A 9 h グリッドに位置する。2 m西側に11号土坑がある。

〈検出状況〉Ⅲ a層上面で、黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉やや歪な円形を呈し、規模は径1.6 mを測る。深さは検出面から最深40 cmである。

〈埋土〉4層に分けられる。1・2層は粘質シルト主体で、3・4層は細砂が主体となる。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は全周する。大きく外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉縄文土器が1404.54 g出土している。いずれも小片である。5点図示した。236は縄文を施文後、数条の沈線を横位に巡らせる。237は口縁部片で棒状工具による円形刺突文が充填される。石器は敵石器類1点、フレイク1点が出土している。1点図示した。296は敵石器類で1類に相当する。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

13号土坑（第29・35図、写真図版10・30）

〈位置〉調査区中央、II A 11 f、II A 12 g グリッドに位置し、2 m北東側に10号土坑がある。

〈検出状況〉Ⅲ a層上面に暗褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉2号住居状遺構と重複する。本遺構の方が新しい。

〈形態・規模〉南側を2号住居状遺構により壊されており、全容は定かではない。検出できた部分は不整な楕円形を呈し、規模は1.6×1.0 mを測る。深さは検出面から最深22 cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。各層中に混入物が多く、特に1層中には焼土粒が含まれる。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は2号住居状遺構に壊された南西壁を除き全周する。

〈出土遺物〉縄文土器が14402.59 g出土している。いずれも小片である。3点図示した。241は縄文施文後、横位の沈線が巡る。242は口唇部に半球状の突起が付く口縁部片である。沈線による区画文が施文され、区画内には刺突が充填される。243は沈線によるクランク状の区画文が描かれる。石器はRフレイク1点出土しているが、図示していない。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

14号土坑（第28・35・40図、写真図版10・30・39）

〈位置〉調査区中央、II A 10 g、II A 10 h グリッドに位置し、1 m北側に11・12号土坑がある。

〈検出状況〉Ⅲ a層上面に暗褐色のプランで検出した。西側を攪乱により壊されている。

〈重複関係〉なし。

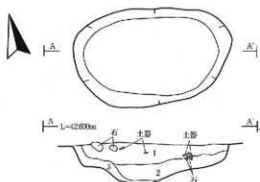
〈形態・規模〉検出部分は楕円形を呈し、規模は1.2×1.2 mを測る。深さは検出面から最深27 cmである。

〈埋土〉2層に分けられる。暗〜黒褐色粘質シルトを主体とする。

〈底面・壁〉底面は丸く窪んでいる。壁は攪乱に壊された東壁を除き全周する。

〈出土遺物〉縄文土器が968.2 g出土している。1点図示した。244は第VI群に相当する深鉢の口縁部片である。石器は石皿類1点（297）が出土している。297は平面形は楕円形を呈し、全体の3分の1を欠損する。使用面は磨痕により、平らである。

17号土坑



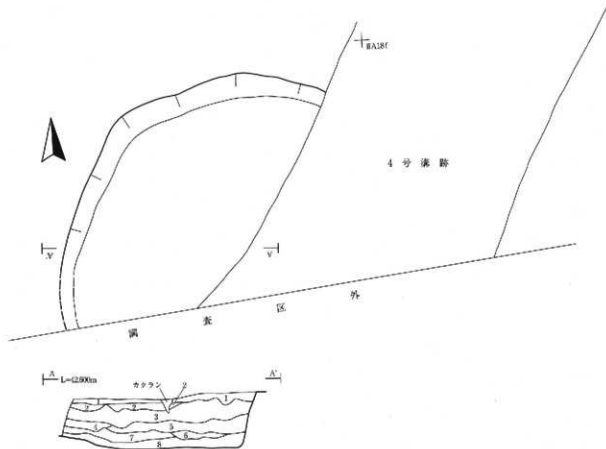
1. 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 粘性强 しまり密 炭化物微量、黄褐色細砂中量含む
2. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、黄褐色細砂やや多く含む
3. 10YR2/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 黄褐色細砂やや多く含む

18号土坑

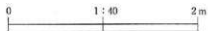


1. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや疎 炭化物微量、灰白色粘土少量含む
2. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性强 しまり密 黄褐色細砂中量含む

19号土坑



1. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 炭化物微量、砂少量含む
2. 25GY2/1 黒色粘土 粘性强 しまりやや密 酸化鉄少量含む
3. 10G2/1 緑灰色粘土 粘性强 しまりやや密 炭化物微量、酸化鉄少量含む
4. 5G2/1 緑褐色粘土 粘性强 しまりやや密 炭化物少量、酸化鉄中量含む
5. 5G4/1 暗褐色粘土 粘性强 しまりやや密 炭化物少量、酸化鉄中量含む
6. 25GY5/1 オリーブ灰色粘土 粘性强 しまりやや密 炭化物中量含む
7. 10YR2/1 黒色粘土 粘性强 しまりやや密 炭化物多量含む
8. 25GY5/1 オリーブ灰色粘土 粘性强 しまりやや疎 炭化物少量、酸化鉄少量含む



第30図 17～19号土坑

2号土坑



164



165



166



168



167



169



3号土坑



170

4号土坑



171



172



173

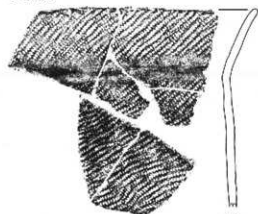


174



175

5号土坑



176



177



178



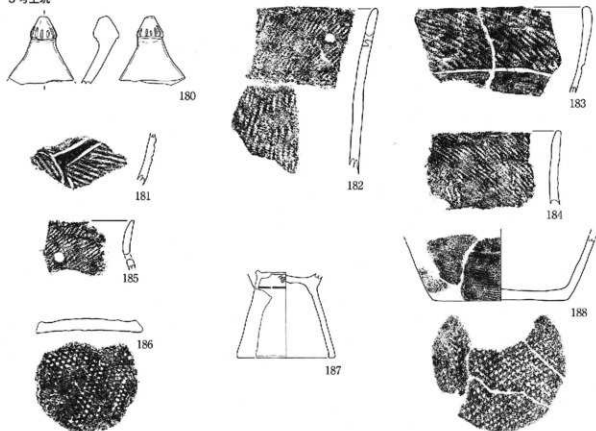
179

(164)
0 1:4 10cm

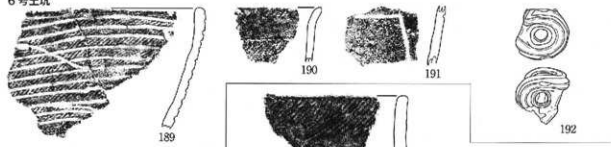
0 1:3 10cm

第31図 土坑出土遺物(1)

5号土坑



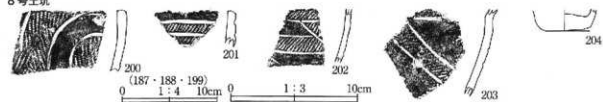
6号土坑



7号土坑

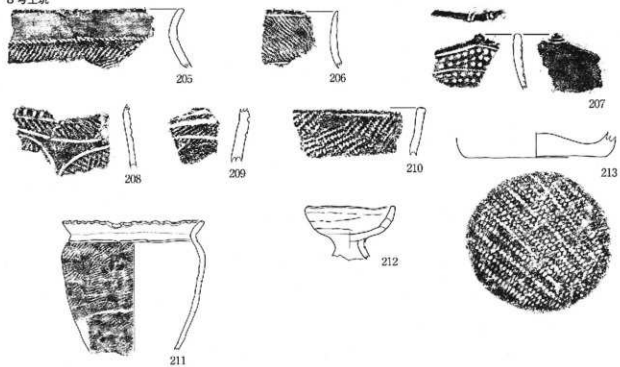


8号土坑

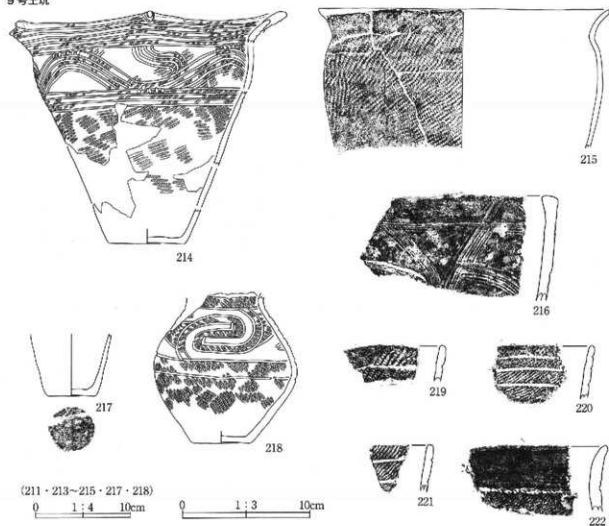


第32図 土坑出土遺物(2)

8号土坑

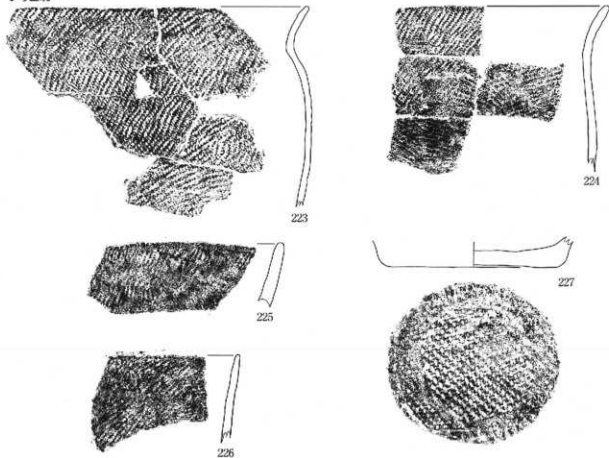


9号土坑

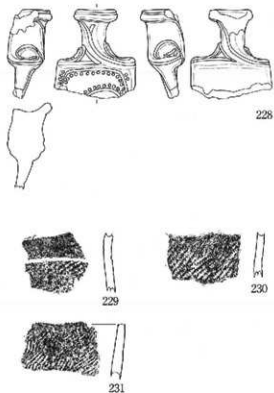


第33図 土坑出土遺物(3)

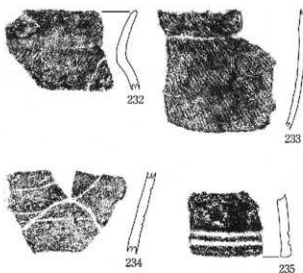
9号土坑



10号土坑



11号土坑



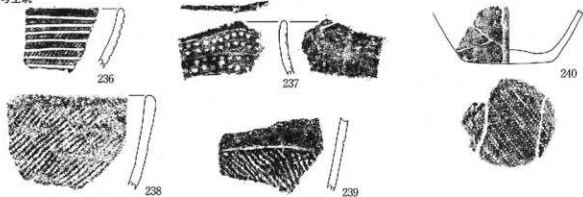
0 1:3 10cm

(223・224)

0 1:4 10cm

第34図 土坑出土遺物(4)

12号土坑



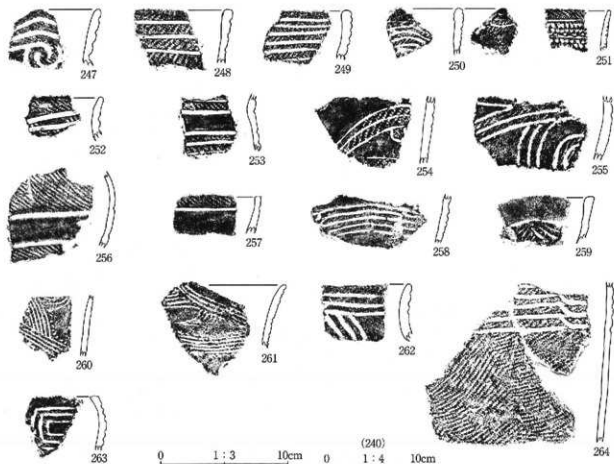
13号土坑



14号土坑



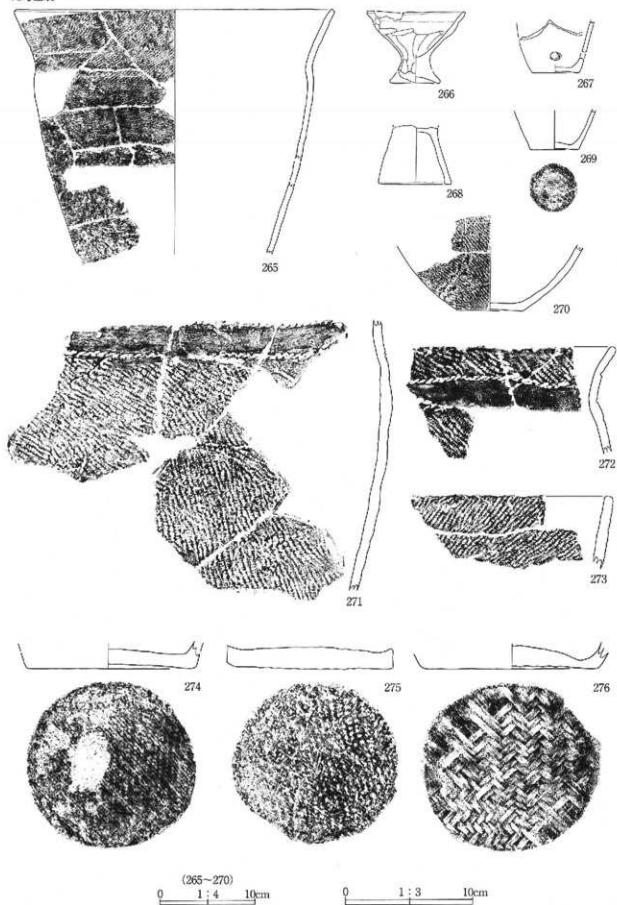
15号土坑



0 1:3 10cm 0 (240) 1:4 10cm

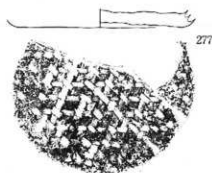
第35図 土坑出土遺物(5)

15号土坑

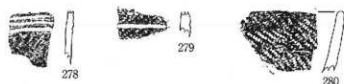


第36図 土坑出土遺物(6)

15号土坑



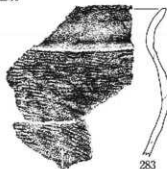
16号土坑



18号土坑



19号土坑



0 1:3 10cm

第37図 土坑出土遺物(7)

〈時期〉出土土器から縄文時代後期に比定される。

15号土坑(第29・35~37・40・51図、写真図版10・30・31・37・39)

〈位置〉調査区中央、II A11g、II A11h グリッドに位置する。東側の一部は調査区外に及ぶ。

〈検出状況〉III a 層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉東側の一部が調査区外に及んでおり、全容は定かではない。検出できた部分は不整な円形を呈し、規模は径2.1mを測る。深さは検出面から最深92cmである。

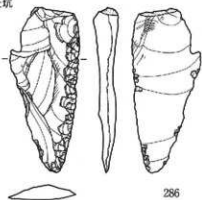
〈埋土〉7層に分けられる。黒褐色粘質シルト主体とし、酸化鉄を多く含む。

〈底面・壁〉底面は中央部分がくぼんでおり、さらにその下は平坦である。壁は調査区外に及ぶ東壁を除き全周する。

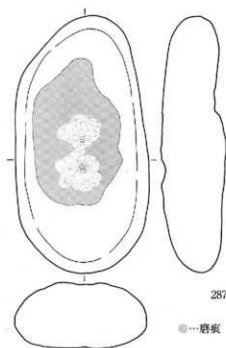
〈出土遺物〉縄文土器が16500.04g出土している。土坑のなかでは最も出土量が多く、265や266のように器形が復元できるものも認められる。33点図示した。245~249は縄文を施文後、沈線により曲線文を描いている。251は棒状工具による円形の刺突文が充填される。258は横位に巡る沈線間に縦位の弧状沈線が連結する。260、261は細い沈線が多重に曲線を描いている。263は方形の文様が描かれている。265はVI郡に相当する深鉢で縄文のみが施文される。266は無文の台付鉢である。267は底部に穿孔が1箇所認められる。268は無文の台付鉢の破片である。271・272も第VI群の深鉢で、口縁部と胴部とを2条の縄文押圧文で区画し、その間は無文となる。274~277は深鉢の底面の破片で、本遺構からの出土量が突出して多かった。いずれも網代痕が見受けられる。土製品は土偶の腰部の破片が1点(468)みつかっている。無文である。石器は石鏃1点、スクレイパー2点、敲磨器類1点、石皿1点、フレイク17点、Rフレイク2点が出土している。3点図示した。298は横型の剥片を素材とするスクレイパーである。299は縦型のスクレイパーで片面には二次加工がほぼ全周する。300はフレイ

2 縄文時代の遺構・遺物

2号土坑



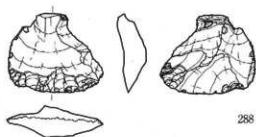
286



287

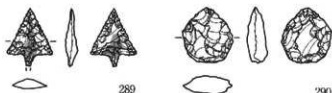
●…磨痕

5号土坑



288

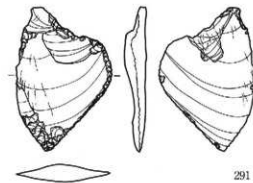
8号土坑



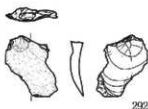
289



290



291

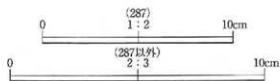


292

9号土坑

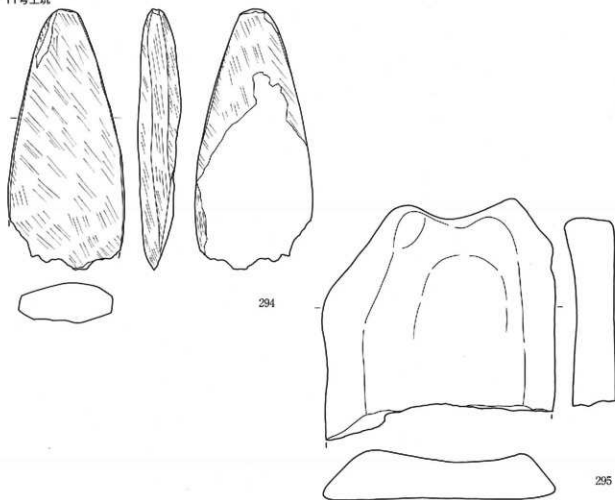


293

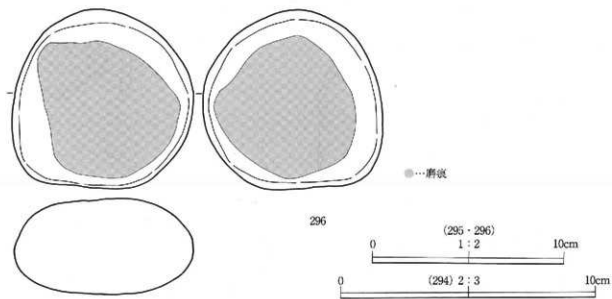


第38図 土坑出土遺物(8)

11号土坑

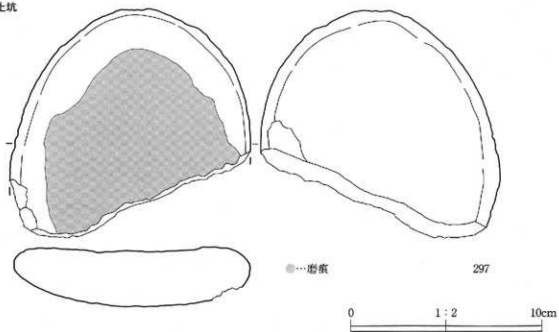


12号土坑

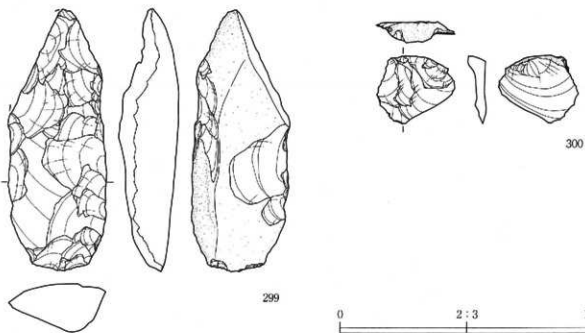
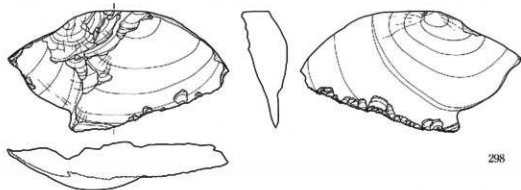


第39図 土坑出土遺物(9)

14号土坑



15号土坑



第40図 土坑出土遺物 (10)

クで1c類に相当する。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期前葉に比定される。

16号土坑 (第29・37図、写真図版10・31)

〈位置〉調査区中央、II A12g、II A13gグリッドに位置する。東側半分は調査区外に及ぶ。

〈検出状況〉Ⅲa層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉東側半分が調査区外に及んでおり、全容は定かではない。検出できた部分は楕円形を呈し、規模は3.3×1.1mを測る。深さは検出面から最深29cmである。

〈埋土〉5層に分けられる。黒褐色粘質シルト主体で、底面付近(5層)には褐色粘土が堆積する。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は調査区外に及ぶ東側以外は全周する。

〈出土遺物〉縄文土器が447.38g出土している。3点図示した。278は鉢の胴部片で、横位に沈線が巡り、その下には縄文が施文される。280は縄文のみが施文される深鉢の口縁部片である。石器はフレイク3点出土しているが図示していない。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期に比定される。

17号土坑 (第30図、写真図版11)

〈位置〉調査区中央、II A13gに位置する。1m北東側に16号土坑がある。

〈検出状況〉Ⅲa層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉楕円形を呈し、規模は1.7×1.0mを測る。深さは検出面から最深43cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とし、全体的に細砂が混入する。

〈底面・壁〉底面は中央部分の部分は平坦である。壁は全周し、ほぼ直立する。

〈出土遺物〉土器は出土していない。石器はフレイク2点、Rフレイク1点が出土しているが、図示していない。

〈時期〉埋土の様相から縄文時代後期に比定されるものと推定される。

18号土坑 (第30・37図、写真図版11・31)

〈位置〉調査区中央、II A14gに位置する。3m北側に17号土坑がある。

〈検出状況〉Ⅲa層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉楕円形を呈し、規模は1.2×0.7mを測る。深さは検出面から最深20cmである。

〈埋土〉2層に分けられる。暗〜黒褐色粘質シルトを主体とする。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は全周する。

〈出土遺物〉縄文土器が110.14g出土している。2点図示した。281は無文の鉢の胴部片で、円形の突起が付く。

〈時期〉出土土器から縄文時代後期に比定される。

19号土坑 (第30・37図、写真図版11・31)

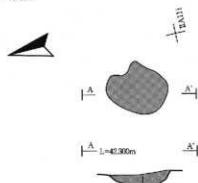
〈位置〉調査区南端、II A18eグリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲa層上面に黒褐色のプランで検出した。また4号溝跡の壁面に本遺構の壁の立ち上がり認められた。本遺構は南側の一部が調査区外に及んでいる。

〈重複関係〉4号溝跡と重複する。本遺構の方が古い。

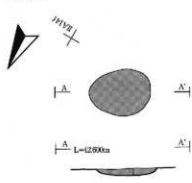
〈形態・規模〉東側を4号溝跡に壊され、南側は遺構外に及ぶため、全容は明らかではない。検出し

1号焼土

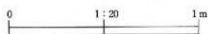


1. 25YR5/8 明赤褐色土 粘土ややぶ しまりややぶ 炭化物混雑、暗褐色粘質シルト中混在

2号焼土



1. 5YR4/6 赤褐色土 粘質土 しまりややぶ 暗褐色粘質シルト中混在



第41図 1・2号焼土遺構

た部分から不整な円形を呈し、規模は径3.7m以上と推定される。深さは検出面から最深59cmである。

〈埋土〉8層に分けられる。1層は暗褐色粘質シルトが主体で、2層以下は粘土が主体である。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は東壁のみ検出した。

〈出土遺物〉縄文土器が1827.38g出土している。3点図示した。283は深鉢で口縁部は無文、胴部との境に段を有する。胴部は縄文が施文される。284、285は口縁部に沈線による変形工字文が施文される。石器はスクレイパー4点、フレイク18点、Rフレイク3点出土しているが、図示していない。

〈時期〉出土土器から弥生時代に比定される。

(4) 焼土遺構

1号焼土 (第41図、写真図版11)

〈位置〉調査区中央、II A10hグリッドに位置する。1m西側に9号土坑がある。

〈検出状況〉III a層上面に焼土範囲で検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な楕円形で、規模は34×27cmを測る。焼土の堆積は検出面から約7cmである。

〈埋土〉焼土を主体とする単層である。炭化物や暗褐色粘質シルトが混入する。

〈時期〉出土遺物がないため、定かではないが、縄文時代と推定する。

2号焼土 (第41図、写真図版12)

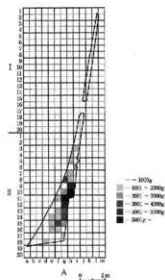
〈位置〉調査区南側、II A13gグリッドに位置する。

〈検出状況〉III a層上面に焼土範囲で検出した。

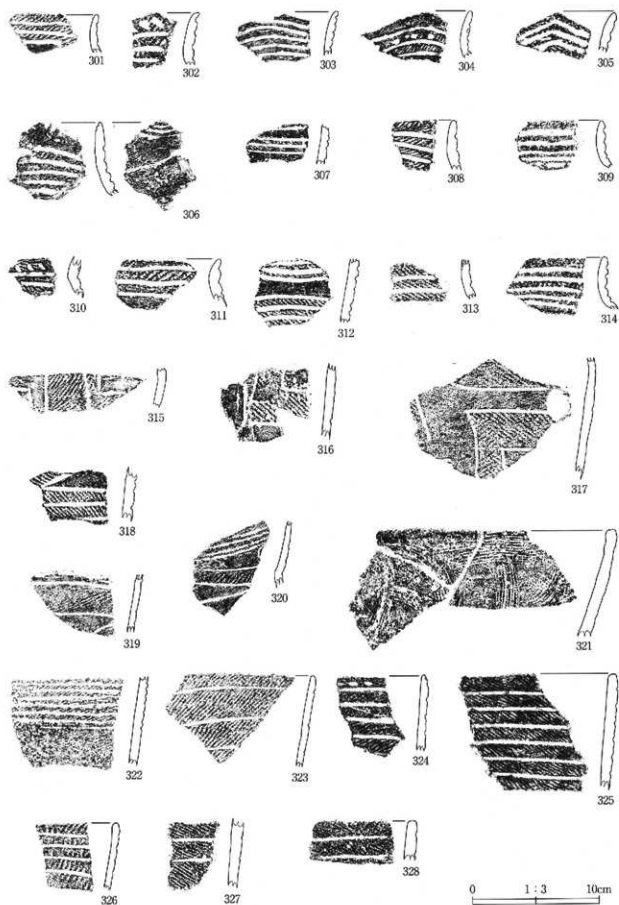
〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉卵形を呈し、規模は32×25cmを測る。焼土の堆積は検出面から最深4cmである。

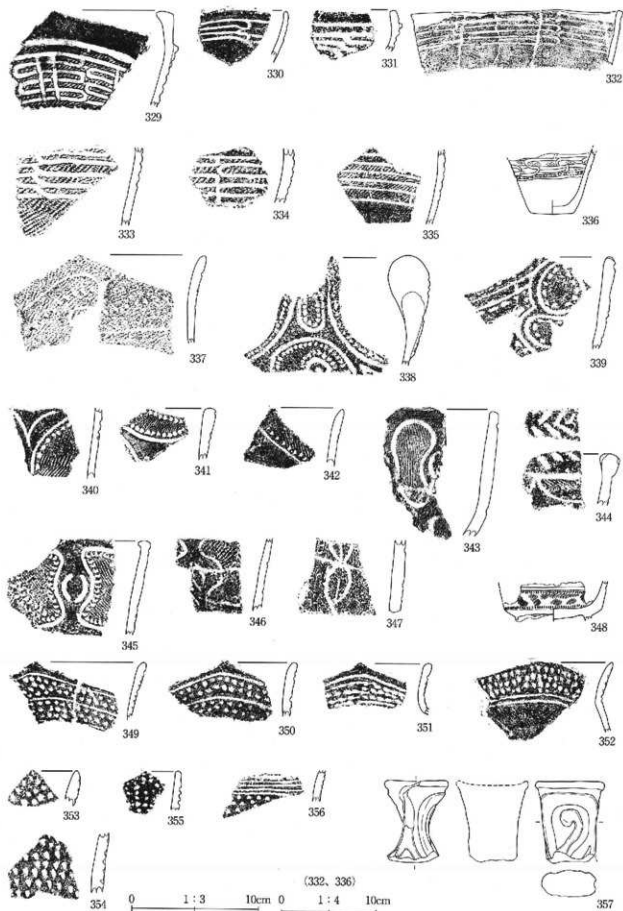
〈埋土〉焼土を主体とする単層である。炭化物や暗褐色粘質シルトが混



第42図 縄文土器分布図



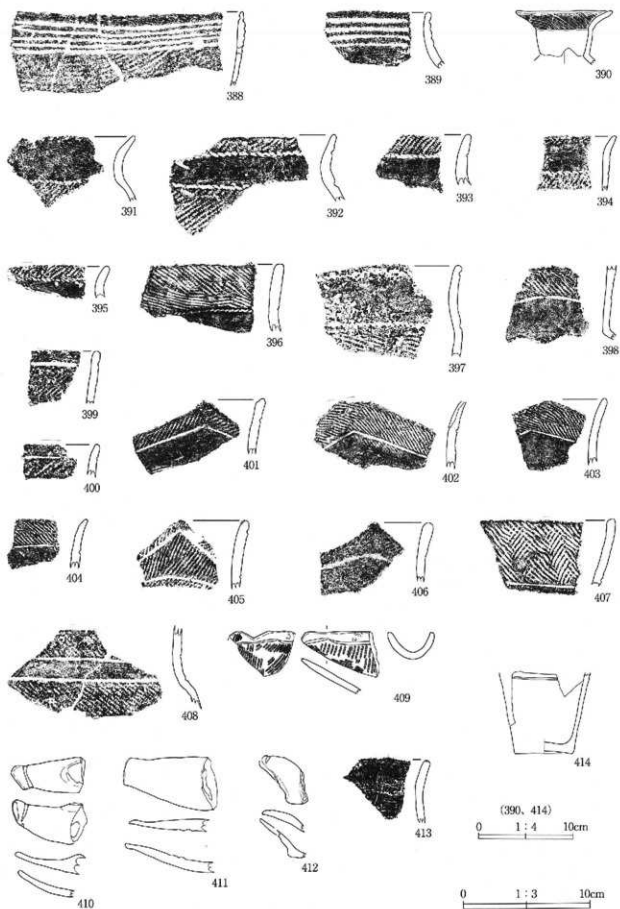
第43回 遺構外出土器(1)



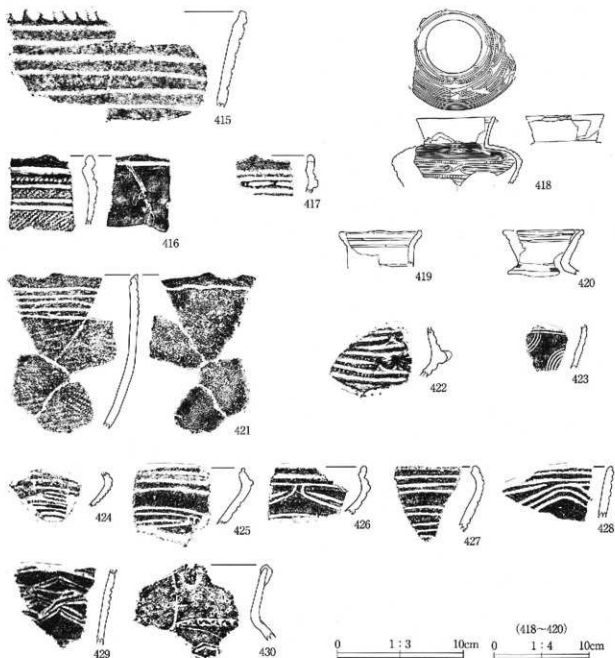
第44回 遺構外出土土器(2)



第45図 遺構外出土土器(3)



第46図 遺構外出土土器(4)



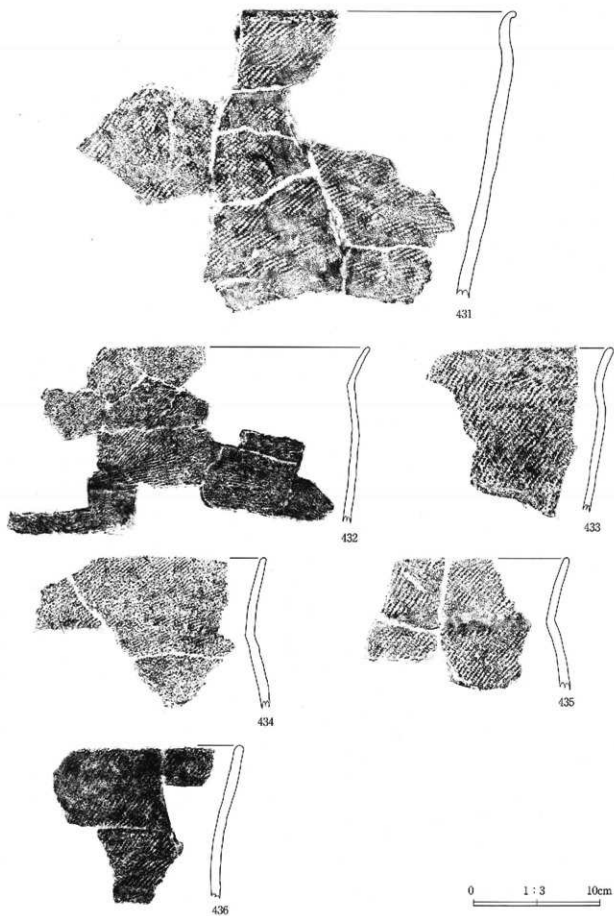
第47図 遺構外出土土器(5)

入する。

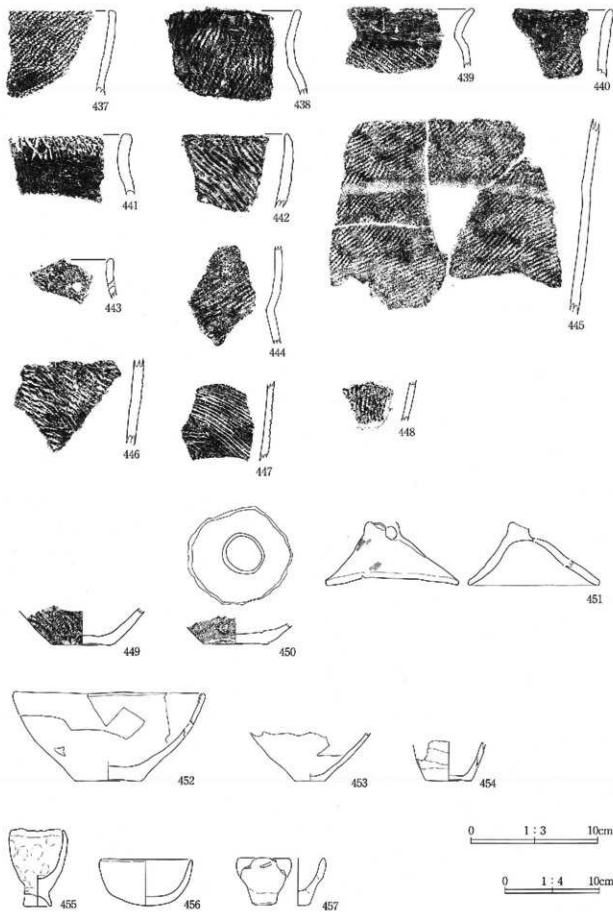
〈時期〉出土遺物がないため、定かではないが、縄文時代と推定する。

(5) 遺構外土器(第42～50回)

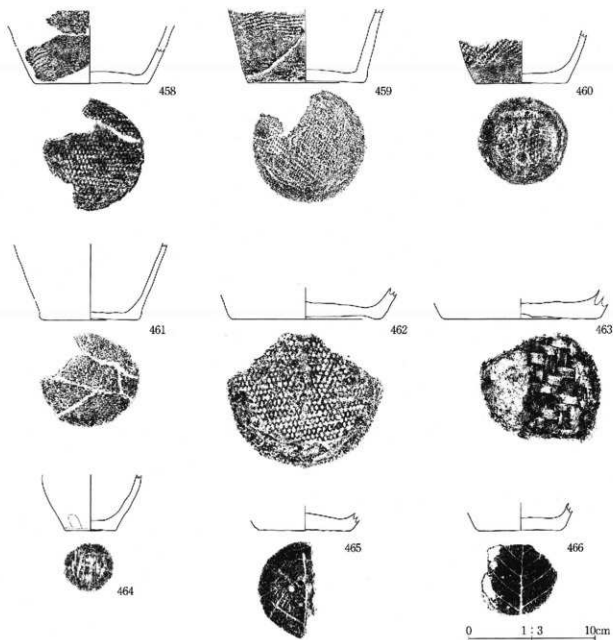
II層から122659.57gの土器が出土しており、特に出土分布は調査区中央II A3 i グリッドから南側にかけて多い。第42図は縄文土器の出土量をグリッド毎に示したものである。1号住居状遺構や3号住居状遺構が位置するII A10h～II A11gグリッドを中心に、出土量が偏る傾向が認められる。一方、遺構が検出されなかったII A13g・14gグリッドでも比較的多く出土している。このエリアは石器も多く出土し、フレイク類が集中的に出土した場所(第64図参照)でもあった。



第48図 遺構外出土土器(6)



第49図 遺構外出土土器 (7)



第50図 遺構外出土土器(8)

168点図示した。301～314は第Ⅲ群に相当する深鉢の口縁部片で、縄文を地文とし、その上から多条の沈線が横位に巡る文様が施文された土器群である。302は口唇部直下にやや太い棒状工具による刻みが横位に巡る。304は沈線間に円形の刺突文が充填される。306は口唇部の内面に沈線が巡る。315～317もⅢ a 群に相当し、クランク状の区画文が施文される胴部片である。いずれも区画内には充填手法による縄文が施文される。318～320も胴部片で、入り組み文が施文される。321は深鉢の口縁部片で、口縁部から胴部にかけて複数条の条線文が施文されている。322～328は深鉢の口縁部片で縄文を地文とし、その上から横位の沈線が数条巡る。322は沈線間の幅が短い、323～328は比較的幅が広い。また324は口唇部直下には刺突文が巡る。329～336は横位の沈線が数条巡り、沈線は縦位の弧状の沈線で連結する。口縁部に施文されるものが多い(329～335)が、胴部に施文されるものも認

められる(336)。337は深鉢の口縁部片で、縄文を施文し、口唇部に沿って沈線が1条施文され、それと平行して、刺突文が巡る。338~348は沈線による区画文が施文され、区画内には縄文や刺突文が充填される土器群である。338は口縁部片で波状口縁を呈する。波頂部はさらに段になり、その一端は突出しているが、縦に肥厚する。343は深鉢の口縁部片で、口縁部から胴部にかけて瓢箪形の区画文が描かれ、区画内には縄文が充填される。344は口唇部が肥厚し、沈線が矢羽根状に施文される。348は台付の鉢の胴部片である。横位に沈線が巡り、沈線に沿って爪形の刺突文と縄文が充填される。349~356は深鉢の口縁部片であり、刺突文が充填される土器群である。349~352は口唇部に沿って沈線が数条めぐり、その沈線間に刺突文が充填される。357は深鉢の口唇部に付く大形突起片で、頂部は円形を呈する。体部には渦巻き文が描かれている。358~362は曲線的な区画文が施文される土器群である。358・359は頸部が屈曲する器形の深鉢の口縁部から胴部にかけての大形破片である。口縁部は両端に棒状工具による押圧文が巡る。365・366は頸部が屈曲し、直線的に外へと広がる器形の深鉢で口唇部直下と胴部が区画され、縄文が施文される。369は胴部上半で屈曲し、直線的に外へと広がる口縁部を呈する鉢である。口縁部から胴部にかけて沈線による渦巻き文や三角形文が描かれている。370は深鉢の胴部片であるが縄文を地文とし、その上から数条の沈線が横位と斜位に施文される。372は口縁部片で口唇部直下から隆帯が垂下し、口縁部片には押し引き状の刺突文が横位に巡る。373は胴部がやや膨らむ器形を呈する鉢で、胴部に横位に隆帯が付き、隆帯上には刺突文が巡る。374も胴部が膨らむ器形を呈し、胴部に横位の隆帯が付く。隆帯上には斜位に刻みが巡る。375は交互刺突文が施文される。376は口縁部に波状を呈した沈線文が数条巡る。379は浅鉢の胴部片で内面に沈線文が描かれる。380は胴部に鋸歯状の沈線文が描かれる。381は口唇部直下に微隆起伏の隆帯が付く。382は口縁部には細い沈線による区画文が描かれ、区画内には縦位の条線文が充填される。384は口唇部に突起が付く。口縁部には沈線による区画文が描かれる。388は口縁部に5条の沈線文が横位に巡る。一端に補修孔が1個認められる。胴部には縄文が施文される。390は口縁部が大きく外へと広がる器形を呈する。口縁部には縄文が施文され、頸部は無文である。391~408は第VII群に相当する土器群である。391~397は縄文の罫帯により文様帯を区画し、区画内には充填手法により縄文が施文される。399~406は沈線により区画される土器群である。405は波状を呈する深鉢の口縁部片である。縄文を地文とし、その上から、口唇部に沈線が巡り、口縁部下にも横位に沈線が巡る。407は口縁部文様帯を沈線で区画し、口縁部には縦位に羽状縄文が施文される。408は口縁部がすぼまる器形を呈する胴部片で口縁部文様帯と胴部文様帯とが沈線により区画されており、それぞれの区画内には縄文が施文される口頸部は無文である。409は片口土器の注ぎ口部片である。沈線と縄文が施文される。410~412は注口土器の注口部片である。410は先端がやや横に歪んでおり、先端には沈線が巡る。412は先端がやや立ち上がる器形で、先端に沈線が施文される。413は無文の深鉢で口唇部に刻みが巡る。

415~424は縄文時代晩期に属する第IV群土器群である。いずれも小片である。415は深鉢の口縁部片で、口唇部は押圧が連続し、口縁部には幅広の沈線が数条に渡り横位に巡る。416は鉢の口縁部片で裏面にも沈線が巡る。417は浅鉢の口縁部片で胴部には工字文が施文される。418は逆の口縁部から胴部にかけての大形破片である。口唇部直下にはB状突起が付き、胴部には工字文が施文される。419・420も同様な形態の壺の口縁部片である。口唇部直下に2条の沈線が巡るのが共通の特徴である。421は鉢の大形破片で、416と同じように内面にも沈線が巡る。422、424は浅鉢の胴部片である。どちらも工字文が施文され、422は胴部中央に突起が付く。

425~430は弥生時代に属する第V群土器群である。小片であるが、谷起鳥式に比定されるものである。425~428は浅鉢の口縁部片で、いずれも沈線による変形工字文が描かれている。429は胴部片で

複数条の沈線文が施文されている。430は口縁部片で、口唇部直下には注ぎ口状の突起が付く。沈線文と交互刺突文が施文されている。

430～451は縄文などの地文のみの第VI群土器群である。いずれも破片資料であり、形態も定かでないためどの時期に属するものかはっきりしない。ほとんどが口唇部直下から胴部まで、斜縄文が施文されるが、435・439では胴部の屈曲部が無文化する。また440は口縁部が、441は胴部が無文となる。443は小片であるが口唇部直下に補修のためと思われる穿孔が認められる。447は地文に刷毛状の条線文が施文される。448は小片で、この土器群に属するか定かではないが、内面にアスファルト状の付着物が見られる。449・450は鉢の底部片で、底面付近まで縄文が施文される。450は底面内部に沈線による円文が描かれている。451は蓋か。全体の3分の1ほどしか残っていないので定かではない。頂部に横位の穿孔が認められる。

452～457は第VI群土器群のうち無文の土器群である。いずれも破片資料で、形態が復元できたものも推定であり、したがってどの時期に属する土器かは定かではない。452は鉢である。454は小形の鉢の体部片で、和積み痕が認められる。455は台付きの鉢を模したミニチュア土器で、器面には指頂による整形痕が認められる。456も丸底の浅鉢を模したミニチュア土器である。457は全体の3分の1しか残っていないが、図示したような形態を呈する厚底の鉢のミニチュア土器と推定される。

458～466は深鉢や鉢の底面が明確な破片資料である。外面には縄文が施文されるか無文で、どの時期に属するか定かではない。458～463は底面に網代痕が認められる。459のように目の細かいものから463のように粗いものまで、バラエティーに富む。464は底面のほぼ中央に整形痕が認められる。465・466は底面に木葉痕が見受けられる。

出土土製品 (第51図)

27点の土製品が出土している。種類は、土偶、土製耳飾り、土鍾、土製円板、分銅形土製品、土製装飾品、その他、用途が不明の土製品で、また粘土塊も認められる。出土層位はⅡ層で、同じ層から縄文後期の土器が出土しており、ほぼ同じ時期に比定されると思われる。出土量が少ないので、遺構内出土も含め、第51図に示した。

467・468は扁平な形態の土偶の腰部片である。467は四面全体に円形の刺突文が充填される。468は無文である。469～475は土偶の腕部片である。469・472は先端をややへこませるように整形し、手のひらを模したものか。473は腕部片で、3段の横位の沈線が巡り、沈線間には縄文が施文される。また穿孔により、手の部分を表現している。476・477は土偶の脚部片である。476は無文であるが、つま先部分がややせり上がるような形態を呈する。

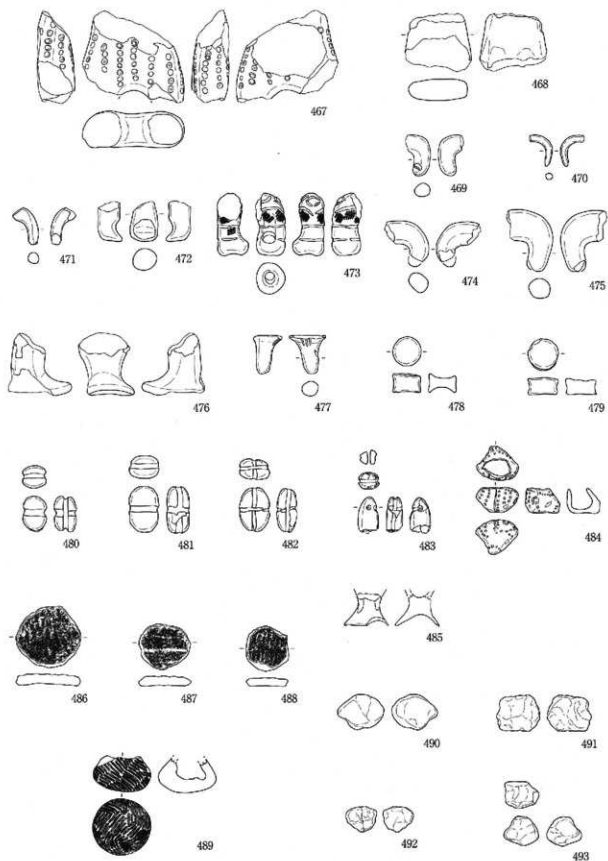
478・479は土製の耳飾りである。どちらも円形で中央に向かいくぼむ形態を呈し、側面もわずかに凹んでいる。文様は無い。

480～481は土鍾である。溝が巡っており、480・481は体面は一字で側面が十字、482は全ての面に十字に溝が交差する。

483は小形の土製装飾品と判断した。土鍾と形状が類似するが、先端部付近に穿孔が認められ、溝は側面のみであり、土鍾と区別した。

484・485は用途が不明な土製品である。特に484は略三角形を呈し、中が空洞である。薄い器面のほぼ全体に先の細い棒状工具による刺突文が充填される。

486～488は土製円板である。摩滅がひどく、文様が明確でないが、いずれも縄文が施文されており、深鉢などの胴部片の転用であろうと思われる。



0 1:3 10cm

第51図 土製品

489は分銅形土製品と考えられる。軽米町長倉Ⅰ遺跡の縄文時代後期の層からみつかった分銅形土製品と類似しているため、そのように判断した。上部を欠損している。器面全体に縄文が施文されている。

490～493は粘土塊である。いずれも焼成を受けており、生焼け状態ではない。不定な形状で、特徴や規則性は見いだせない。

遺構外の石器（第52～65図）

フレイクも含め924点の石器が出土している。出土層位はⅢ層で、同じ層から縄文後期の石器が出土しており、ほぼ同じ時期に比定されると思われる。

器種毎にみると、石鏃、石錐、尖頭器、スクレイパー、打製石斧、磨製石斧、砥石、肉極石器、礫器、敲磨器類と石核、フレイク、Rフレイクが出土している。以下、器種毎にみていく。

〈石鏃〉

34点出土した。調査区中央のグリッドから出土するものが多く、また3号性格不明遺構や溝跡などの、時期が明らかに透遺構の埋土からも出土している。16点図示した。494～497は6類に相当し、いずれも基部や先端部を欠損する。石質は様々で494は玉随製、496は赤色頁岩製、その他は頁岩製である。498・499は4類に相当し、赤色頁岩製、499は頁岩製である。比較的小型で長さは1.7cm程度である。499は先端部の縁辺部がやや窪んでいる。500・501は1類に相当し、どちらも赤色頁岩製である。大きさは498・499と同じくらいである。502～505は2類に相当し、いずれも頁岩製である。502は比較的大きく、今回出土した石鏃の中では最も長い。一方、504は比較的小さいので、2類の石鏃には大きさにバラエティーがあるのかもしれない。505・506は同じ3類に含めた。ただし、505は基部が比較的細長いのに対し、506は幅広であり、やや形状が異なる。また506は他と比べて厚みがあるのも特徴である。507・508は7類に相当し、507は玉随製、508は頁岩製である。形状は似るが両者の大きさは異なっている。509は9類に相当し、先端部を欠損している。

〈石錐〉

9点出土した。石鏃と同様に調査区中央グリッドから多く出土し、また3号性格不明遺構の埋土からも出土している。3号性格不明遺構は時期が異なる遺構であり、流れ込みによる混入と思われる。

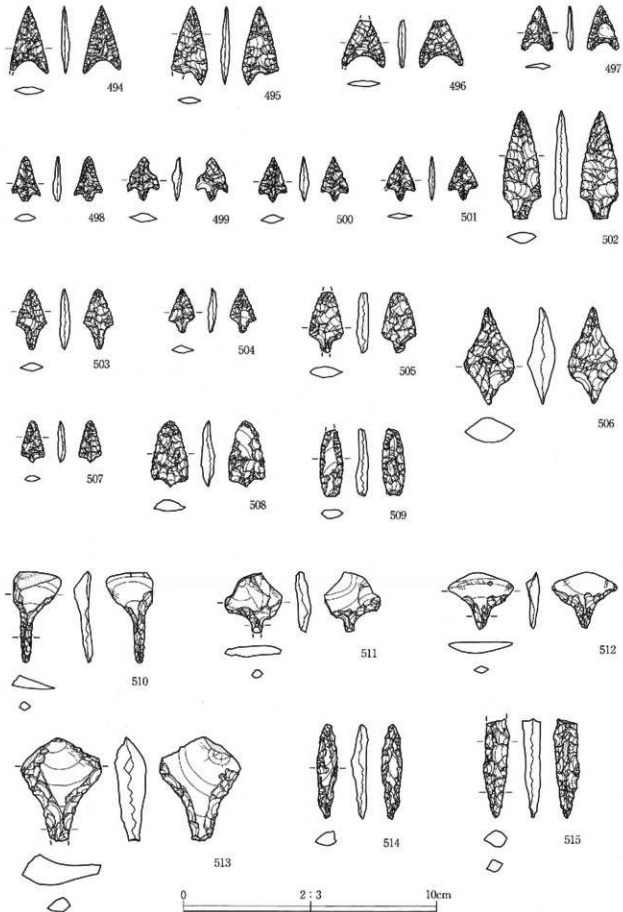
6点図示した。510～514は1類に比定されるもので、摘み部が付く。いずれも頁岩製である。510・511・513は1a類に含まれる。そのうち、510・511は摘み部は扁平で厚さが薄い。錐部は細く、長い形状を呈する。一方、513は全体的に厚みがあり、錐部の幅もやや広い形状を呈している。512は1b類に相当する。摘み部は横長の形状を呈する。錐部は短い。両面より二次加工を施し、精巧に刃部を作出する。514・515は2類に相当する。ただし、515は一方の端部を欠損しており、1類に含まれる可能性がある。いずれも頁岩製である。縁辺部の両面から二次加工を施し、刃部を作出している。

〈尖頭器〉

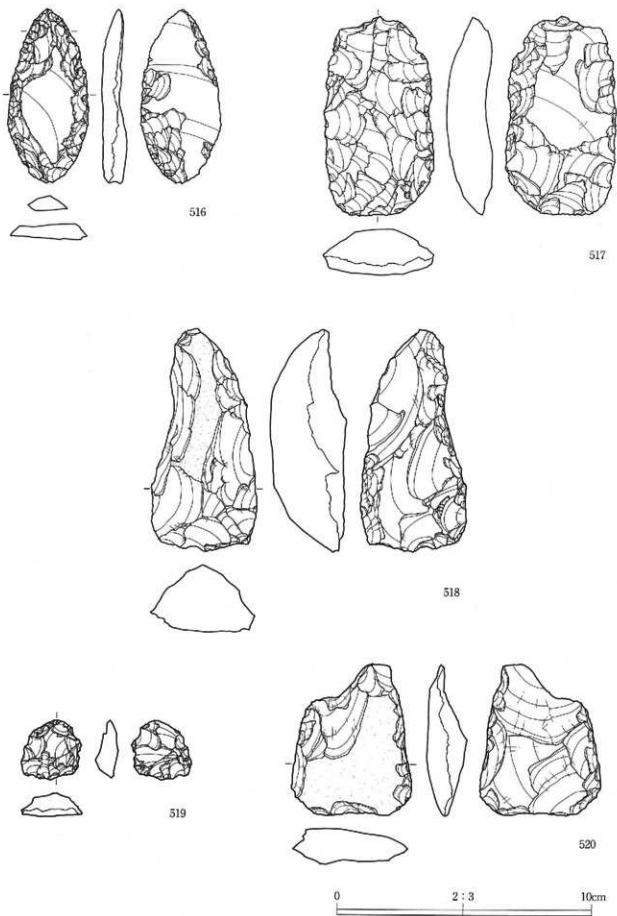
1点のみだが、ⅡA4iグリッドより出土している（516）。卵形を呈し、片方の先端部は鋭利である。片面は縁辺部全体に、もう片面には一部のみ二次加工を施して、刃部を作出している。

〈篋状石器〉

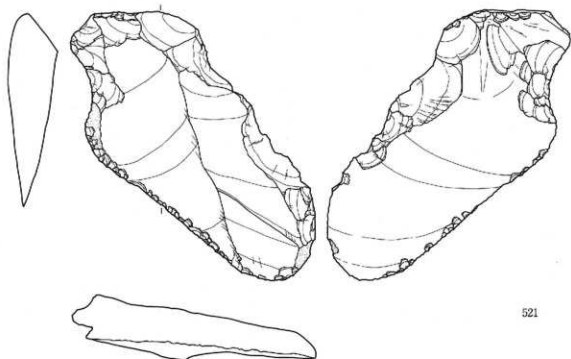
2点出土している。尖頭器同様、出土点数は少ない。スクレイパーに含まれてもいいかもしれないが、形状の特徴から「篋状石器」とした。2点図示した。517は短冊状の形状で、長辺の方向にやや反りが見受けられる。縁辺部は両面から二次加工が施される。518は篋状を呈し、短辺の一方は平坦に整形され、刃部を作出されるが、もう一方の端部に刃部はない。また体部には自然面が残る。



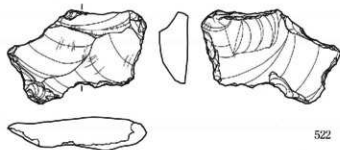
第52図 遺構外出土石器(1)



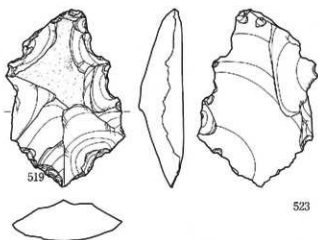
第53図 遺構外出土石器(2)



521



522

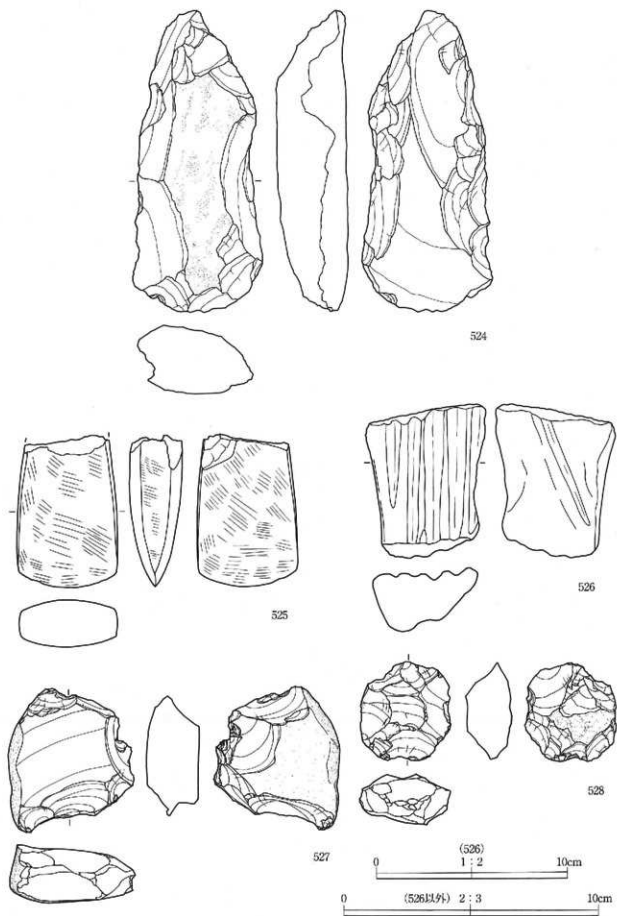


519

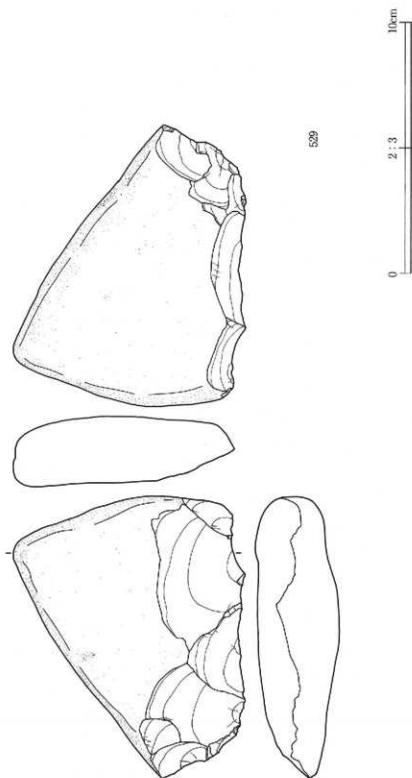
523



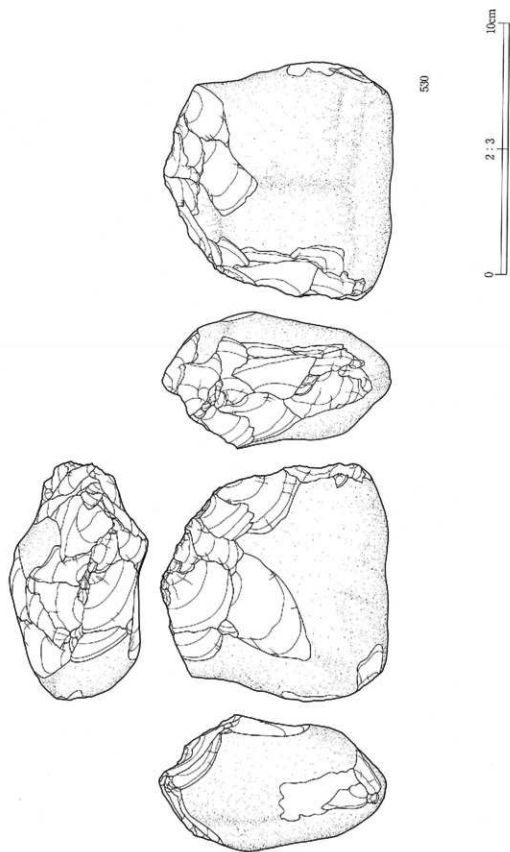
第54図 遺構外出土石器(3)



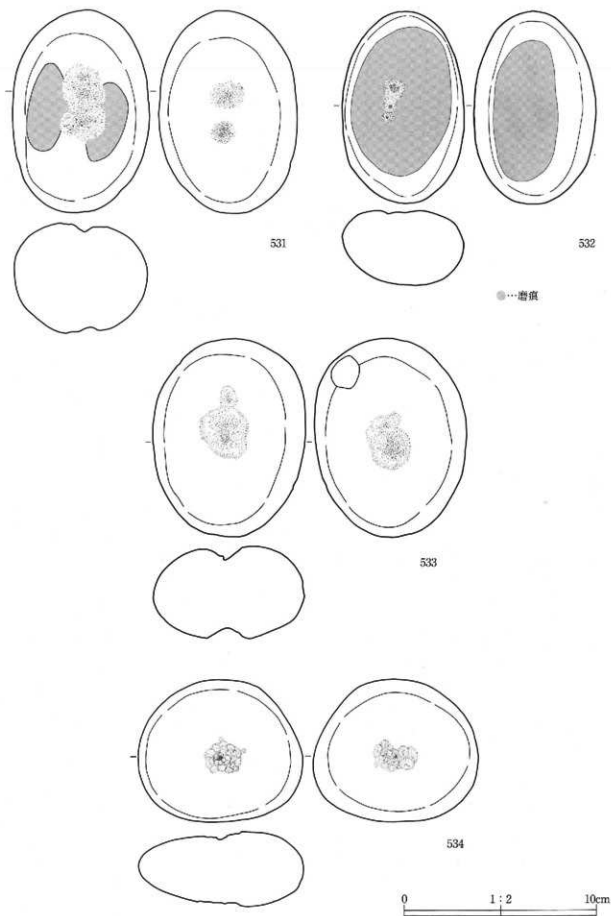
第55図 遺構外出土石器(4)



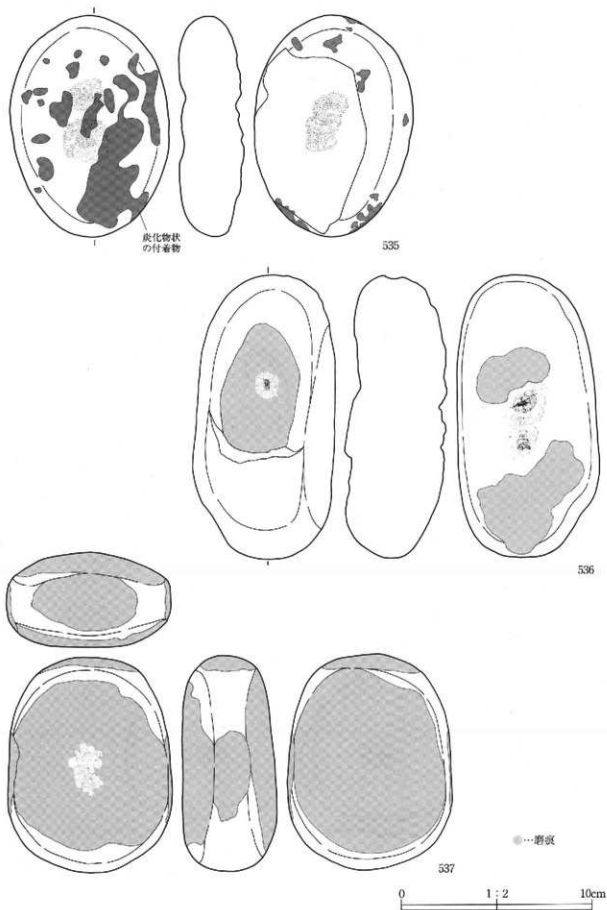
第56図 遺構外出土石器(5)



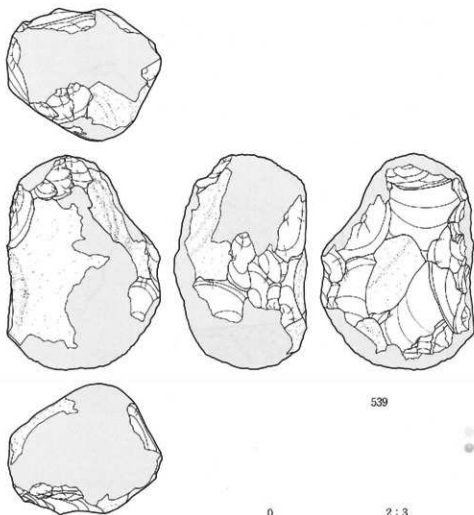
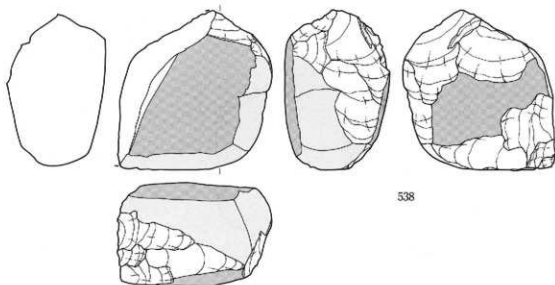
第57図 遺構外出土石器(6)



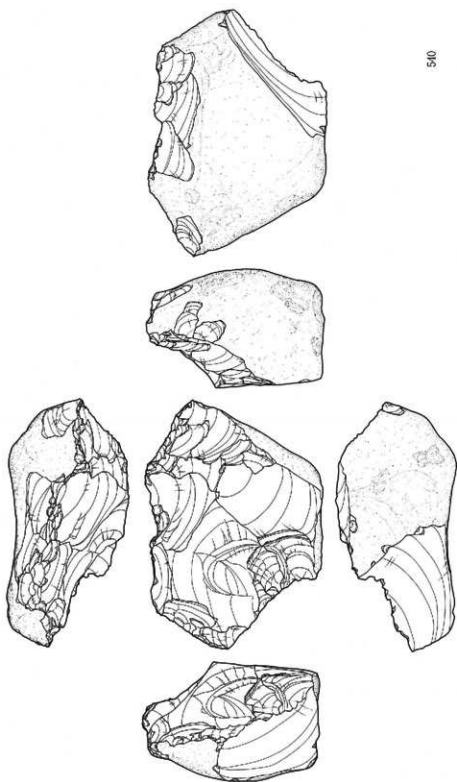
第58図 遺構外出土石器 (7)



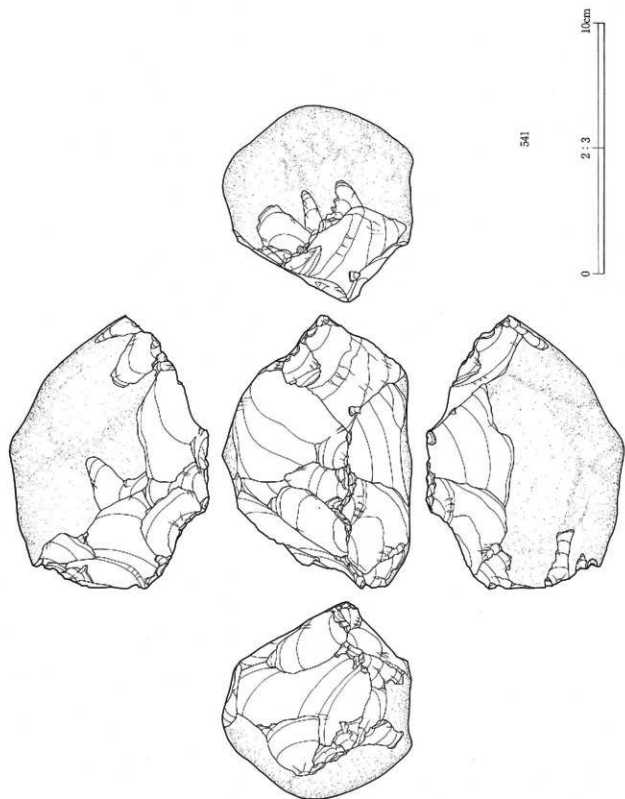
第59図 遺構外出土石器 (8)



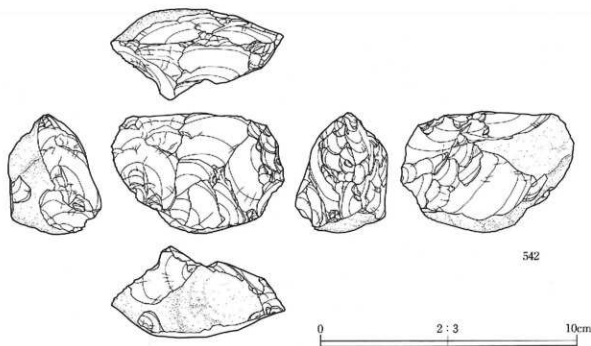
第60図 遺構外出土石器(9)



第61図 遺構外出土石器 (10)



第62図 遺構外出土石器 (11)



第63図 遺構外出土石器 (12)

〈スクレイパー〉

41点出土している。他の石器と同様に主に調査区中央のグリッドから出土している。また、溝跡や3号性格不明遺構などの時代の異なる遺構の埋土中にも混入している。5点図示した。519は2類に含まれる。不整な円形を呈し、縁辺部の両面に二次加工を施している。520は1類に相当する。縁辺部に両面二次加工を施すが、片面には自然面が残る。521は1類に相当する。石匙のように扶入部が見受けられるが、やや浅いので、スクレイパーに含めた。縁辺部の二次加工は片面には連続するが、もう片面には部分的にしか施されない。522・523は3類としたもので、どちらも縁辺部に二次加工が施されるものの、やや粗かったり、不連続であったりする。

〈打製石斧・磨製石斧〉

打製石斧はⅡA17gグリッドから1点みつかっている(524)。524は砂岩製で刃部の角度はやや鈍角である。体部には自然面が残り、縁辺部は主に片面から二次加工が施される。

磨製石斧は2点出土している。1点図示した。525は体部のほとんどを欠損している。蛇紋岩製で器面全体に整形による磨り痕が認められる。

〈砥石〉

5点出土している。調査区中央のグリッドから出土している。1点図示した(526)。砂岩製で、石皿か何かの破片を再利用している。片面には5条の溝が認められ、1条の浅い溝が認められる。

〈両極石器〉

5点出土した。主に調査区中央から出土し、近世の土坑や溝跡の埋土中にも混入している。2点図示した。527は扁平な頁岩を利用し、主に対極する一方向から打撃を与えている。528は赤色頁岩で対極する2方向から打撃を与えている。

〈礫器〉

12点出土している。主に調査区中央から出土し、時期の異なる溝跡の埋土中にも混入する。2点図

示した。529は偏平な三角形の頁岩を利用し、一辺の両面に二次加工を施し、刃部を作出している。530は方形でやや偏平な頁岩で、529よりも厚みがある。二辺の両面から二次加工を施し、刃部を作出している。また別の縁辺部には敲打痕が認められた。

〈敲磨器類〉

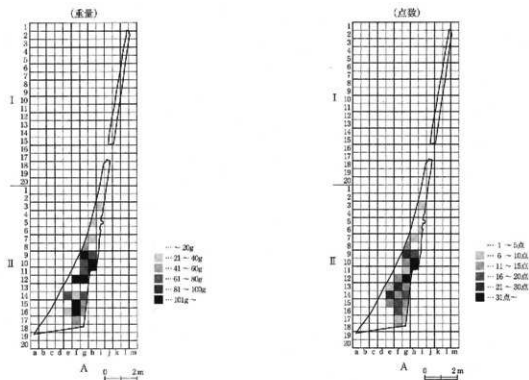
50点出土している。主に時期の異なる溝跡の埋土中に混入しているが、形態からも縄文時代に比定されると推定する。7点図示した。531はやや厚みのある礫を利用し、両面に使用痕が認められる。片面には磨痕と凹痕が見受けられる。もう片面には比較的小さい凹痕が2箇所認められる。532はやや偏平な礫を利用し、両面に磨り痕が認められ、片面にのみ凹痕がある。533、534は偏平な礫の両面中央に凹痕が見受けられる。535は体部の表面が剥離しているが凹痕が残っている。両面に炭化物状の付着物が認められる。536は楕円形の礫を利用し、両面のほぼ中央に凹痕が見受けられる。また磨り痕も認められる。537は全体的に整形されており、稜がはっきりしている。明瞭な磨り面は図示で来た範囲で、側面の一部をのぞきほぼ全面認められる。

〈敲石〉

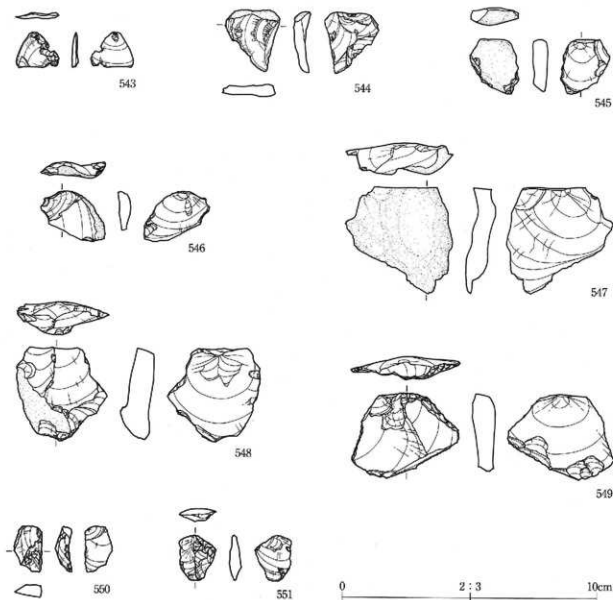
2点出土している。調査区中央のグリッドからの出土している。2点とも図示した。538は砂岩製で偏平な方形の礫を利用している。縁辺部の一部を欠損し、また別の縁辺は剥離している。広い面は裏表ともに磨り痕が、その側面には敲打痕が見受けられる。539は頁岩製でやや厚みのある棒状の礫を利用している。体部の一部は剥離しているが、その他には敲打痕が認められる。

〈石核〉

15点出土している。主に調査区中央グリッドに集中して出土した。3点図示した。540は頁岩製で偏平な形状を呈する。広い面の片面に方向を変えながら剥離作業を行っている。541はやや厚みのある頁岩を素材とし、側面を打面とし、剥離作業を行っている。542は偏平でやや小さい頁岩であり、広い面の両面とも作業面とし、2方向から剥離作業を行っている。



第64図 フレイク類分布図



第65図 遺構外出土石器 (13)

〔フレイク類〕

625点出土している。出土状況は第64図に示した通りで、調査区中央から南側にかけて、広く分布している。グリッド毎のフレイクの出土量では、重量で比較すると、最も多いのはⅡA10hグリッドで600gを超えている。これは次に多いⅡA12gグリッドが200g強なので、ⅡA10hグリッドは突出して出土量が多かった。これを点数で比較してもⅡA10hグリッドは55点出土で最も多い。このグリッドの周辺もやはり多い傾向が認められた。ⅡA10hグリッドのⅢ層下からは遺構が検出していないが、周辺には3号・4号住居状遺構が位置する。一方、竪穴住居跡などの遺構が検出なかった調査区南側（ⅡA14e～ⅡA14gグリッド、その南側）からも比較的まとまって出土している。従ってフレイクは他の石器とは異なり、遺構のない場所の包含層にも多く混入している傾向が認められる。

9点図示した。543は黒曜石である。非常に薄く、打面が確認できなかった。縁辺部の一部に片面からのみ二次加工を施している。Rフレイクとした。546も黒曜石である。自然面が残っている。縁

辺部の部分的に二次加工が施されるが、不連続で刃部とは考えられないのでRフレイクとした。545～547はフレイクである。545は1 a類に相当する。自然面を打面とする。546は1 b類に相当する。打面から背面の縁辺部にかけて自然面が残る。背面には打面からの打撃方向とは90°違う方向から打撃を与え剥離されている。547は2 a類に相当する。548は2 b類に相当し、背面の縁辺部に自然面が残る。549は2 c類に相当する。550、551は黒曜石で、どちらも打面が確認できず、また自然面が残っていないので4 b類とした。

3 古代以降の遺構・遺物

(1) 土 坑

20号土坑 (第66・69図、写真図版12・43)

〈位置〉調査区北端、I A 2 l グリッドに位置する。1 m北側には1号性格不明遺構が隣接する。本遺構は西側半分が調査区外に及んでいる。

〈検出状況〉Ⅲ a層上面に褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉西側半分が調査区外に及んでおり、全容は定かではないが、検出できた部分は隅丸方形を呈し、規模は2.0×2.0mを測る。深さは検出面から最深47 cmである。

〈埋土〉4層に分けられる。灰黄褐色砂質シルトを主体とし、各層に色調の差違は認められないが、混入物の多寡で分類した。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は調査区外に及ぶ西側半分を除き全周する。緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉土師器・須恵器が22.04 gと陶器片が14.96 g出土している。いずれも小片で、形態が復元できたものはないが、時期幅があり、いずれかは流れ込みによるものと思われる。

2点図示した。552は須恵器の坏の口縁部片である。ほぼ直線的に外へとひらく器形と思われる。553は常滑の壺の頸部片である。

〈時期〉小片ではあるが、出土した遺物に時期幅があるので、古代以降と考える。

21号土坑 (第66図、写真図版12)

〈位置〉調査区北端、I A 8 k グリッドに位置する。本遺構は東側の一部が調査区外に及んでいる。

〈検出状況〉Ⅲ a層上面に暗褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉東側の一部が調査区外に及んでおり、全容は定かではないが、検出できた部分は不整な楕円形を呈し、規模は1.6×1.1mを測る。深さは検出面から最深22 cmである。

〈埋土〉2層に分けられるが、1層の暗褐色粘質シルトがほぼ主体となる。

〈底面・壁〉底面はやや壺で西から東へと傾斜する。壁は調査区外に及ぶ東側の一部を除き全周する。緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉なし。

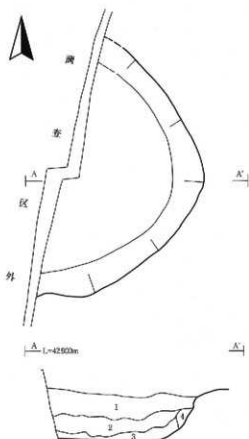
〈時期〉出土土器がないので定かではないが、1層の様相から古代に比定される。

22号土坑 (第67・69・72・73図、写真図版12・43・44)

〈位置〉調査区中央、II A 1 i グリッドに位置する。本遺構は西側の一部が調査区外に及んでいる。

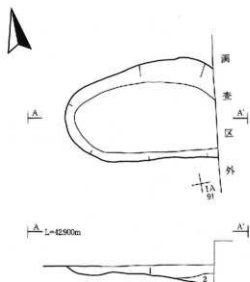
〈検出状況〉Ⅲ a層上面に褐色のプランで検出した。

20号土坑

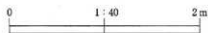


1. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘粒面 しまり密 灰青褐色砂質シルト多量含む
2. 10YR4/2 灰青褐色砂質シルト 粘粒面 しまりやや密 褐色砂質シルト中量含む
3. 10YR4/2 灰青褐色砂質シルト 粘粒面 しまり密 褐色砂質シルト多量含む
4. 10YR4/2 灰青褐色砂質シルト 粘粒面 しまり密 褐色砂質シルト中量含む

21号土坑



1. 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘粒やや粗 しまりのやや 炭化物極量、粘粒面ブロック少量含む
2. 10YR4/4 褐色粘質シルト 粘粒粗 しまり密



第66図 20・21号土坑

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉西側の一部が調査区外に及んでおり、全容は定かではないが、検出できた部分は円形を呈し、規模は径1.4mを測る。深さは検出面から最深27cmである。

〈埋土〉褐色粘土が主体となる単層である。

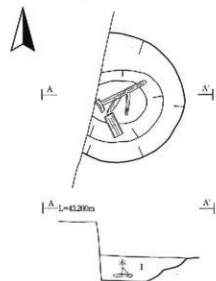
〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は調査区外に及ぶ西側の一部を除き全周する。壁は半ばで段状に緩やかに屈曲するが、全体的には緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉陶器片が202.22g出土している。4点図示した。554・555は碗の口縁部片である。556・557は陶器の壺の胴部片である。

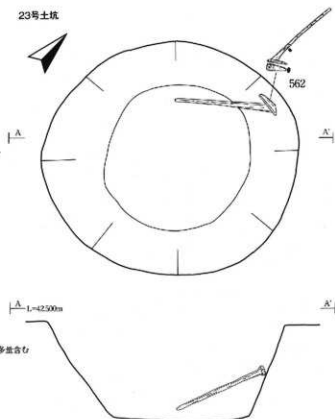
また木質遺物が5点出土した。いずれにも人為的な加工がなされていないので、自然に混入したものであると思われる。図示していない。石製品は砥石が出土している。567は欠損が激しい。残存する3面には磨痕が見受けられる。また用途不明の石製品が見受けられる(568)。偏平な円礫の両面に炭化物が付着している。

〈時期〉出土した陶器片から近世以降と推定される。

22号土坑

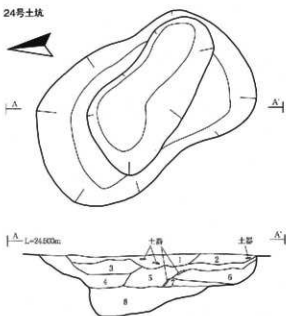


23号土坑

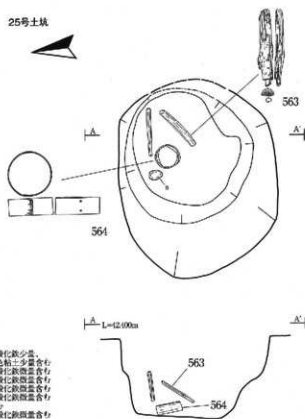


1. 10YR4/4 褐色鉄土 粘状土 しまりやや密 炭化物散在、黒褐色粘土多量含む

24号土坑



25号土坑



1. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや密 しまり密 炭化物散在、酸化鉄少量、オリーブ黒色粘土少量含む
2. 10YR3/4 黒褐色粘質シルト 粘性やや密 しまり密 炭化物散在、酸化鉄微量含む
3. 10YR4/2 灰黄褐色粘土 粘性强 しまり密 炭化物散在、酸化鉄微量含む
4. 10YR4/3 に二い黄褐色粘土 粘性强 しまりやや密 炭化物散在、酸化鉄微量含む
5. 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや密 しまりやや密 炭化物散在、酸化鉄微量含む
6. 10YR5/2 灰黄褐色粘土 粘性强 しまり密 酸化鉄少量含む
7. 10YR6/3 に二い黄褐色粘土 粘性强 しまり密 炭化物散在、酸化鉄微量含む
8. 10YR4/1 褐色粘土 粘性やや密 しまりやや密 炭化物散在、酸化鉄微量含む

0 1:40 2m

第67図 22~25号土坑

23号土坑 (第67・69・70図、写真図版13・45)

〈位置〉調査区中央、II A 6 h グリッドに位置する。1 m 西側に24号土坑が隣である。

〈検出状況〉III a 層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉やや不整な円形を呈し、規模は径2.5mを測る。深さは検出面から最深103cmである。

〈埋土〉断面図を図示していないが、黒褐色粘土が主体となる。黒褐色粘質シルトが層状で堆積するが、全体的には粘土が主体となる。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は全周する。緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉用途不明の木製品2点(560・561)と木製鎌1点(562)が出土した。562は柄をドにして、北壁に立てかけられるようにして出土している。クリ材を使用し(第七章参照)、一本の木から削り出している。先端はやや尖っており、鉄製の刃部が付くものと思われる。

〈時期〉出土遺物から近世以降と推定される。562のような形態の木製鎌は川井村で昭和期まで使用されていたことが確認されているので、近世～現代まで含まれ詳細な時期は分からない。

24号土坑 (第7・69図、写真図版13・43)

〈位置〉調査区中央、II A 7 i グリッドに位置する。

〈検出状況〉III a 層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な隅丸の方形を呈し、規模は2.4×1.5m、深さは検出面から最深62 cmである。

〈埋土〉8層に分けられる。粘質シルト層と粘土層が混在しており、全体的に炭化物などが混入する。

〈底面・壁〉底面は歪で壁付近は平坦であるが、中央部には深さ30cmの掘り込みがある。壁は全周する。南側はほぼ直立で、北側は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉陶磁器片が46.85 g 出土している。1点図示した。558は碗の底部片である。

〈時期〉出土遺物から近世以降と推定される。

25号土坑 (第67・71・72図、写真図版13・44・45)

〈位置〉調査区中央、II A 9 h グリッドに位置する。

〈検出状況〉III a 層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉3号性格不明遺構と重複する。本遺構の方が古い。

〈形態・規模〉不整な楕円形で、規模は2.1×1.6mを測る。深さは検出面から最深80 cmである。

〈埋土〉断面図を図示していないが、黒褐色粘土を主体とし、黒褐色粘質シルトが層状で堆積する。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は掘りすぎた東壁を除き全周する。

〈出土遺物〉底面付近から曲物と杭が出土している。563は杭である。表面にはまだ皮がついているが、先端はツギを作成している。564は曲物である。底蓋が無いが側板は完形である。側板はスギを使用している。

石臼2点が出土している(565・566)。どちらも欠損が激しく、4分の1ほどしか残存していない。

〈時期〉出土遺物から近世以降と思われる。

26号土坑 (第68図、写真図版13)

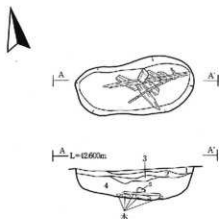
〈位置〉調査区中央、II A 14 d グリッドに位置する。

〈検出状況〉III a 層上面に暗褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

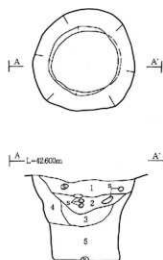
〈形態・規模〉楕円形を呈し、規模は1.2×0.6mを測る。深さは検出面から最深32cmである。

26号土坑



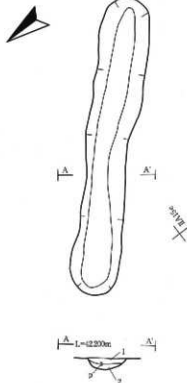
1. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 炭化物少量、黄褐色細砂少量含む
2. 5YR5/8 明赤褐色炭化灰 粘性强 しまり密 灰白色粘土少量含む
3. 10YR5/1 暗灰色粘土 粘性强 しまりやや密 黄褐色細砂少量含む
4. 10YR5/1 暗灰色粘土 粘性强 しまりやや密 酸化鉄少量、灰面に不貝遺物層在

27号土坑

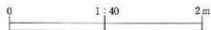


1. 7.5YR4/1 黄灰色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 炭化物微量、灰色細砂プロック少量含む
2. 10YR3/1 黒褐色粘土 粘性强 しまりやや疎 炭化物微量、灰色細砂プロック少量、小礫やや多く含む
3. 10YR2/2 黒褐色粘土 粘性强 しまりやや密 炭化物微量含む
4. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强やや軟 しまりやや疎 炭化物微量、植物体やや多く含む
5. 10YR3/2 黒褐色粘土 粘性强 しまりやや疎 炭化物微量、植物体中量含む

28号土坑



1. 10YR4/2 灰黄褐色粘土 粘性强 しまり密 炭化物微量、酸化鉄少量含む
2. 10YR4/3 に近い黄褐色粘質シルト 粘性强 しまりやや密 炭化物微量、酸化鉄少量含む



第68図 26~28号土坑

3 古代以降の遺構・遺物

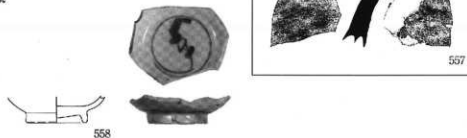
20号土坑



22号土坑



24号土坑

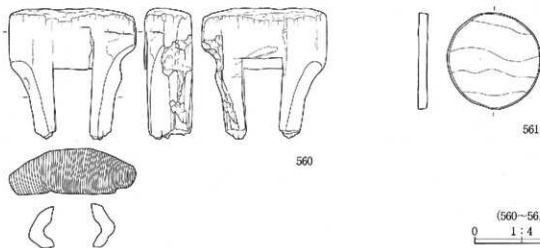


3号性格不明遺構



(552~559)
0 1:3 10cm

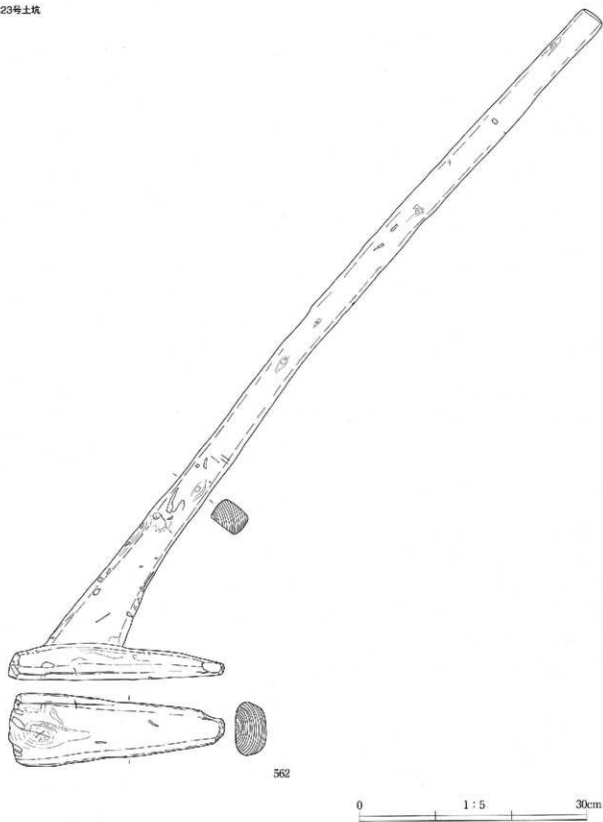
23号土坑



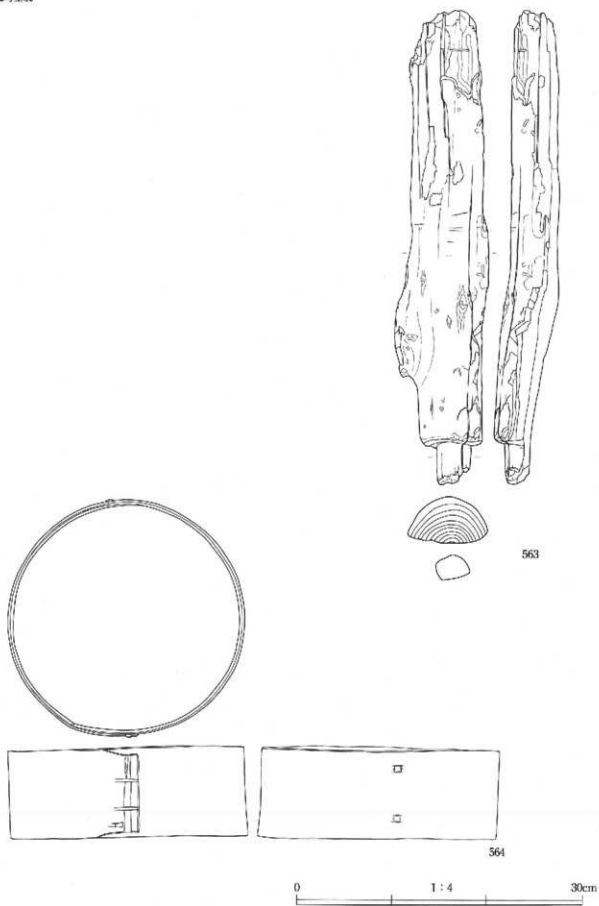
(560~561)
0 1:4 10cm

第69図 土坑・性格不明遺構（古代以降）出土遺物（1）

23号土坑

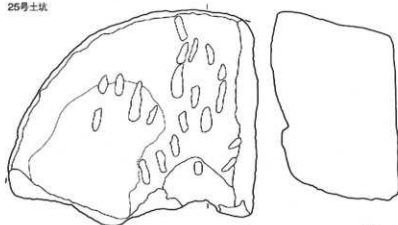


第70図 土坑（古代以降）出土遺物（2）

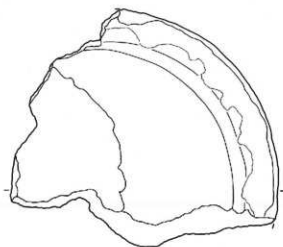
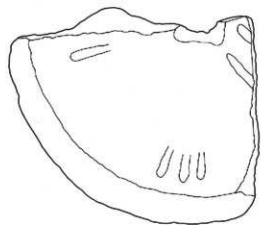


第71図 土坑（古代以降）出土遺物（3）

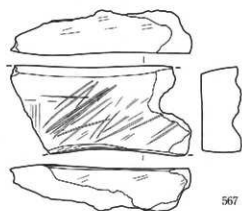
25号土坑



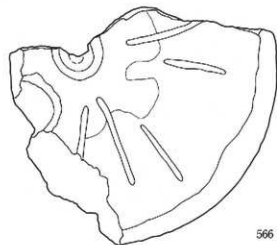
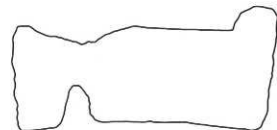
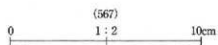
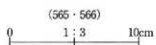
565



22号土坑



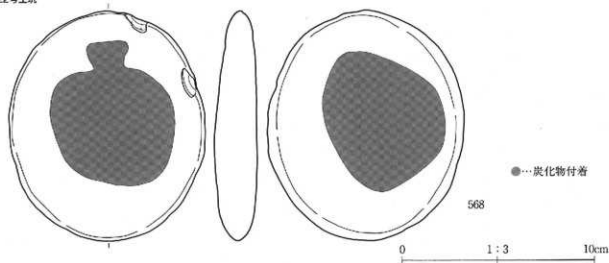
567



566

第72図 土坑（古代以降）出土遺物（4）

22号土坑



第73図 土坑（古代以降）出土遺物（5）

〈埋土〉4層に分かれる。褐灰色粘土層（4層）を主体とし、埋土上位に酸化鉄が層状で堆積する。
 〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は全周する。ほぼ直立気味に立ち上がる。
 〈出土遺物〉底面に木質遺物が集中している。加工痕のあるものも認められるので、人為的に埋められた可能性が高いが出土状況に規則性が見いだせない。木質遺物については図示していない。
 〈時期〉出土遺物は木質遺物のみで時期の特定には難しいが、埋土の様相からみて近世以降と思われる。

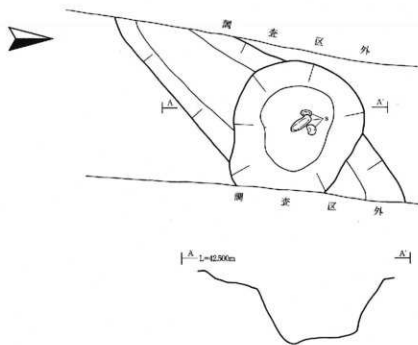
27号土坑（第68図、写真図版14）

〈位置〉調査区中央、Ⅱ A14 f グリッドに位置する。
 〈検出状況〉Ⅲ a 層上面に褐灰色のプランで検出した。
 〈重複関係〉なし。
 〈形態・規模〉円形を呈し、規模は直径1.1mを測る。深さは検出面から最深92cmである。
 〈埋土〉4層に分かれる。褐灰色粘土層（4層）を主体とし、埋土上位に酸化鉄が層状で堆積する。
 〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は全周する。ほぼ直立気味に立ち上がる。
 〈出土遺物〉なし。
 〈時期〉出土遺物がないので時期の特定は難しいが、埋土の様相から近世以降と思われる。

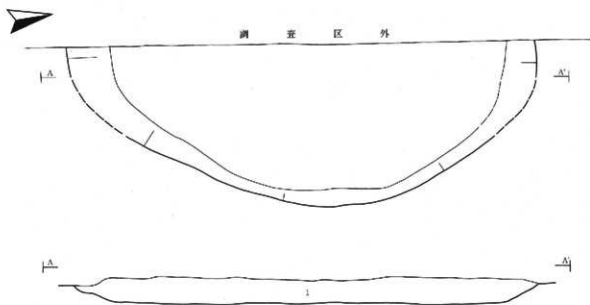
28号土坑（第68図、写真図版14）

〈位置〉調査区中央、Ⅱ A15 d グリッドに位置する。
 〈検出状況〉Ⅲ a 層上面に灰黄褐色のプランで検出した。
 〈重複関係〉なし。
 〈形態・規模〉細長い楕円形を呈し、規模は3.2×0.5m深さは検出面から最深13cmである。
 〈埋土〉2層に分かれる。灰黄褐色粘土層主体（1層）と、にぶい黄褐色砂質シルト層（2層）主体とで構成される。
 〈底面・壁〉底面は丸く窪んでおり、壁も含めて断面が半円状を呈する。壁は全周する。
 〈出土遺物〉なし。
 〈時期〉出土遺物がないので遺構の時期特定は難しいが、埋土の様相からみて近世以降と思われる。

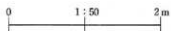
1号性格不明遺構



2号性格不明遺構



1. 10YK2/3 黒褐色粘質シロト 褐色鉄 しまりやや密 面化粧の量、器壁較少量含む



第74図 1・2号性格不明遺構

(2) 性格不明遺構

形態に特徴がないもの、また形態や規模は堅穴住居跡などと類似していても、浅かったり、また底面上に炉や柱穴などの付属施設がないものを一括して性格不明遺構とした。3基見つかっており、出土遺物から古代以降に位置づけた。

1号性格不明遺構(第74図、写真図版15)

〈位置〉調査区北端、I A 2 I グリッドに位置する。本遺構は東西両側が調査区外に及んでいる。

〈検出状況〉Ⅲ a 層上面に褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉遺構の両端が調査区外に及んでおり、全容が定かではないが、検出できた部分では北東から南西にかけて長い形態で、中央部には1.9×1.7m規模の楕円形の掘り込みを伴う。長さは3m、幅1.3mを測る。深さは検出面から最深20cmであり、掘り込みの深さは検出面から90cmである。

〈埋土〉断面図は図示していないが、砂質シルトを主体とする。

〈底面・壁〉底面はややいびつである。掘り込みの底部はほぼ平坦である。壁は東西端を除き、検出できた。緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉なし。

〈時期〉出土遺物がないので遺構の時期特定は難しいが、埋土の様相からみて古代以降と思われる。

2号性格不明遺構(第74図、写真図版15)

〈位置〉調査区北端、I A 14 j グリッドに位置する。本遺構は西側が調査区外に及んでいる。

〈検出状況〉Ⅲ a 層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉本遺構は調査区外に及んでおり、全容が定かではないが、検出できた部分では南北に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は6.2×2.2mを測る。深さは検出面から最深34cmである。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とする単層である。雲母粒が混入している。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。壁は西側を除き、全周する。緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉なし。

〈時期〉出土遺物がないので遺構の時期特定は難しいが、埋土の様相からみて古代以降と思われる。

3号性格不明遺構(第69・75・84図、写真図版16・43・46)

〈位置〉調査区中央、II A 9 g グリッドに位置する。本遺構は西側の一部が調査区外に及んでいる。

〈検出状況〉II 層上面に黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉25号土坑と重複する。本遺構の方が新しい。

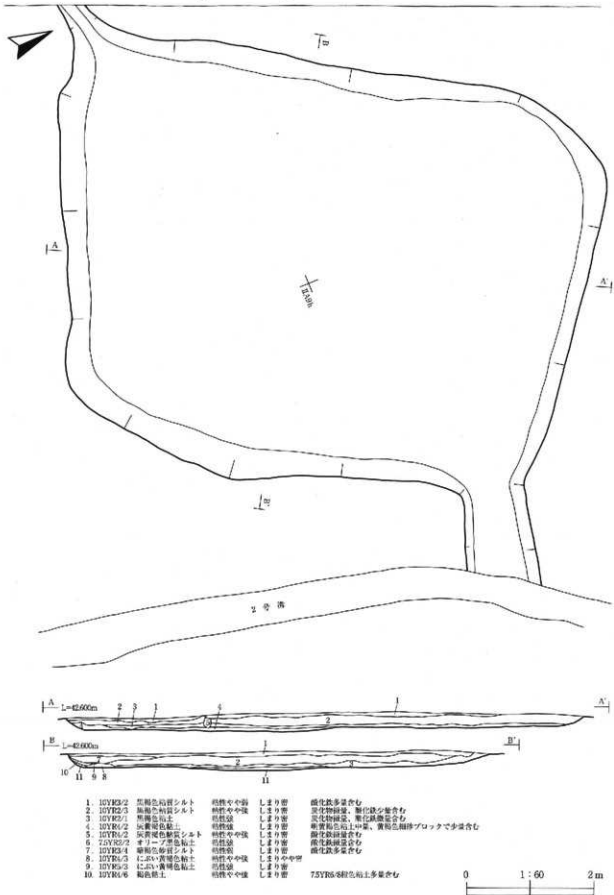
〈形態・規模〉隅丸の方形を呈し、規模は8.3×6.7mを測る。また南東端と南西端の角から溝状に伸びており、北東側はそのまま2号溝へと連結している。ただ、2号溝とは別々に精査しており、それぞれ伴うものか、新旧関係があるかどうか確認できていない。南西端の溝状に伸びる部分は調査区外に及んでいる。遺構の深さは検出面から最深28cmである。

〈埋土〉10層に分けられる。埋土上位は黒褐色粘質シルトを主体とし、その下は粘土が主体となる。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦である。調査区外に及ぶ溝状の部分を除き全周する。比較的大きく外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉本遺構からは多量の縄文土器片と陶磁器片が出土している。いずれも磨滅が激しい。また底面上から銭貨と鉄製品の一部が出土している。

調査区外



第75図 3号性格不明遺構

縄文土器は埋土中から19518.55g分出土している。流れ込みによるもので、遺構に伴うものではない。また土師器・須恵器が11166g出土したが、こちらも流れ込みによる混入と思われる。1点図示した(559)。須恵器の甕の胴部片である。生焼けの状態で、色調が赤い。

陶磁器片は埋土から67.90g出土している。小片で、図示していない。

銭貨は鉄銭で寛永通宝(578)である。

鉄製品はキセルの雁首の一部(582)である。

(時期) 縄文土器や土師器・須恵器の出土量が多いが、流れ込みであり、遺構の時期を反映していない。一方、底面上から銭貨(寛永通宝)が出土しており、こちらの方が遺構に伴うものと考えられる。したがって、本遺構の時期は近世と思われる。

(その他) 本遺構の性格付けは困難であるが、周辺が水田地に囲まれていること、また遺構の形態から近世以降の水田耕作に伴う「苗代」であった可能性もある。

(3) 溝 跡

本遺構から6条の溝跡が見つまっている。Ⅱ層上面で検出しており、したがって古代以降となると推定される。

1号溝跡(第76・77図、写真図版17)

(位置) 調査区中央から南側、ⅡA10f～ⅡA12eグリッドに位置する。

(検出状況) Ⅱ層上面で黒褐色のプランで検出した。

(重複関係) なし。

(規模) 長さ25m、幅50cmを測る。深さは検出面から8cmである。

(埋土) 黒褐色粘質シルトを主体とする単層である。

(底面・壁) 底面は丸く窪んでおり、壁も含めて断面が半円状を呈する。

(出土遺物) なし。

(時期) 古代以降と推定される。

2号溝跡(第76・77・80図、写真図版17・18・43)

(位置) 調査区中央から南側、ⅡA8i～ⅡA18eグリッドに位置し、両端が調査区外に及んでいる。

(検出状況) Ⅱ層上面で暗褐色のプランで検出した。

(重複関係) 3・5・6号溝跡と重複する。本遺構が最も新しい。ただし、3・5・6号溝跡が埋没した後で構築されており、いずれの遺構の壁面上部を壊しているにすぎない。

(規模) やや蛇行気味に北東から南西へと伸びる。調査区内で検出できた部分で長さ56m、幅40～100cmを測る。深さは検出面から8～16cmである。

(埋土) ほほ暗褐色粘質シルトを主体とする単層であるが、一部に褐灰色粘土が層状に堆積する(D-D'ベルト周辺)。

(底面・壁) 幅の狭い場所の底面は丸く窪んでおり、壁も含めて断面が半円状を呈する。幅が広い場所の底面は平坦で、壁は緩やかに外へとひらきながら立ち上がる。

(出土遺物) 土師器・須恵器9.10g、陶器97.13gが出土している。いずれも小片である。1点図示した。569は須恵器甕の底部片である。

(時期) 出土遺物から古代以降と推定される。

3号溝跡(第76・77・80図、写真図版18・43)

(位置) 調査区中央から南側、ⅡA10h～ⅡA18eグリッドに位置し、両端が調査区外に及んでいる。

〈検出状況〉Ⅱ層上面で暗褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉2・6号溝跡と重複する。本遺構は2号溝跡よりも古く、6号溝跡よりも新しい。

〈形態・規模〉南西から北東に向け、略直線的のび、南西端で大きく東側へと曲がる。調査区内で検出できた部分で、長さ47m、幅170～266cmを測る。深さは検出面から40～55cmである。

〈埋土〉9層に分けられる。1層は暗褐色粘質シルトを主体とする層であるが、2層以下は粘土層主体で各層中に炭化物や酸化鉄の混入が認められる。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦であるが、一部やや歪な形態になっている。壁は大きく外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉縄文土器14680.45g、土師器・須恵器11425gが出土している。ただし、本遺構は縄文後期の包含層（Ⅱ層）を掘り込んで構築しており、したがって出土した縄文土器はすべてⅡ層中から流れ込んだもので、本遺構に伴うものではない。土師器・須恵器も小片で、特に土師器は磨減が激しく、図示できるものがほとんどなかった。2点図示した。570は土師器甕の口縁部片で、小片のため器形復元ができなかった。口縁部が大きく外へと屈曲するのが特徴である。571は土師器の蓋で、破片であり、全体が伺えないが、頂部にやや方形基調の突起が付き、また体部には穿孔が1個認められる。

〈時期〉出土した須恵器などから、古代以降に比定されるものと思われる。

4号溝跡（第76・78・80図、写真図版19・43）

〈位置〉調査区中央から南側、ⅡA13g～ⅡA18fグリッドに位置し、両端が調査区外に及んでいる。

〈検出状況〉Ⅱ層上面で暗褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉6号溝跡と重複する。本遺構の方が新しい。

〈形態・規模〉南西から北東へと、略直線的のびる。調査区内で検出できた部分で、長さ29m、幅230～300cmを測る。深さは検出面から60～80cmである。

〈埋土〉12層に分けられる。6層以下はほぼ水平堆積であるが、一部、それらの堆積層を壊してさらに堆積している（5層）。ただし観察したすべての断面にみられる現象ではない。埋土上位に相当する2・3層は暗褐色粘質シルトを主体とする層であるが、他は粘土層主体である。また埋土下位はグライ化により変色している。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦であるが、場所により、平坦面の幅は50～150cmと様ではなく、また一部やや歪な形態になっている。壁は大きく外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉縄文土器1778.79g、土師器や陶器の破片が109.12gが出土している。ただし、縄文土器はすべてⅡ層中から流れ込んだものであり、本遺構に伴うものではない。土師器や陶器の破片は、特に土師器は磨減が激しく、図示できるものがほとんどない。1点図示した。572は陶器片で、甕の体部片と思われる。

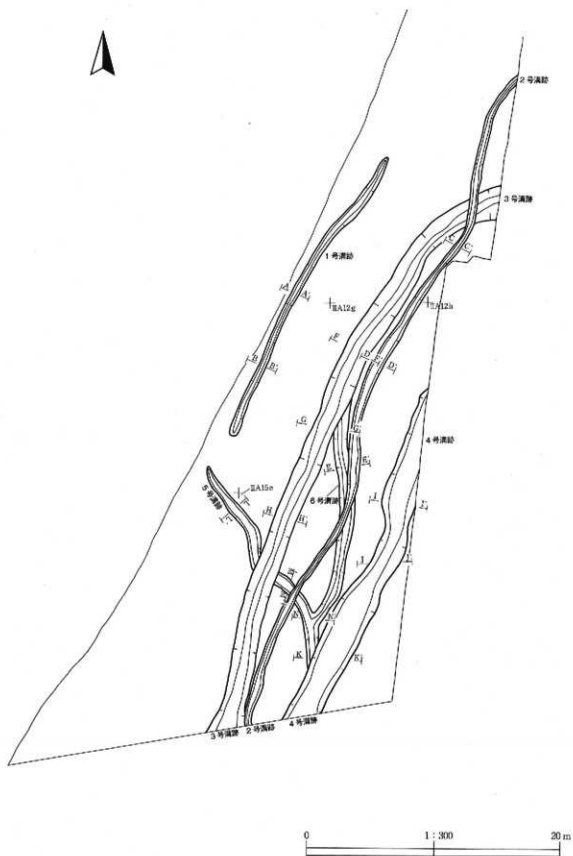
〈時期〉出土した土師器や陶器から、古代以降に比定されるものと思われる。また埋土上位から検出した炭化物について年代測定を行ったところ、1030±30yrBPの年代値を得た（第VII章参照）。

5号溝跡（第76・79図、写真図版19）

〈位置〉調査区中央から南側、ⅡA14d～ⅡA16fグリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅱ層上面で黒褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉2・3・4・6号溝跡と重複する。2・3・4号溝跡より本遺構の方が古い。また6号溝跡とは新旧関係はN-N'ベルトの上層で確認したが、ほぼ同一の土が堆積しており、切り合い関係が認められない。したがって新旧関係については不明であり、第79図上にも図示していない。本遺



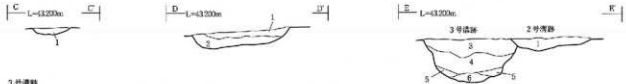
第76図 1～6号溝跡

1号溝跡



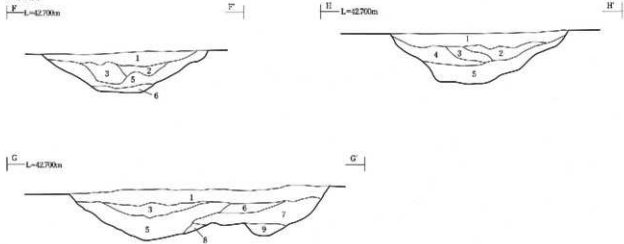
1. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、黄褐色細砂少量含む

2号溝跡



- 3号溝跡
 1. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、酸化鉄少量含む
 7. 10YR2/1 黒色粘土 粘性強 しまりやや密 炭化物少量、酸化鉄少量含む
 9. 10YR4/2 灰黄褐色粘土 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、酸化鉄少量含む
 8. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物微量含む
 2号溝跡
 1. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量含む
 2. 10YR5/1 黒灰色粘土 粘性強 しまり密 炭化物微量含む

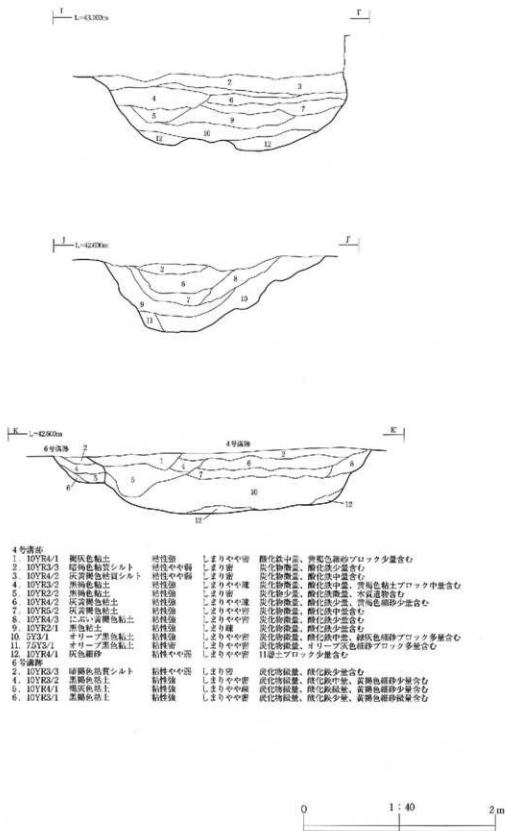
3号溝跡



1. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性弱 しまり密 炭化物微量、酸化鉄下に僅在
 2. 10YR4/4 灰黄褐色粘土 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、黒灰色粘土少量含む
 3. 10YR2/1 黒色粘土 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、2号土でロウク少量含む
 4. 10YR2/1 黒色粘土 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、黄褐色細砂少量含む
 5. 10YR2/1 黒色粘土 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、酸化鉄微量含む
 6. 10YR4/2 灰黄褐色粘土 粘性やや強 しまりやや密 炭化物微量、酸化鉄少量、黄褐色細砂中多く含む
 7. 10YR2/1 黒色粘土 粘性強 しまりやや密 炭化物中量、黄褐色細砂少量含む
 8. 10YR3/1 黒褐色粘土 粘性やや強 しまりやや密 緑灰色粘土多量含む



第77図 1～3号溝跡断面



第78図 4号溝跡断面

5号溝跡

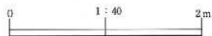


1. 10YR4/2 灰黄褐色粘土 粘性強 しまりやや硬 炭化物微量、酸化鉄少量、黄褐色細砂ブロック少量を含む

6号溝跡

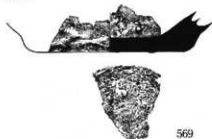


- | | | | | |
|------------|----------|-------|--------|----------------------|
| 1. 10YR4/1 | 海灰色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまり密 | 炭化物微量、酸化鉄少量を含む |
| 2. 10YR3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまり密 | 炭化物微量、酸化鉄少量を含む |
| 3. 10YR2/1 | 黒色粘土 | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、酸化鉄少量、黄褐色砂塊を含む |
| 4. 10YR3/2 | 黒褐色粘土 | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、酸化鉄少量、黄褐色砂塊を含む |
| 5. 10YR4/1 | 海灰色粘土 | 粘性強 | しまりやや硬 | 炭化物微量、酸化鉄少量、黄褐色砂塊を含む |
| 6. 10YR3/1 | 黒褐色粘土 | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、酸化鉄少量、黄褐色砂塊を含む |
| 7. 10YR2/1 | 黒色粘土 | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、酸化鉄少量、黄褐色砂塊を含む |
| 8. 10YR3/3 | にぶい黄褐色粘土 | 粘性強 | しまりやや弱 | 炭化物微量、酸化鉄少量を含む |

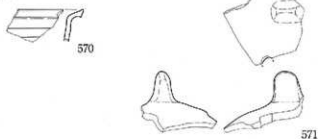


第79図 5・6号溝跡断面

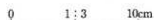
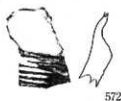
2号溝跡



3号溝跡



4号溝跡



第80図 溝跡出土遺物

構と6号溝跡とは一つの遺構である可能性も考えられる。

〈形態・規模〉4号溝と切り合う箇所までは北西から南東へとほぼ直線的にのびる。長さ18m、幅100cmを測る。深さは検出面から48cmである。

〈埋土〉8層に分けられる。灰黄褐色粘土を主体とする単層である。

〈底面・壁〉底面はややいびつである。壁は直立気味に立ち上がる。

〈出土遺物〉縄文土器265.35g出土しているが、すべてⅡ層中から流れ込んだものであり、本遺構に伴うものではない。

〈時期〉切り合い関係から本遺構よりも新しいと判断できる3号溝跡などが古代に比定されるので、本遺構も古代と思われる。

6号溝跡（第76・79図、写真図版20）

〈位置〉調査区中央から南側、ⅡA13f～ⅡA16fグリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅱ層上面で暗褐色のプランで検出した。

〈重複関係〉2～5号溝跡と重複する。2～4号溝跡より本遺構の方が古い。5号溝跡とは前述の通りで、新旧関係については不明である。また切り合う4号溝跡の東側からは本遺構が認められないので、本遺構の北側は完全に4号溝と重複しているか、4号溝のどこかで収束しているかであると思われる。

〈形態・規模〉北～南にのびる、両端が3、4号溝と重複しており、検出できた部分はほぼ直線で、長さ15m、幅100cmを測る。深さは検出面から12～30cmである。

〈埋土〉8層に分けられる。埋土上層は粘質シルト主体。埋土下位は粘土主体となる。炭化物や細砂など混入物に富む。

〈底面・壁〉底面はほぼ平坦であるが、壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉縄文土器778.67g出土しているが、すべてⅡ層中から流れ込んだものであり、本遺構に伴うものではない。

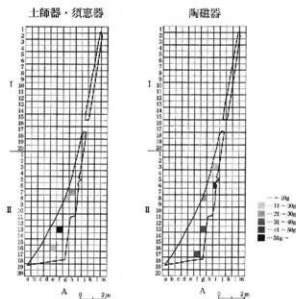
〈時期〉切り合い関係にある4号溝跡が古代であるので、本遺構も古代と判断した。

（4）遺構外から出土した古代以降の遺物

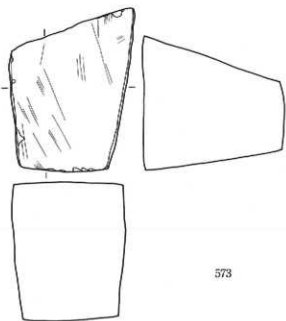
本遺跡では遺構外から、古代の土師器・須恵器、また近世陶磁器が出土している。

いずれも小片で、ほとんど器形が復元できないものばかりである。なお、それぞれの分布をグリッド毎に重量で示したものが第81図である。

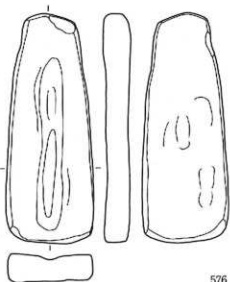
土師器、須恵器は714.81g出土している。第81図左に示した分布をみると、ⅠA18jグリッドを北限とするが、集中的に見られるのはⅡA7g～7iグリッドから南側である。古代の遺構は調査区北端のⅠAグリッドに集中しているのに対し、該期の遺物は、遺構周辺ではなく、時期不明の溝跡や縄文時代の遺構が集中していた場所から出土する傾向が認められた。なお、



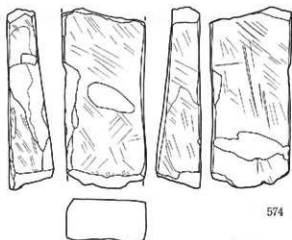
第81図 土師器・須恵器・陶磁器分布図



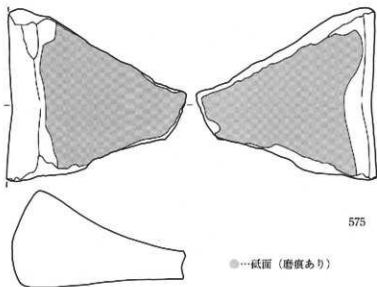
573



576



574



575

0 1:2 10cm

●...底面（磨痕あり）

第82図 遺構外出土遺物（古代以降）（1）

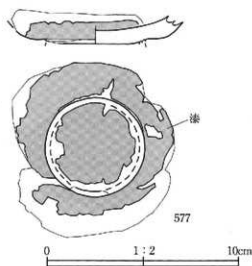
いずれも小片で図示していない。

陶磁器は54300g出土している。第81図右に示した分布をみると、土師器、須恵器とは異なり、II A 3 i グリッドを北限として、集中的には分布せず点在している。特に時期不明の溝跡の分布する場所から出土しており、何らかの関連があるかもしれないが、定かではない。いずれも小片で図示していない。

他に近世に比定されると思われる石製品が4点出土している。573・574・575は砥石である。573は砂岩製であり、立方形を呈し、何度も研いでいるためか、角が非常にシャープである。図示した面とその裏面の2面に磨痕が認められた。いずれの磨面も非常に擦り込まれている。574も砂岩製である。長方形基調の立方体で、両端を欠損しているが、残存する面にはいずれも激しい磨り痕が認められるので、ほぼ全面を使用されたものと考えられる。575は三角形のやや幅広の砂岩を利用している。両端が欠損しているが、砥石として利用していた際に破損したのか、あるいは石臼か何かの石製品を再利用したものの可能性もあるので、はっきり欠損しているといえるかどうか定かではない。側面はやや膨らんだ形に整形されている。体部の表裏両面を研ぐ面としており、摩擦が激しい。研ぎのために、面がすり減って凹んでいる。576は用途不明の石製品である。形状や側面の整形具合から近世ではないかと推定した。凝灰岩製で、偏平で隅丸方形基調に整形されている。幅広の面の中央は細長い楕円形基調に窪ませている。

その他、木製の椀が1点出土している。II A 18 f グリッドのII層を掘削中に出土した。遺構との関連性は認められない。577は体部のみ残存し、口縁部や高台部分は欠損している。内外面ともに漆が塗られている。

また銭貨が3点出土している。いずれもII層中から出土しており、何らかの作用で混入したものと思われる。579・580は水楽通宝である。いずれも完形である。581は3分の1ほど欠損しているが残存部分にみられる文字から元祐通寶と考えられる。



第83図 遺構外出土遺物(古代以降)(2)

3号性格不明遺構



578



582

遺構外



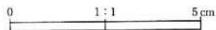
579



580



581



第84図 銭貨・鉄製品

Ⅶ 自然科学分析

1. 宝祿Ⅱ遺跡より出土した木製品の樹種

吉川純子（古代の森研究会）

1 はじめに

宝祿Ⅱ遺跡は奥州市江刺区の北上川と広瀬川に挟まれた沖積地に位置し、近世とみられる木製品が数点発見された。当時の木材利用を検討するためこれら木製品3点の樹種を調査した。木製品からは剃刀で横断面、放射断面、接線断面を採取し、ガムクロラルでプレパラートを作成した。

2 同定結果と考察

同定結果を以下に示す。

試料1	黒漆塗り椀	ブナ属
試料2	曲げ物側板	スギ
試料3	鍬	クリ

樹種同定を行った結果、以上の3分類群が確認された。スギは東北で様々な用途に利用されており、とくに曲げ物が出現してからは針葉樹材の中でも多く利用され、8世紀以降はヒノキよりも多く、曲げ物用材として確認数が際だっている。ブナ属は東北地方で椀に用いる例が多く見られ、江戸の仙台城の丸遺跡では漆器15点にブナが用いられている（山田1993）。クリは東北地方では4世紀頃から鍬鋤類に使われており、18世紀以降も鍬の用材として確認数が比較的多い。

以下に同定された分類群の木材解剖学的記載を行う。

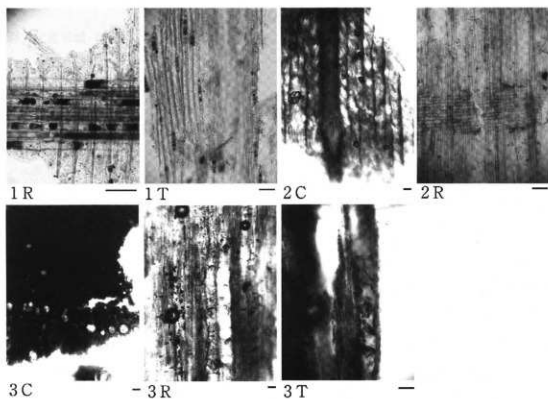
スギ (*Cryptomeria japonica* (Linn.fil.) D.Don)：分野壁孔はスギ型で横に長い楕円形となり、1分野に2～3個ある。

ブナ属 (*Fagus*)：単独ないし2、3個連結した小さな道管が年輪内にやや密に分布し、晩材部でやや径が減ずる、散孔材。横断面に頻繁に広放射組織があり、年輪界と直交する部分で年輪界が外に突出する傾向がある。放射組織は1～3、4細胞幅の紡錘形と、幅の広く長い広放射組織があり、同性である。道管内の穿孔板は単一である。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：年輪のはじめに大きな道管が2～3列集合し、その後径が急減して火炎状に小管孔が配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で放射組織は単列で同性である。

引用文献

山田昌久. 1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究特別第1号, 植生史研究会, 1-244.



図版1 宝祿Ⅱ遺跡出土木製品の顕微鏡写真
 1.スギ(曲げ物) 2.ブナ属(椀) 3.クリ(鉾)
 C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm

第85図 宝祿Ⅱ遺跡出土木製品の顕微鏡写真

2 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

宝祿Ⅱ遺跡は、岩手県奥州市江刺区稲瀬字宝祿276-1 (北緯39度12分11秒、東経141° 09' 34") に所在する。

(2) 測定対象試料

測定対象試料は、SD05埋土中位出土の炭化物 (No.1 : IAAA-72226) である。

(3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを精製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(4) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxⅡ) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(5) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

- 2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。
- 3) 付記した誤差は、複数回の測定値について χ^2 検定が行われ、測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値、みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定されるが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰ : パーミル) で表した。

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_R) / {}^{13}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{13}\text{A}_S$: 試料炭素の ^{13}C 濃度 : ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) $_S$ または ($^{13}\text{C}/^{13}\text{C}$) $_S$

${}^{13}\text{A}_R$: 標準現代炭素の ^{13}C 濃度 : ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) $_R$ または ($^{13}\text{C}/^{13}\text{C}$) $_R$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 (${}^{13}\text{A}_S = {}^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト製の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に (加速器) と注記する。

- 5) $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ^{14}C 濃度 (${}^{14}\text{AN}$) に換算した上で計算した値である。(1) 式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_k = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_k - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好でその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

- 6) pMC (percent Modern Carbon) は、現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合を示す表記である。 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、 ^{14}C 年代が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

- 7) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。
- 8) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{13}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCal3.10較正プログラム (Bronk Ransey1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使

用した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。

(6) 測定結果

^{14}C 年代は、SD05埋土中位出土の炭化物 (No.1 : IAAA-72226) が $1030 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、985-1025AD (68.2%) である。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37 (2) , 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43 (2A) , 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A) , 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

第2表 放射性炭素年代測定結果

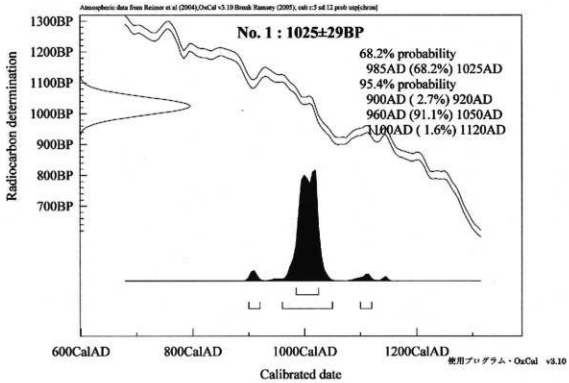
IAA CodeNo.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-72226	試料採取場所 : 岩手県奥州市江刺区稲瀬字宝祿 276-1宝祿II遺跡	Libby Age (yrBP) : 1030 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加減器) = -9.71 ± 0.97
	試料形態 : 炭化物	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -119.8 ± 3.2
	試料名 (番号) : No.1	pMC (‰) = 88.02 ± 0.32
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -92.0 ± 2.8 pMC (‰) = 90.80 ± 0.28
#2045		Age (yrBP) : 780 ± 20

第3表 参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-72226	No.1	1025 ± 29

ここに記載するLibby Age (年代値) と誤差は下1桁を丸めない値です。

【参考値：暦年較正 Radiocarbon determination】



第86図 参考値：暦年較正

VIII ま と め

1 本遺跡出土の第Ⅲ群土器について

(1) 大文字遺跡出土土器との比較

今回の調査で本遺跡から出土した土器は第Ⅲ群が主体である。また本遺跡から800m西側の同じ江刺平野に立地する大文字遺跡が位置する。大文字遺跡は旧江刺市教育委員会により平成14年から15年にかけて調査が行われ、縄文時代後期前葉から中葉の土器群が多量に出土している。出土した土器は、本遺跡から出土した第Ⅲ群土器群と類似しているため、大文字遺跡は本遺跡とほぼ同時期の遺跡として捉えることが出来る。

大文字遺跡は平成17年に報告書が刊行されており、そのなかで該期の土器群が詳細に分類されている。ただし報告書によると、調査では遺構検出面が地表下1m30以上を超え、湧水がひどく遺物を層位的に取り上げることが困難であったとある。したがって報告書中の分類もこれまでの報告書や土器編年に依るところが大きいようである。

本遺跡も似たような状況であり、遺物の層位的な把握は困難を極めた。ただし、本遺跡では住居、住居状遺構・土坑といった遺構の埋土中からも土器が出土しており、これらの土器群の比較から、宝祿Ⅱ遺跡と大文字遺跡から出土した縄文後期前葉から中葉の土器群について、土器様相の抽出とそれらの時期的な位置づけとを行いたい。

(2) 第Ⅲ群土器の細分類について

第Ⅳ章で示した第Ⅲ群土器について、大文字遺跡の報告書に準じて5細分する。

第Ⅲ群①類：縄文を地文として施文後、単沈線や平行沈線により曲線や渦巻き文が描かれるもの。

沈線間には刺突文や刻みが充填されるものも認められる。大文字遺跡の報告書中（以下、「報告書中」は省略）、「Ⅲ類b土器」が相当する。

第Ⅲ群②類：口縁部や頸部に複数条の沈線文を横位に巡らせ、その沈線に縦位の蛇行沈線文や交互に入り組む連弧文が付く。沈線の下に地文として縄文が施文されるものと無いものがある。大文字遺跡の「Ⅳ類a土器」に相当する。

第Ⅲ群③類：沈線により、直線的あるいは曲線的な区画文が描かれ、区画の内外どちらかに縄文が施文されるもの。また縄文を地文とし、沈線による曲線文が描かれるものを一括した。大文字遺跡の「Ⅳ類b土器」に相当する。

第Ⅲ群④類：沈線による曲線的な区画文が描かれ、区画内に縄文と細かな刺突文を充填させるもの。刺突文は無い場合もある。大文字遺跡の「Ⅳ類c土器」に相当する。

第Ⅲ群⑤類：細い多重の沈線により曲線を描くものや多重の沈線を斜行させるもの、また口縁部に刺突文を充填させるものを一括した。大文字遺跡「Ⅳ類d土器」が相当する。

これらの土器群を周辺の遺跡と比較した場合、第Ⅲ群①類は新山権現社遺跡出土の第Ⅱ群・Ⅲ群Ⅰ類に類似し、また十腰Ⅰ式の影響を受けているものと推定される。そして第Ⅲ群②～⑤類は新山権現社遺跡Ⅲ群Ⅰ～3類や久田遺跡出土のⅡ群b類などに類似し、十腰Ⅱ～Ⅲ式の影響を受けると推定される。したがって、型式学的にみて、本遺跡出土の第Ⅲ群①類土器と第Ⅲ群②～⑤類土器には時期差があることが考えられる。

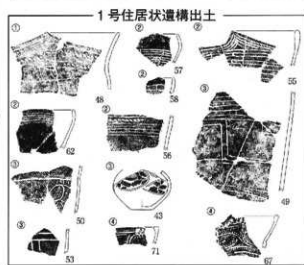
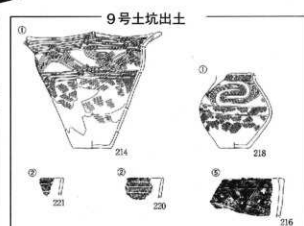
Ⅲ群①類のみが出土する遺構



Ⅲ群①～⑤類が混合する遺構

重複

新



Ⅲ群②～⑤類が出土する遺構



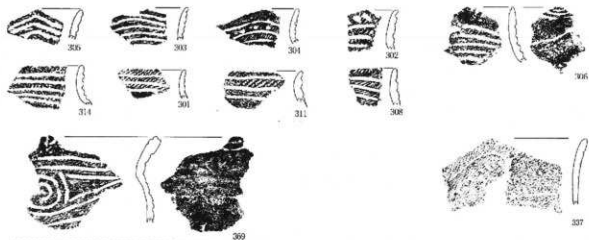
- ①…Ⅲ群①類
- ②…Ⅲ群②類
- ③…Ⅲ群③類
- ④…Ⅲ群④類
- ⑤…Ⅲ群⑤類

縮尺 1/8

第87図 Ⅲ群土器集成図(遺構内)

1 本道跡出土の第Ⅲ群土器について

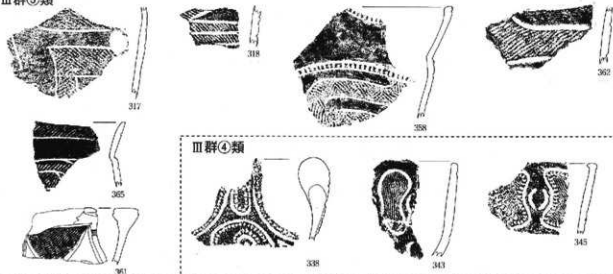
Ⅲ群①類



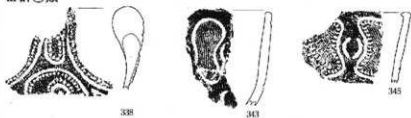
Ⅲ群②類



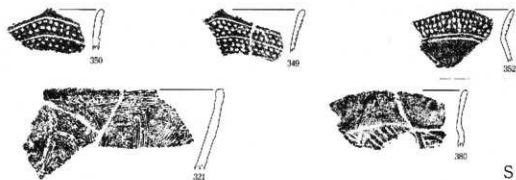
Ⅲ群③類



Ⅲ群④類



Ⅲ群⑤類



S = 1/4

第88図 Ⅲ群土器集成図 (遺構外)

(3) 遺構内出土土器について (第87図)

住居・住居状遺構・土坑から出土した土器について検討する。遺構内から出土した土器は、そのほとんどが破片資料で、器形復元出来たものはわずかである。

各遺構から出土した土器を前述の分類(Ⅲ群①～⑤類)に当てはめてみると、遺構は「第Ⅲ群①類のみが出土する遺構」・「第Ⅲ群①～⑤類が混合する遺構」・「第Ⅲ群②～⑤類が出土する遺構」に分けることが出来た。

「第Ⅲ群①類のみが出土する遺構」は4号住居状遺構(第87図上段)がある。4号住居状遺構はもともと土器の出土量が少ないので、明確な言及は出来ないが、次の「第Ⅲ群①～⑤類が混合する遺構」に属する3号住居状遺構と切り合い関係にあり、3号住居状遺構よりも占いで、第Ⅲ群①類は②類遺構よりも若干時期が古い可能性がある。

「第Ⅲ群①～⑤類が混合する遺構」は今回の調査でもっとも多くの遺構からみることができた。第87図中段には1～3号住居状遺構・9・15号土坑をその例として提示した。これらの遺構で出土した土器についてみてみると、第Ⅲ群①類と②～⑤類との割合では、②～⑤類の方が比較的多い傾向が認められる。また②～⑤類のなかで、どの分類だけが顕著に出土量が多いとか、またいずれの分類のみ出土する遺構などは認められない。強いて挙げるとすればいずれの遺構も第Ⅲ群⑤類が少ない傾向が読み取れる。

「第Ⅲ群②～⑤類が出土する遺構」は2号住居と5号土坑が挙げられる(第87図下段)。どちらも遺物量が少なく、明確な言及は難しいものの第Ⅲ群①類を伴わない遺構である。また2号住居跡はⅣ群(縄文時代晩期)の土器が混入するなど問題が無いわけではないが、第Ⅲ群③類のみが出土している。

これらのまとめから、以下のことが考えられる。

- ・第Ⅲ群土器は、第Ⅲ群①類と第Ⅲ群②～⑤類とは2つのまとめりとして捉えることができる。
- ・遺構の重複関係から第Ⅲ群①類と第Ⅲ群②～⑤類とは時期差があるものと思われ、Ⅲ群①類の方が古い。
- ・第Ⅲ群②～⑤類は文様が異なるものであるが、いずれの遺構からも混合して出土するので、それぞれに時期差があるものではない。
- ・今回の調査では第Ⅲ群①～⑤類が混合して出土する遺構が多く、したがって第Ⅲ群①類と第Ⅲ群②～⑤類とにみられる時期差はかなり短いものであろうと推測する。

前述の通り、第Ⅲ群①類は十腰内Ⅰ式の影響を、また第Ⅲ群②～⑤類は十腰内Ⅱ～Ⅲ式の影響を受けているものと思われる。今回の調査でも両者の間に時期差を捉えることができたが、その時期差は短いことが想定される。

(4) 遺構外出土土器について (第88図)

第Ⅵ章でも述べた通り、Ⅱ層中から多量の土器が出土した。第88図はⅡ層中から出土した土器のうち、前述の分類を基準にその主要な土器片について集成したものである。本来、遺構内出土のように、第Ⅲ群①類と第Ⅲ群②～⑤類とに層位的な差があるものと思われるが、調査ではそれを捉える事が出来ず、一括して取り上げている。また出土した第Ⅲ群土器の文様などの様相は文様や器形など、大文字遺跡と類似するものが多い。

第Ⅲ群①類は波状口縁と平縁口縁が見受けられ、緩やかに外反しながら立ち上がる器形である。また369のように口縁部が屈曲し、外反する器形も認められる。文様は大きく3つに分けられ、縄文

を地文とし、多重の沈線が横位に巡るもの、口縁部に沿って沈線による曲線文が巡るもの、三角形や渦巻き文が施文されるものがある。

第Ⅲ群②類も波状口縁と平縁口縁とが見受けられ、直線のかやや内湾しながら立ち上がる器形である。文様は2つに分けられる。縄文を地文とし多重の沈線文が横位に巡るのみのものと、それに縦位に曲線的な沈線が交差するものである。

第Ⅲ群③類は波状口縁と平縁口縁とがあるが、今回出土した土器のなかでは波状口縁の方が多い。頸部で屈曲し、内湾しながら立ち上がる器形である。主に胴部に沈線による区画文が施文され、クランク状のもの(317・318)と曲線的なモチーフのもの(358～365)とがある。

第Ⅲ群④類は平縁口縁が多く、また大きな突起がつくもの(波状口縁?)がある。直線的に開くか、あるいは内湾しながら立ち上がる器形である。口縁部に沈線により曲線的なモチーフの区画文が付き、縄文と刺突文が充填されるが、343のように刺突文が無いものも見受けられる。

第Ⅲ群⑤類は波状口縁と平縁口縁とがある。文様によって器形も異なり、口縁部に刺突文が充填されるものは頸部が屈曲し、直線的に外へと開く器形、また多重の細い沈線で曲線文を描くものは内湾しながら立ち上がる器形、また胴部に多重の斜行沈線が施文されるものは胴部が膨らみ、口縁部にはほぼ直立気味に立ち上がる器形である。

2 本遺跡出土の石器について

(1) 石器の器種組成について(第89図上)

今回の調査で出土した石器は、フレイク類も含めると1,529点を数える。第89図はそれらを器種ごとに示したものである。1,529点中、ツール類は285点を数える。機能・用途毎にみていくと、石匙、敲磨器類、石皿といった調理具は全体の36%を占め、それに次ぎ、石鏃や尖頭器といった狩猟具が全体の19%であった。一方、石錐、打製・磨製石斧といった採集加工具は全体の6%と低い。また土錘が出土しているが、川などを利用した漁撈が行われていたことが伺えるが、それを示す石器は見つかっていない。他に石棒などの祭祀用具と考えられる石器、石製品も出土していない。

これらの器種組成について他の遺跡と比較した場合、時期が異なるが隆岡市本宮熊堂A遺跡から出土した縄文時代晩期の石器群の組成比率とはほとんど差異がなかった。本宮熊堂A遺跡は季石川と北上川によって形成された自然堤防上に立地し、遺跡の南側に旧河道が隣接するので、本遺跡とはやや類似する立地の遺跡である。

(2) 石材組成(第89図下)

第89図は石器を礫石器と剥片石器に分け、それぞれの石材組成をみている。

礫石器(敲磨器類・敲石・石皿)は、計測した91点中、安山岩42点、アイサイト35点で、合わせると全体の8割強を占めている。一方、他の石材はその種類こそ豊富なものの、それぞれ1～4点程度見つかるにとどまっている。また剥片石器(石鏃・石錐・石錐・鉤状石器・礫器・尖頭器・打製石斧・スクレイパー)は、計測できた168点中、頁岩、赤色頁岩が合わせて140点で、全体の8割強を占める。その他の石材はやはり種類は多いものの、それぞれ1～6点といずれも多くない。したがって、礫石器・剥片石器いずれも、ある程度限定された石材を主に利用する傾向が見受けられる。

ただし剥片石器のなかで、頁岩以外の石材では、玉髓の利用が比較的多かった。本遺跡の石材鑑定を依頼した花崗岩研究会によれば、遺跡周辺に玉髓の露頭があるという。珍しい石材として選択されるよりも、頁岩に代わる手頃な石材として利用されていたことが考えられる。

(3) 主要な石器の属性分析

特に出土量の多かった石鏃・スクレイパー・敲磨器類・フレイク、チップについて属性分析を行った。

石鏃 (第90図右下)

51点出土した。石材では奥羽山脈産の頁岩製が全体の75%を占める。また赤色頁岩製が6点、玉随製が5点と、稀少な石材を利用する特徴が他の石器と比べやや多い特徴が見受けられた。分類毎の点数を比べてみると、かなりバラエティーに富むが、特に1類が全体の30%を占める。

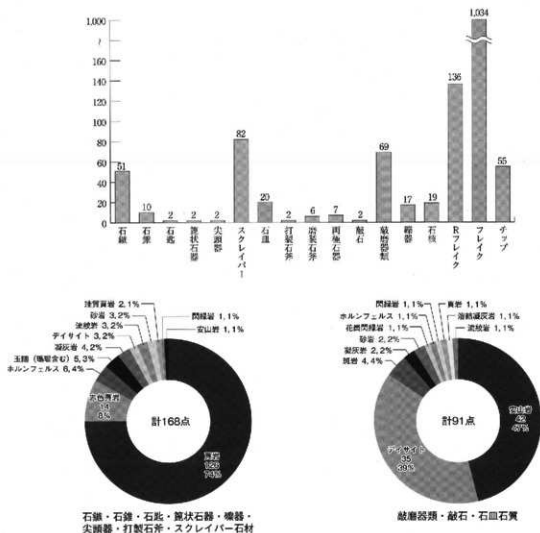
完形21点の長幅比を示した。分類は関係なく一括したが、1点を除き、いずれも1:1~2:1の範囲に収まる傾向が見受けられる。また21点それぞれの重量を軽いものから重いものへと並べると(第90図右下)、0.30~0.40g、0.70~0.80g、1.00g付近である程度まとまりが認められる。

スクレイパー (第90図右下)

分類毎の内訳は不掲載も含め、1類が61点、2類14点、3類7点である。

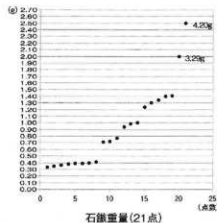
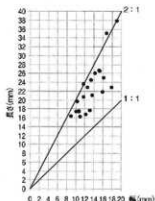
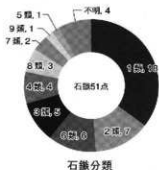
82点出土している。石材では頁岩が、最も多く、赤色頁岩や珪質頁岩も含めると全体の90%以上を占めている。頁岩はいずれも奥羽山脈産である。

完形74点について長幅比を観察したところ、1類はおおむね2:1~1:1の範囲に収まるものの、その範囲を超えるものも多く見受けられる。2類は2:1~1:2の広い範囲に分布している。

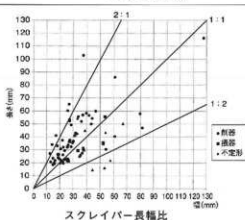
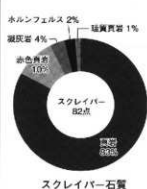


第89図 石器属性分析(1)

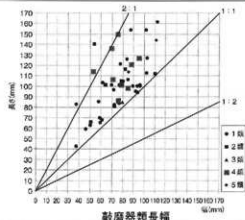
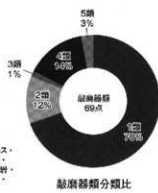
石鏃



スクレイパー



敲磨器類



フレイク・チップ

1a	1b	1c		
9	67	62		
2a	2b	2c		
9	84	141		
3a	3b	3c	4a	4b
4	36	48	239	335

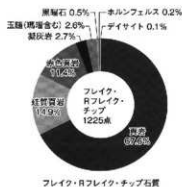
フレイク分類比 (点数)

1a	1b	1c		
58.75	772.56	403.05		
2a	2b	2c		
57.10	733.18	711.79		
3a	3b	3c	4a	4b
21.84	437.44	274.41	1157.88	1462.35

フレイク分類比 (重量)

分類	a類	b類
点数 (点)	3	52
重量 (g)	0.21	4.39

チップ分類比



敲磨器類 (第90図右下)

69点出土している。石材は凝灰岩、ホルンフェルスや閃緑岩など1、2点見つかったものを除くと、安山岩かデイサイトかに二分される。分類毎の内訳は1類が圧倒的に多く、全体の70%を占める。また次いで4類が多く、本遺跡の敲磨器類は磨痕が認められるものが多い傾向が読み取れる。なお6類、7類については分類項目を設定したものの、本遺跡からは出土していない。

完形品49点について長幅比を観察した。敲磨器類は体部の長い方を長さ、短い方を幅と設定して計測しており、したがって自然に2:1の方に偏るが、それでも1:1の周辺に集中する傾向が見受けられるので、利用される礫も楕円形よりも円形に近い礫が選定されている可能性が考えられる。

フレイク・チップについて

フレイク1,034点、チップ55点が出土している。他に出土した石核19点も含め、ツール類製作途中で排出されたものと推測される。第IV章で示したように、本遺跡出土のフレイクは打面、背面を基準に11分類している。それらの集計結果(報告書不掲載資料も含む)は第90図に示した。

ほとんどのフレイクが打面、背面の判別が難しく4類に含まれている。それら4 a、4 b類を除くと、2 c類が最も多く、2 b類がそれに次ぐ。これらは石器製作がある程度進んだ段階で排出されるものと考えられる。対して1 a、2 a類は少ない。これらは背面が自然面であり、石器製作の初段階で排出されるものと考えられる。このような傾向は、石器となる石材が、産地周辺(あるいは遺跡の外のどこか)である程度荒削りされた状態で、本遺跡に運ばれてきている可能性が考えられる。特に分類不能としたフレイクのなかで自然面の残らない4 b類の方が、自然面の残る4 a類より多くみつかり、またチップも自然面の残らないb類が圧倒的に多く、このことを裏付けている。

3 遺構の変遷について (第91・92図)

今回の調査で、宝祿Ⅱ遺跡が縄文時代後期・古代(平安時代)・近世の遺構を伴う複合遺跡である事が分かった。またそれら遺構面上、Ⅱ層は主に縄文時代後晩期の包含層であり、他に弥生土器が出土している。以下時代毎に遺構の分布とそれらの特徴についてみていく。

(1) 縄文時代・弥生時代 (第91図左)

縄文時代後期	弥生時代
竪穴住居跡2棟	土坑1基
住居状遺構4棟	土坑18基

縄文時代の遺構は調査区中央に偏っており、それぞれが重複している。また調査区の東側より外へと及んでいるものが多く、おそらくは該期の遺構群は調査区よりさらに東へと展開しているものと推定される。また弥生時代の土坑は調査区の南端で検出した。弥生時代の遺構は土坑1基のみで、その土坑も調査区外に及んでいるので、全容が分からず、また他に遺構があるかも定かではない。

縄文時代の竪穴住居跡2棟は約25mほど離れて位置する。どちらも遺構外に及んでおり、全容が定かではないが、柱穴や床土坑を有している。炉については1号住居跡は明確な炉が無く、南壁上に焼成を加えられた痕跡が2箇所認められるのみであった。2号住居跡の炉は石囲炉と思われるが、炉石が全周せず、また抜き取り痕もないので、元々なかった可能性が高い。各炉石の大きさや形に規則性がない。所謂「石囲炉」と考えていいか、難しいところではある。

住居状遺構は竪穴住居よりも南側に位置し、4棟が密集しており、重複するものもある。遺構は竪穴住居跡とはほぼ同じ大きさで柱穴などが認められるが、炉が無いので住居施設として機能するのか定

かではない。特に2号住居状遺構では床面に開口部が2m以上にもなる大きな掘り込みが認められ、ますます居住施設とは考えがたい。別の機能を考えるべきであろう。

土坑は竪穴住居や住居状遺構の周辺に分布する。それぞれの位置関係に規則性は見いだせず、竪穴住居・住居状遺構との関連性は定かではない。また比較的多く検出したものの、形態や深さに規則性が無く、その機能については不明である。ただし15号土坑は他と比べて深く、貯蔵穴の可能性がある。

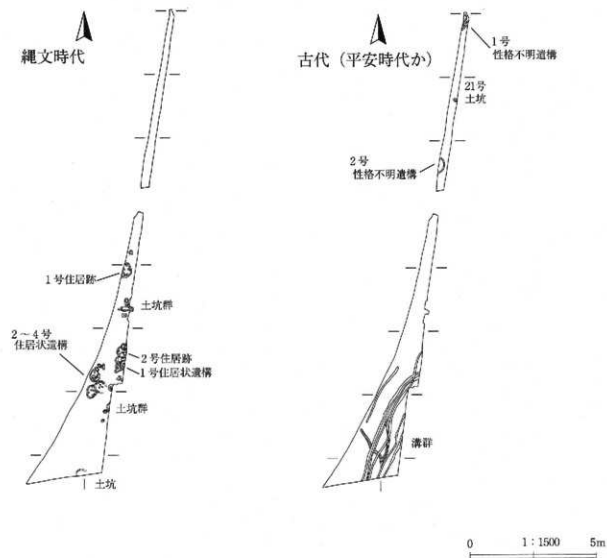
(2) 古 代 (第91図右)

土坑1基

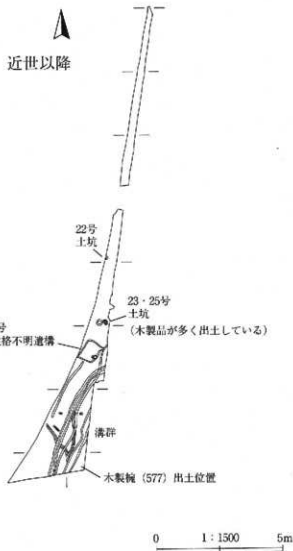
性格不明遺構2基

調査区北側に位置する。したがって縄文時代・弥生時代の遺構とは分布を異にする傾向が窺える。遺構は出土した土師器から、平安時代に比定されるものと思われるが、出土した土器群は磨減が激しく、詳細は不明である。遺構自体も調査区外に及ぶものばかりで性格などは不明である。

本遺跡の南側には平安時代の竪穴住居3棟が見つかったり、広岡前遺跡が隣接しており、関連があるかもしれない。



第91図 遺構変遷図(1)



第92図 遺構実測図(2)

るが、規模も類似し、またほぼ平行してのびている。何らかの関連性があることも考えられ、特に2号溝跡が近世の「苗代」と考えている3号性格不明遺構と重複することからも、これらの溝跡も水田耕作に関わるものである可能性が考えられる。

(3) 近世以降(第92図)

土坑9基

性格不明遺構1基

調査区中央付近から南端にかけて分布する。各遺構はある程度距離を置いて位置しており、したがってそれぞれの関連性は定かではない。

土坑は形態などからも性格は定かではない。27号土坑は形態から井戸の可能性も考えられるが、検出面から浅く、定かではない。遺構の底面付近から水が湧くものも多く、そのため、木質遺物が幾つか良好な状態で出土している。

性格不明遺構は底面上から古銭(寛永通宝)がみつかったので、遺構の時期も江戸時代と考えられる。遺構の形態からも水田耕作に利用された「苗代」の可能性が考えられる。

(4) その他、溝跡(第92図)

溝跡は埋土中から出土した遺物がⅡ層中から流れ込んだ縄文土器・石器を除くと、ほとんど無く、かろうじて出土した土師器・須恵器の小片や陶磁器類から、古代以降近世の遺構と推定した。ただし4号溝の埋土中から出土した炭化物の年代測定(AMS法による)を行ったところ、1030±30yrBPという結果を得ており(第Ⅶ章参照)、古代に近い時期のものである可能性が高いことが実証されている。

溝跡は5・6号溝跡をのぞいて、ほぼ同じ方向に延びている。そして特に3・4号溝は幅広であ

引用参考文献

- 今井富士雄・磯崎正彦1969『十勝内遺跡』(岩木山麓遺跡発掘調査報告書)岩木山刊行会
金子昭彦1993『新山権現社遺跡発掘調査報告書』(岩槻文第188集)(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
星野之2000『長倉I遺跡発掘調査報告書』(岩槻文第336集)(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
鈴木克彦2001『東北地方縄文時代後期土器編年の研究』集山園
名久井芳枝2003『北上山地川井村の山村生産用具コレクション』川井村教育委員会
稲島正和・江藤敦2005『広岡前遺跡発掘調査報告書』(岩槻文第430集)(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
及川潤・佐藤好幸・野坂晃平2005『大文字遺跡』(江刺市埋蔵文化財報告書第33集)江刺市教育委員会
羽柴直人はか2006『河崎の横堀定地発掘調査報告書』(岩槻文第474集)(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
須原拓・濱田宏・石崎高臣・龜澤盛行2007『本宮歴史A遺跡第26・29次発掘調査報告書』(岩槻文第502集)(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
小林達夫編2008『総覧 縄文土器』UM Promotion

第4表 縄文土器観察表

順番 番号	学名 図版	出土位置	土器 部位	形状	分類	残存 部位	外面文様	内面文様 内面形状	外面色調 内面形状	胎土	焼成	備考
1	21	1号住居	竪上位	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	口：沈線、縄文(LR)縦	ナデ	黒 灰黄緑	砂・石	C	
2	21	1号住居	竪上位	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	口：沈線→縄文(LR斜)	ナデ(横)	黒 灰黄緑	砂・石	A	
3	21	1号住居	竪下位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	胴：縄文(RL横)→沈線	ナデ(斜)	灰白 淡灰	砂・石 赤・雲	C	
4	21	1号住居	竪上位	深鉢	Ⅲ	胴部片	胴：乱糸(LR縦)→沈線	ナデ(縦)	黒 にふい黄緑	砂・石	A	
5	21	1号住居	竪上位	深鉢	I	胴部片	胴：縄文(LR斜)→淡帯、 沈線	ナデ(斜)	黒 にふい黄緑	砂・石	C	
6	21	1号住居	竪上位	鉢	Ⅶ	口一底 (L/3)	口一胴下：無文 底：割 代袋	ナデ	黒 無黒	砂・石	A	
9	21	2号住居	竪上位	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：縄文(LR横)→押圧、 沈線	ナデ(横)	黒 黒	砂	C	
10	21	2号住居	竪上位	鉢	Ⅲ	口縁部 片	沈線、縄文(LR横)	ナデ(横)	黒 灰黄緑	砂・石 赤・雲	C	
11	21	2号住居	竪下位	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴：縄文(RL横)→沈線	ナデ(斜)	黒 にふい黄緑	砂・石	B	
12	21	2号住居	竪上位	深鉢	Ⅲ④	胴部片	縄文(RL横)→沈線	ナデ(縦)	灰黄緑 灰黄緑	砂・石	C	
13	21	2号住居	竪下位	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴：縄文(LR縦)→沈線	ナデ(縦)	灰黄緑 黒	砂・雲	C	
14	21	2号住居	竪上位	深鉢	Ⅲ④	胴部片	縄文(RL横)、沈線	ナデ(横)	灰黄緑 にふい黄緑	砂	C	
15	21	2号住居	竪下位	深鉢	Ⅲ④	胴部片	縄文(LR斜)→沈線	ナデ(斜)	黒 灰黄	砂・石 赤・雲		
16	21	2号住居	竪上位	深鉢	Ⅲ④	胴部片	縄文(LR斜)→沈線	ナデ(横)	灰黄緑 にふい黄緑	砂・石	A	
17	21	2号住居	竪下位	鉢	Ⅲ	口一底 (L/3)	口：野糸 底：沈線	ナデ	黒 にふい黄緑	砂・石	C	
18	21	2号住居	竪下位	深鉢	Ⅳ	口縁部 片	沈線	ナデ(横)	淡黄 黄灰	砂	C	
19	21	2号住居	竪中下	鉢	Ⅳ	口縁部 片	唇：突起、沈線、割突、 口：沈線、割突	ナデ(横)、 口：沈線	明灰 灰黄緑	砂・雲	C	
20	21	2号住居	穴面下	浅鉢	Ⅳ	口縁部 片	口：沈線	沈線、ナ デ(横)	黒 緑	白・石	C	
21	21	2号住居	穴内	深鉢	Ⅵ	口一胴 上(2/3)	口一胴上：沈線、縄文 (LR縦)	ナデ(斜)	灰黄緑 灰黄緑	砂・雲	A	
22	21	2号住居	穴面 上	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口：縄文(RL横)	不明	黒 にふい黄緑	砂・石	C	
23	21	2号住居	穴面 上	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口一胴：縄文(RL横)	不明	黒 にふい黄緑	砂・雲	B	
24	21	2号住居	竪上位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口一胴：縄文(LR横)	ナデ(横)	黒 無黒	砂・石	B	
25	21	2号住居	竪上位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	縄文(RL斜)	ナデ(横)	黒 灰黄緑	砂・石	C	
26	21	2号住居	竪上位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口：縄文(LR横)	ナデ(横)	黒 灰黄緑	砂・雲	B	
27	22	2号住居	竪下位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	縄文(LR斜)	不明	灰黄緑 黒	砂・石	C	
28	22	2号住居	竪下位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	縄文(RL横)	ナデ(横)	黒 灰黄緑	砂・石 赤・雲	C	
29	22	2号住居	竪上位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	縄文(LR斜)	ナデ(横)	黒 にふい黄緑	砂・石	A	
30	22	2号住居	穴面 上	ミニ チュア	-	底部片	底下：無文	ナデ	灰黄緑 黒	砂・石	A	
39	22	1号住居状 遺構	竪下位	深鉢	Ⅵ	口一底 下	口：無文 底：縄文押圧 (RL)、縄文(RL横)	ナデ(横)	黒 にふい黄緑	砂・石	C	
40	22	1号住居状 遺構	竪下位	深鉢	Ⅵ	口一底 上(1/3)	口一胴上：縄文(LR横、 斜)	ナデ(横)	灰白 にふい黄緑	砂・雲	B	
41	22	1号住居状 遺構	竪中 位	深鉢	Ⅵ	口一底 上(1/4)	口一胴上：縄文(LR斜)	ナデ(横)	灰白 灰黄	砂・石 赤・雲	C	
42	22	1号住居状 遺構	竪下位	深鉢	Ⅵ	口一底 上(1/4)	口一胴上：縄文(LR横、 斜)	ケズリ→ ナデ	灰黄 にふい黄緑	砂・石	C	外面に炭化物
43	22	1号住居状 遺構	竪上位	深鉢	Ⅲ④	胴(1/3)	胴：縄文(LR斜)→沈線	ナデ(横)	黒 にふい黄緑	砂・石	A	
44	22	1号住居状 遺構	竪下位	深鉢	Ⅵ	口一底 下	底下：無文	不明	淡黄 淡黄	砂・石	C	
45	23	1号住居状 遺構	竪下位	台付鉢	Ⅵ	底部片	底下：縄文(RL斜) 底： 割代袋	ケズリ→ ナデ	黒 黒	砂・石	C	
46	23	1号住居状 遺構	竪上位	深鉢	Ⅵ	胴下→ 底部	胴下：無文 底：割代袋	ナデ	灰黄緑 黒	砂・石	C	

図版 番号	写真 図版	七土位 名	七土位 名	器種	分類	存在 部位	外面文様	内面文様 ・産地	外面色調 内面色調	胎土	構成	備考
47	23	1号住居状遺構	埋土中	深鉢	Ⅳ	口~胴 L2(2/3)	L1:彫み、沈線 刺:沈線、縄文(LR横)	沈線、ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	C	
48	23	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ①	口縁部片	口:縄文(LR横)→沈線、刺突 刺:縄文(LR)→沈線	ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	B	
49	23	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ②	胴部片	刺:縄文(LR横)→沈線	ナデ(斜)	灰青褐色	砂・石	C	
50	23	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	胴部片	刺:縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	A	
51	23	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	刺:沈線 口:沈線	沈線、ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	A	
52	23	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刺:沈線→縄文(LR横)	ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	C	
53	23	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ⑥	胴部片	刺:縄文(LR横)→沈線	ナデ(斜)	灰青褐色	白・石	B	
54	23	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ⑦	胴部片	刺:縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	B	
55	23	1号住居状遺構	埋土中	深鉢	Ⅲ⑧	口縁部片	口:縄文(LR横)→沈線	ナデ(斜)	灰青褐色	砂・石	B	
56	23	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ⑨	胴部片	刺:縄文(LR横)→沈線、刺突	ナデ	灰青褐色	砂・石	C	
57	23	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ⑩	口縁部片	口:無文 刺:沈線	ナデ(横)	黒褐色	砂・石	C	243と同一
58	23	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ⑪	口縁部片	L1:縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	陶系灰青褐色	白・石	C	
59	23	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ⑫	口縁部片	口:沈線	ナデ(斜)	黒褐色	砂・石	C	
60	23	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ⑬	胴部片	刺:縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	黒褐色	砂・石	C	
61	23	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ⑭	胴部片	刺:縄文(LR横)→沈線	ナデ(斜、縦)	灰白灰白	砂・石	C	
62	23	1号住居状遺構	埋土上位	鉢	Ⅲ⑮	口~胴(L1/4)	L1:縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	黒褐色	白・石	C	
63	23	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ⑯	胴部片	刺:縄文(LR横)→沈線	ナデ(縦)	灰青褐色	砂・石	C	
64	23	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ⑰	胴部片	刺:縄文(LR横)→刺突、沈線	ナデ(横)	黒褐色	白・石	C	
65	23	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ⑱	口縁部片	口:縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	C	
66	23	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ⑲	口縁部片	L1:沈線、刺突 ナデ(横)	刺突、沈線、ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	B	
67	24	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ⑳	口縁部片	口:沈線、刺突 刺:沈線、刺突	ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	C	
68	24	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ㉑	胴部片	刺:沈線、彫み、羽状縄文(RL・RL)	ナデ(横)	黒褐色	白・石	B	
69	24	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ㉒	口縁部片	口:縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	黒褐色	白・石	C	
70	24	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ㉓	口縁部片	刺:刺突、沈線	不明	浅黄褐色	砂・石	A	
71	24	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ㉔	口縁部片	口:縄文(LR横)→刺突、沈線	ナデ(斜)	緑褐色	砂・石	C	
72	24	1号住居状遺構	埋土上位	鉢	Ⅲ	胴部片	刺:無文 刺:沈線、羽状縄文(非給盆RL・RL)	指面による整形	黒褐色	砂・石	C	
73	24	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ	胴部片	刺:沈線→縄文(LR横)	ケスリ	灰青褐色	砂・石	C	
74	24	1号住居状遺構	埋土下位	盆	Ⅳ	口縁部片	口:工字文	沈線、ナデ(横)	緑褐色	白・黄	B	
75	21	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅵ	L1~基部	口~胴下:縄文(LR横、斜)	ナデ(横)	黒褐色	砂・石	C	外面に炭化物
76	24	1号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	口~胴:縄文(LR横)	ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	C	
77	21	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	口:縄文(LR横) 刺:無文 胴部:縄文(LR横)	ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	C	
78	24	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	口:縄文(LR横)	ナデ	灰青褐色	砂・石	B	
79	24	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	底部片	底:網代板	ナデ	灰青褐色	砂・石	C	
80	24	1号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	底部片	底:成形の痕跡	ナデ	黒褐色	砂・石	B	
81	24	1号住居状遺構	埋土上位	底部片	-	底部片	底:無文	ナデ?	黒褐色	砂・石	C	
82	21	1号住居状遺構	埋土上位	底部片	-	底部片	底:無文	不明	黒褐色	砂・石	C	
86	24	2号住居状遺構	埋土中	深鉢	Ⅲ㉕	口縁部片	L1:縄文(LR斜)→刺突、沈線	ナデ(横)	灰青褐色	砂・石	C	

図版番号	写真 図版	出土位置	出土 層位	器種	分類	残存 部位	外面文様	内面文様 ・測定	外面色調 内面色調	胎土	施 度	備考
87	24	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	口：縄文(RL横、斜)→沈線、刺突	沈線、ナデ(横、斜)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
88	21	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	口：縄文(LR?)→沈線	沈線、ナデ(横)	灰白、灰白	砂・石	A	
89	24	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：縄文、円形刺突、縄文(LR縦)	ナデ(横、縦)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
90	21	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	口：縄文(LR縦)→沈線	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	B	
91	24	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：縄文(RL横)→沈線、刺突	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
92	24	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：沈線、刺突、縄文(LR横)	ナデ(横)	灰白、灰白	砂・石	C	
93	24	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	胴部片	口：縄文(RL斜)→沈線	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
94	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ	口縁部片	口：沈線	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
95	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：縄文(LR縦)→沈線	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	A	
96	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	口：縄文(RL横)→沈線、刺突	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
97	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	口：縄文(LR斜)、沈線	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
98	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	唇：沈線 口：沈線→縄文(LR?)	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
99	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口：沈線、刺突、縄文?	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
100	25	2号住居状遺構	埋土下位	白付鉢	Ⅲ④	台部片	台：縄文(LR?)、刺突	不明	灰青褐、褐色	砂・石	B	
101	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：沈線→縄文(LR横、斜)	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	A	
102	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：縄文(LR縦)→沈線	不明	灰青褐、褐色	砂・石	A	
103	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：縄文(RL斜、縦)→沈線	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
104	25	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	Ⅵ	口一筋(L/3)	口：縄文(RL横) 胴：縄文(RL横)→沈線	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	A	
105	25	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	Ⅵ	口縁部片	胴：縄文押花(LR)、縄文(LR縦)	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
106	25	2号住居状遺構	埋土下位	白付鉢	-	台部	台：彫文	ナデ	灰青褐、褐色	砂・石	B	
107	25	2号住居状遺構	埋土下位	ミニツニア	-	底部片	底：縄文	ナデ	灰白、灰青褐	砂・石	B	
108	25	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	Ⅵ	口一筋(L/3)	口：縄文(RL横) 胴：縄文(RL横) 影：縄文(RL横)	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	外面に炭化物
109	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ	口(L/3)	口：縄文(RL横)、沈線	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
110	25	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	Ⅵ	口(L/2)	口：縄文(LR横、斜)	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
111	25	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	Ⅵ	口一筋(L/2)	胴上：縄文(RL横) 底：刺突	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	A	
112	25	2号住居状遺構	埋土下位	盆	Ⅵ	口(L/3)	口：縄文(RL横)、沈線	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
113	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅵ	口(L/3)	口：無文	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
114	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	Ⅲ	胴部片	胴：円形刺突、沈線、縄文(LR横)	ナデ(横)	灰白、褐色	砂	B	
115	25	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	Ⅳ	口一筋(L/2)	口：無文 胴：縄文押花(LR)、縄文(LR縦)	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	B	
116	25	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	-	胴(L/2)	胴：縄文(LR横、縦)	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
117	25	2号住居状遺構	床下土坑	白付鉢?	Ⅲ	台部	台：隆帯	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
118	25	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	-	胴下～底(L/3)	胴下：縄文(LR?)	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	B	
119	26	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	-	胴下～底(L/3)	胴下：無文 底：縄文	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
120	26	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	-	胴下～底(L/2)	胴下：縄文(RL斜) 底：刺突	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	B	
121	26	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	-	胴下～底	胴下：縄文(LR斜) 底：刺突	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
122	26	2号住居状遺構	埋土下位	深鉢	-	胴一筋	胴：縄文(LR斜、縦)	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	
123	26	2号住居状遺構	床下土坑	深鉢	Ⅶ	口一筋(L/4)	口一筋：縄文(LR縦) 胴：沈線	ナデ(横)	灰青褐、褐色	砂・石	C	

高校番号	学年	土位置	出土位置	器種	分類	保存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	胎土	焼成	備考
124	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	口→刷・縄文(LR斜)	ナデ(横)	現状 にぶい黄褐色	砂・黒	C	
125	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	口：縄文(LR斜)	ナデ(横)	黒褐色	砂・石	C	
136	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片(1/3)	口→刷・縄文(LR縦)	ナデ(縦)	灰褐色 にぶい黄褐色	砂・石・黒	B	
127	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	口：縄文(LR縦)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
128	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	口：縄文(LR縦)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
129	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	口：縄文(LR縦・斜)	ナデ(斜)	灰青褐色 灰青褐色	砂・石	A	
130	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	口：縄文(LR縦)	ナデ	暗灰青褐色	砂・石	C	
131	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	-	底部片	底：網代灰	不明	明褐色	砂・石	A	
132	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	-	底部片	底：網代灰	ナデ	黒	砂・石	B	
133	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	-	底部片	底：網代灰	ナデ	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
135	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ①	口縁部片	口：縄文(LR縦)、沈線 底：沈線	ナデ(横)	灰白 灰白	砂・石	C	
136	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ②	口縁部片	口：縄文(LR?横)→沈線	ナデ(斜)	黒褐色 灰青褐色	砂・石	C	
137	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	縄文(LR縦)→縄文押注(LR)	ナデ(横)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
138	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	縄文(LR縦)、沈線	ナデ	黒褐色 黒褐色	砂・石	B	
139	26	2号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ②	胴部片	縄文(LR横)→沈線	ナデ(斜)	にぶい黄褐色 灰青褐色	砂・黒	C	
140	26	2号住居状遺構	埋土中	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	縄文(LR?横)→沈線	不明	淡青灰白	砂・石	A	
141	26	2号住居状遺構	埋土中	深鉢	Ⅲ③	胴部片	沈線、縄文(LR斜)	ナデ(横)	灰青褐色 灰青褐色	白	C	
142	27	3号住居状遺構	埋土中	鉢	Ⅲ④	胴部片	沈線	ナデ(横)	にぶい黄褐色 灰青褐色	白	C	
143	27	3号住居状遺構	埋土中	深鉢	Ⅲ	胴部片	沈線	ナデ(横)	灰白 灰白	砂・石	A	
144	27	3号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口：沈線、刷突	ナデ(横)	にぶい黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
145	27	3号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅳ	口縁部片	刷・押注 口：沈線	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	A	
146	27	3号住居状遺構	埋土上位	浅鉢	Ⅳ	口縁部片	唇：沈線 口：内面に沈線	沈線、ナデ(横)	黒褐色 黒褐色	白・石	C	
147	27	3号住居状遺構	埋土中	浅鉢	Ⅳ	口縁部片	唇：刷突、沈線 唇：隆帯、沈線	口：沈線、ナデ(横)	明青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
148	27	3号住居状遺構	埋土上位	浅鉢	Ⅳ	口縁部片	唇：刷み、刷：沈線	口：沈線、ナデ(横)	緑 にぶい黄褐色	白・石	B	
131	27	4号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ①	口縁部片	縄文(LR横)→沈線、刷突	沈線、ナデ(横)	淡青 にぶい黄褐色	砂・黒	C	
152	27	4号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ①	胴部片	沈線、刷突、縄文(LR横)	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
153	27	4号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	縄文押注(LR)	不明	灰青 浅黄褐色	砂・白	C	
154	27	4号住居状遺構	埋土上位	鉢	Ⅵ	口縁部片	刷文	ナデ(横)	暗灰青褐色	砂	C	
155	27	4号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅲ①	胴部片	縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	淡青褐色 浅黄褐色	砂・石	C	
156	27	4号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	縄文(LR斜)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・白	D	
157	27	4号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	胴部片	刷状縄文(LR・LR縦)	ナデ	暗灰青褐色	砂・黒	B	
158	27	4号住居状遺構	埋土上位	深鉢	Ⅵ	胴部片	胴下：刷状縄文(LR・LR縦) 胴下：縄文(LR斜)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
159	27	4号住居状遺構	埋土上位	ミニチュア	-	底部片	底：網代灰	ナデ(横)	明褐色	砂・石	B	
164	27	2号土坑	埋土上位	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口→刷上(L/4)	ナデ(横)	灰褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
163	27	2号土坑	埋土上位	深鉢	Ⅱ	口縁部片	口：連続状隆帯、円形刷突 底：木目状隆帯(L?)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 浅黄褐色	砂・石	C 217と同一	
166	27	2号土坑	埋土上位	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口：爪形文、沈線	ナデ(横)	にぶい黄褐色 黒褐色	砂・石	C	

国庫 番号	発行 回数	出土位置	出土 層位	器種	分類	残存 部位	外面文様	内面文様 ・調整	外面色調 内面色調	胎土	焼成	備考
167	27	2号土坑	想上 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：縄文(LR斜)→沈線	ナデ(横)	灰青褐 灰青褐	砂・雲	C	
168	27	2号土坑	想上 位	深鉢	Ⅵ	胴下 底	刷：水目状縄文(?) 底：縄代底	ナデ	にぶい 黄緑	砂・石	C	28と同。
169	27	2号土坑	想上 位	深鉢	-	胴下 底(1/3)	底：縄代底	ナデ(横)	灰門 浅黄緑	砂・石	C	
170	27	3号土坑	想上 位	ミニ チュア	Ⅲ⑤	胴下 底	刷下：縄文(LR斜)、沈線	ナデ	灰白 灰青褐	砂・石	C	
171	27	4号土坑	想中 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：沈線→縄文(LR?斜)	ナデ(横)	淡黄 淡黄	砂・石	C	308と同一
172	27	4号土坑	想下 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	沈線	不明	にぶい 黄緑 にぶい 黄緑	砂・石	C	
173	27	4号土坑	想中 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：沈線→縄文(LR?斜)	ナデ(横)	淡黄 淡黄	砂・石	C	306と同一
174	27	4号土坑	想中 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰青褐 灰青褐	砂・石	A	
175	27	4号土坑	想下 位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	縄文(LR横)	不明	にぶい 黄緑	砂・石	A	
176	27	5号土坑	想下 位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口：縄文(LR横) 頸：縄 文 刷：縄文(LR斜、斜)	ナデ(横)	にぶい 黄緑 無	砂・雲	C	
177	27	5号土坑	想下 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：縄文(LR斜、縄 文(LR横))	ナデ(横)	灰青褐 灰青褐	砂・石	C	
178	27	5号土坑	想上 位	深鉢	Ⅲ⑤	口縁部 片	口：沈線、野突 刷：沈 線、野突	不明	灰青褐 無	砂・石	C	
179	27	5号土坑	想上 位	深鉢	Ⅲ⑤	口縁部 片	口：縄文(LR横)、沈線	ナデ(横)	灰青褐 灰青褐	砂	C	
180	28	5号土坑	想中 位	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：刷入、沈線	不明	無 灰青褐	砂・石	C	
181	28	5号土坑	想下 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：縄文(LR斜)、沈線	ナデ(横)	灰青褐 灰青褐	砂・石	B	
182	28	5号土坑	想上 位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口～胴：縄文(LR斜)	ナデ(横)	灰青褐 無	砂・石	C	穿孔有り(貫通1個、 内面からのみ1個)
183	28	5号土坑	想上 位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口：縄文(LR横)、沈線	ナデ(横)	灰 出筋	砂・雲	C	
184	28	5号土坑	想下 位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口～胴：縄文(LR横)	沈線、ナ デ(横)	にぶい 黄緑 にぶい 黄緑	砂・石	A	
185	28	5号土坑	想下 位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口：縄文(LR横)	ケズリ ナデ	灰青褐 灰青褐	砂・雲	A	補修孔1個
186	28	5号土坑	想上 位	深鉢	Ⅵ	底部片	底：縄代底	ケズリ ナデ	灰青褐 にぶい 黄緑	砂・石	C	
187	28	5号土坑	想中 位	台 子	Ⅳ	台座 (2/3)	台：縄文	ケズリ、 ナデ	にぶい 黄緑 にぶい 黄緑	砂・石	B	内面に炭化物
188	28	5号土坑	想下 位	深鉢	Ⅲ	胴下 底部	刷下：縄文(LR横) 底： 縄代底	ナデ	にぶい 黄緑 にぶい 黄緑	砂	B	
189	28	6号土坑	想中 位	深鉢	Ⅲ⑤	口縁部 片	縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰青褐 黄	砂・雲	B	
190	28	6号土坑	想下 位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	刷：縄文押入(LR)、縄文 (LR横、斜)	ナデ	にぶい 黄緑 淡黄緑	砂・石	A	
191	28	6号土坑	想中 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	沈線、縄文(LR斜)	ナデ	灰 にぶい 黄緑	砂・石	C	
192	22	6号土坑	想上 位	深鉢	Ⅲ	突部片	突起：沈線、穿孔	-	にぶい 黄	砂・石	C	
193	28	7号土坑	想上 位	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	口～胴：縄文(LR斜)→沈 線	ナデ(横)	灰 灰青褐	白・雲	C	
194	28	7号土坑	想上 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：沈線→縄文(LR斜)	ナデ(斜)	にぶい 黄緑 にぶい 黄緑	砂・雲	A	
195	28	7号土坑	想上 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：沈線→縄文(LR横、 斜)	ナデ(横)	無 黒紫	砂・雲	C	
196	28	7号土坑	想上 位	深鉢	Ⅳ	口縁部 片	唇：野突 口：沈線	沈線、ナ デ(横)	黒紫 にぶい 黄緑	砂・石	A	
197	28	7号土坑	想下 位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	縄文(LR横)	不明	にぶい 黄緑 にぶい 黄緑	砂・ 石・雲	A	
198	28	7号土坑	想上 位	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口～胴：縄文(LR横)	ナデ(斜)	灰 にぶい 黄緑	砂・石	C	
199	28	7号土坑	想上 位	深鉢	-	底部片	縄代底(底)	不明	にぶい 黄緑 にぶい 黄緑	砂・石	C	
200	28	8号土坑	想中 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：縄文(LR斜)→沈線	ナデ(横)	灰 黄	砂・石	C	
201	28	8号土坑	想下 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：縄文(LR斜)→沈線	ナデ(横)	灰青褐 灰青褐	砂・石	C	
202	28	8号土坑	想上 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰 黄	砂・石	B	
203	28	8号土坑	想中 位	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	刷：縄文(LR斜)、沈線	ナデ(横)	にぶい 黄緑 無	砂・ 石・雲	A	

図版番号	写真図版	出土位置	出土層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	胎土	造 成	備考
204	28	8号土坑	堀下 下位	ミニ チュア	-	底部片	割下:無文	ナデ	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・石	A	
205	28	8号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	刷:縄文(LR横)→縄文 柱(LR)	ナデ(横)	淡黄 灰白	砂・石	B	
206	28	8号土坑	堀上 中	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	刷:縄文(LR) 口:沈 線、樹文(LR横)	ナデ(横)	淡黄緑 灰白	砂・雲	B	
207	28	8号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	口:沈線、円形刺突	ナデ(横)	黄 灰黄緑	砂・石	A	
208	28	8号土坑	堀上 中	深鉢	Ⅲ②	胴部片	刷:縄文(LR横)→沈線	ナデ	黒濁による 黄緑	砂・雲	C	
209	28	8号土坑	堀上 中	深鉢	Ⅲ③	胴部片	刷:縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	にぶい黄緑 黄緑	砂・石	C	
210	28	8号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	口:縄文(LR横、斜)	ナデ(横)	にぶい黄 淡黄	砂・石	C	
211	29	8号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	刷:押印 口:無文 刷:縄文(LR横)	ナデ(横) ケズリ ナデ(横)	灰黄緑 灰黄緑	砂・石	D	
212	28	8号土坑	堀上 下位	ミニ チュア	-	口→台	口→台:無文	ナデ(横)	灰白 灰白	砂・石	A	
213	29	8号土坑	堀上 中	深鉢	-	底部片	底:朝代瓦	ナデ	灰黄 灰黄	砂・石	C	
214	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅲ①	略突形	唇:突起 口→胴上:縄 文(LR横)→沈線、刺突 刷:縄文(LR横)	ナデ(横)	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・石	C	内外面に炭化物
215	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	口→胴上(LR横、斜)	ナデ(横)	にぶい黄緑 淡黄	砂・石	B	
216	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅲ③	口縁部 片	口:沈線	ナデ(横)	灰濁 にぶい黄緑	砂・石	C	
217	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	-	胴下 底(1/3)	割下:無文 底:朝代瓦	ナデ(横)	灰黄緑 灰黄緑	砂・石	C	
218	29	9号土坑	堀上 中	深鉢	Ⅲ①	胴→底 (2/3)	刷:縄文(LR横) 刷:縄 文(LR横)→沈線	胴→胴 にぶいナデ	暗黄緑 にぶい黄緑	砂・石	C	
219	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	口:縄文(LR横)	ナデ(横)	にぶい黄 にぶい黄緑	砂・石	C	
220	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅲ②	口縁部 片	口:縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・石	C	
221	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅲ③	口縁部 片	唇:縄文(LR)、口:縄文 (LR横)→沈線	ナデ(横)	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・雲	A	
222	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	刷:縄文(LR)、縄文 文?(LR横)	ナデ(横)	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・石	C	
223	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	口→胴:縄文(LR横)	ナデ(横)	灰黄濁 淡黄	砂・石	C	
224	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	口→胴:縄文(LR横、腹)	ナデ(横)	灰黄濁 にぶい黄緑	砂・石	C	
225	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	口:縄文(LR横)	ナデ(横)	淡黄濁 淡黄濁	砂・石	C	
226	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	口:縄文?(LR横)	ナデ(横)	にぶい黄緑 灰黄濁	砂・石	C	
227	29	9号土坑	堀上 下位	深鉢	-	底部片	底:朝代瓦	ナデ	にぶい黄緑 黄緑	砂・石	C	
228	29	10号土坑	堀上 中	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	唇:大形突起 刷:押 印、沈線、斜文	ナデ(横)	にぶい黄緑 にぶい黄緑	白・石	C	
229	30	10号土坑	堀上 中	深鉢	Ⅴ	胴部片	刷:沈線、縄文(LR横)	不明	黄 黄緑	砂・石	B	
230	30	10号土坑	堀上 下位	深鉢	-	胴部片	刷:縄文(LR横)	ナデ(横)	灰黄濁 黒濁	砂・石	C	
231	30	10号土坑	堀上 下位	深鉢	-	胴部片	刷:縄文(LR横)	ナデ(横)	黒濁 濁灰	砂・石	B	
232	30	11号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	縄文(LR横)	不明	砂 にぶい黄緑	砂・雲	C	
233	30	11号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅲ	胴部片	刷:LR(横)	不明	淡黄 灰黄	砂・雲	C	
234	30	11号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅲ	胴部片	刷:沈線	ケズリ (横)、ナデ	明赤濁 濁灰	砂・雲	C	
235	30	11号土坑	堀上 下位	白付鉢	Ⅲ	白部片	台:沈線	不明	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・石	A	
236	30	12号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅲ②	口縁部 片	口:縄文(LR斜)→沈線	ナデ (横、斜)	黄 濁灰	白・石	A	
237	30	13号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	口:沈線、円形刺突	沈線、ナ デ(横)	黄 にぶい黄緑	砂・石	C	
238	30	12号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	口縁部 片	口:縄文(LR横)	ナデ(横)	にぶい黄緑 淡黄濁	砂・雲	C	
239	30	12号土坑	堀上 下位	深鉢	Ⅴ	胴部片	刷:縄文(LR横)、沈線	ナデ(横)	灰黄濁 淡黄濁	砂・石・雲	C	

図版 番号	写真 図版	出土位置	出土 層位	器種	分類	残存 部位	外面文様	内面文様・ 調整	外面色調 内面色調	胎土	焼成	備考
210	30	12号土坑	埋土 上層	深鉢		胴下～ 底部	胴下：無文 底：胡代瓦	ナデ(横)	黄灰質 浅黄褐色	砂・石	C	
241	30	13号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅲ②	口縁部 片	口：縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	にぶい赤褐色 刷毛肌	砂・石・雲	C	
212	30	13号土坑	風土 中層	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	唇～口：赤帯、沈線 口：沈線、刺突	不明	灰青褐色 黒褐色	砂・石	C	
243	30	13号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：沈線→縄文(LR斜、 縦)	ナデ(斜)	黒褐色	砂・石	C	
244	30	14号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	唇：縄文(L) 口：縄文 (L横、縦)	不明	にぶい黒 灰白	砂・石	B	
245	30	15号土坑	埋土 上層	深鉢	Ⅲ①	口縁部 片	口：縄文(RL横)、沈線、 刺突	ナデ(横)	灰褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
246	30	15号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅲ①	口縁部 片	口：縄文(RL横)→沈線、 刺突	沈線、ナ デ(横)	灰白 黄灰	砂・石	C	
247	30	15号土坑	埋土 下層	深鉢	Ⅲ①	口縁部 片	口：縄文(LR?)→沈線	不明	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	A	
248	30	15号土坑	埋土 上層	深鉢	Ⅲ②	口縁部 片	口：縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
249	30	15号土坑	埋土 下層	深鉢	Ⅲ③	口縁部 片	口：縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰青褐色 灰白	砂・石	B	
250	30	15号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅲ③	口縁部 片	口：縄文(LR?)→沈線	縄文(LR?) 筋→沈線	灰白 灰白	砂	A	
251	30	15号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅲ③	口縁部 片	口：縄文(RL横)→沈線、 刺突	ナデ(横)	黒 にぶい黄褐色	砂・石	B	
252	30	15号土坑	埋土 上層	深鉢	Ⅲ②	口縁部 片	口：縄文(RL横)→沈線	不明	にぶい黒 にぶい黒	砂・石	B	
253	30	15号土坑	埋土 上層	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：縄文(RL横)→沈線	ナデ(横)	黄灰 黄灰	砂・石	C	
254	30	15号土坑	埋土 上層	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：縄文(LR斜)→沈線	ナデ	黄灰 灰青 灰青	石・雲	A	
255	30	15号土坑	埋土 上層	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：沈線	ナデ(横)	灰青 灰青褐色	砂・石	C	
256	30	15号土坑	埋土 下層	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：縄文(RL横)→沈線	ケズリ (斜)	にぶい黄褐色 にぶい黒	砂・石	C	
257	30	15号土坑	埋土 下層	深鉢	Ⅲ	胴部片	胴：縄文(RL横)、沈線	不明	灰青褐色 黄	砂・石	C	
258	30	15号土坑	埋土 下層	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：沈線	ナデ(横)	にぶい黒 灰褐色	砂・雲	A	
259	30	15号土坑	埋土 下層	深鉢	Ⅲ⑤	口縁部 片	胴：縄文(LR斜)→沈線	ナデ(横)	灰青褐色 黄	砂・石・雲	A	
260	30	15号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	胴：沈線、刺突	ナデ	黄褐色 黄褐色	砂・石	A	
261	30	15号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅲ⑤	口縁部 片	口：沈線、刺突	沈線、ナ デ(横)	にぶい黄 灰褐色	砂・雲	A	
262	30	15号土坑	埋土 下層	深鉢	Ⅲ③	口縁部 片	口：沈線	口：ナデ	黄褐色 灰白	砂・石	A	
263	30	15号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅲ⑤	胴部片	胴：沈線	ナデ(横)	灰青褐色 灰青褐色	砂・石	C	内面に炭化物
264	30	15号土坑	埋土 下層	深鉢	Ⅲ③	胴部片	胴：沈線、縄文(LR斜)	ナデ(横)	灰青褐色 灰青褐色	砂・石	C	
265	31	15号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅵ	口～胴 下(L/4)	口～胴下：縄文(LR横、 縦)	ケズリ→ ナデ(縦、 斜)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	外面に炭化物
266	31	15号土坑	埋土 上層	付鉢	Ⅵ	口～台 (2/3)	口～胴：無文(横線圧痕 あり)	ナデ(横、 斜)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	B	
267	31	15号土坑	埋土 上層	深鉢	Ⅵ	胴下～ 底(L/2)	胴下：無文 底：胡代瓦	ナデ(横)	黄灰 黄灰	砂・石	A	底部に穿孔孔
268	31	15号土坑	埋土 上層	付鉢	Ⅵ	台	台：無文	ケズリ→ ナデ(縦、 斜)	にぶい黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
269	31	15号土坑	埋土 上層	深鉢	Ⅵ	胴下～ 底	胴下：無文 底：胡代瓦	ケズリ→ ナデ(縦、 斜)	にぶい黄褐色 灰青褐色	砂	C	
270	31	15号土坑	埋土 上層	盃	Ⅵ	胴下～ 底	胴下～底：縄文(RL横、 斜)	ケズリ	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	A	
271	31	15号土坑	埋土 上層	深鉢	Ⅵ	胴(1/4)	口：縄文押圧(RL) 別： 縄文(縦、斜)	ナデ(横、 縦)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	A	
272	31	15号土坑	埋土 中層	深鉢	-	口縁部 片	口～唇：縄文(RL)、縄文 押圧(RL)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	A	
273	31	15号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅵ	口縁部 片	口：LR横	ナデ(横)	にぶい黄褐色 灰青褐色	砂・石	B	
274	31	15号土坑	埋土 中層	深鉢	Ⅳ	底部片	底：胡代瓦	ナデ	灰青褐色 灰青褐色	砂・石	C	
275	31	15号土坑	埋土 上層	深鉢	-	底部片	底：胡代瓦	ナデ	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	

図版 番号	写真 図版	出土位置	出土 層位	器種	分類	残存 部位	外面文様	内面文様・ 調整	外面色調 内面色調	胎土	焼成	備考
276	31	15号土坑	硬土上 位	深鉢	-	底部片	底: 網代痕		灰白 黄褐色	砂・石	A	
277	31	15号土坑	硬土上 位	深鉢	-	底部片	底: 網代痕	ケズリ→ ナデ	灰白 にぶい黄褐色	砂・石	A	
278	31	16号土坑	硬土中 位	深鉢	Ⅲ	胴部片	胴: 沈線	ナデ(横)	黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
279	31	16号土坑	硬土中 位	深鉢	Ⅲ	胴部片	胴: 縄文(LR横)→沈線	不明	にぶい黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
280	31	16号土坑	硬土上 位	深鉢	Ⅵ	口縁部片	口: 縄文(LR横)	ナデ(横)	灰 にぶい黄褐色	砂・石・雲	C	
281	24	18号土坑	硬土下 位	鉢	Ⅲ	胴(1/2)	胴: 凸形貼付	指環による 成形	にぶい黄褐色	砂・雲	C	
282	31	18号土坑	硬土下 位	深鉢	Ⅲ	口縁部片	唇: 交結, 沈線	ナデ(横)	灰青褐色 灰黄褐色	砂・石・雲	A	
283	31	19号土坑	硬土下 位	深鉢	V	口縁部片	口: 無文 胴: 縄文(LR横)	ナデ(横)	灰褐色 にぶい黄褐色	砂・石	B	外面に黒化物
284	31	19号土坑	硬土下 位	鉢	V	口縁部片	唇: 沈線 LI: 沈線	沈線, ナ デ(横)	灰白 黄褐色	白・雲	A	
285	31	19号土坑	硬土下 位	鉢	V	口縁部片	口: 沈線	沈線, ナ デ(横)	にぶい黄褐色 黄褐色	砂・赤	B	
301	31	3号溝	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	口: 縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰青褐色 灰黄褐色	砂・雲	A	
302	31	ⅡA8g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	縄文(LR横)→沈線, 刺突	ナデ(横)	灰青褐色 灰黄褐色	砂・石	C	
303	31	3号溝	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	口: 縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰青褐色 黄褐色	砂・雲	C	
304	31	ⅡA17g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	縄文(LR), 沈線, 凸形刺突	ナデ(横)	黄褐色 灰白	砂・白	C	
305	31	ⅡA14c	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	口: 縄文?(LR斜)→沈線	不明	にぶい黄褐色 黄褐色	砂・石・雲	A	
306	31	ⅡA15g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	唇: 沈線 口: 沈線	沈線, ナ デ(横)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
307	31	ⅡA8g	Ⅱ層	鉢	Ⅲ④	胴部片	縄文(RL横)→沈線	ナデ(横)	黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
308	32	3号溝	硬土中 位	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰白 灰白	砂・石	A	
309	32	ⅡA15g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口: 沈線	不明	にぶい黄褐色 灰白	砂・白	C	
310	32	ⅡA10h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	沈線, 刺突, 縄文(RL横)	ナデ(横)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
311	32	ⅡA10g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口: 縄文(LR横), 沈線	ナデ(横)	灰青褐色 灰白	砂・石	C	
312	32	ⅡA16f	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴: 縄文(RL横)→沈線	ナデ(横)	黄褐色 灰青褐色	砂・石・雲	A	
313	32	ⅡA12f	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口: 縄文(RL横), 沈線	ナデ(横)	黄褐色 灰青褐色	砂・石	A	
314	32	ⅡA16f	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口: 沈線	ナデ(横)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	B	
315	32	ⅡA8g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	縄文(LR横)→沈線	ナデ	黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
316	32	ⅡA11g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴: 沈線→縄文(RL斜)	ナデ(横)	黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
317	32	ⅡA12g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴: 縄文(RL?)横)→沈線	不明	にぶい黄褐色 黄褐色	砂・石	A	
318	32	ⅡA13g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴: 縄文(RL横)→沈線	ナデ(横)	黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
319	32	ⅡA11h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴: 縄文(LR斜), 沈線	不明	黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
320	32	ⅡA11f	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴: 沈線, 縄文(LR?)横)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	C	
321	32	ⅡA11h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口~胴: 集合沈線	ナデ(横)	にぶい黄褐色 黄褐色	砂・石	B	
322	32	ⅡA13g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口: 縄文(LR?)横)→沈線	ナデ(横)	にぶい黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
323	32	ⅡA10h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口: 縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	灰 にぶい黄褐色	砂・雲	A	
324	32	3号溝	硬土下 位	深鉢	ⅢⅠ	口縁部片	口: 刺突, 縄文(LR横)→沈線	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
325	32	ⅡA11f	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口: 縄文(RL横)→沈線	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
326	32	ⅡA11h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	LI: 縄文(RL斜)→沈線	ナデ	黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	

図版番号	写真版数	出土状況	出土部位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調査	外面色調・内面色調・内面文様	胎土	焼成	備考
327	32	II A14f	II層	深鉢	Ⅲ②	胴部片	胴：縄文(RL波)→沈線	ナテ(斜)	灰青緑 灰黄緑	砂・石	B	
328	32	II A11f	II層	深鉢	Ⅲ②	口縁部片	口：縄文(RL波)→沈線	ナテ(横)	灰青緑 灰黄緑	砂・石	C	
329	32	3号溝	埋土下位	深鉢	Ⅲ②	口縁部片	口一筋：縄文(RL波)→沈線	ナテ(横)	灰青緑 灰黄緑	砂・石	C	
330	32	II A9f	II層	鉢	Ⅲ②	口縁部片	口：沈線	ナテ(横)	黒褐色 灰黄緑	砂・石	C	
331	32	II A12n	II層	鉢	Ⅲ②	口縁部片	口：隆帯、沈線	ナテ(横)	灰黄緑 黒褐色	砂・石	C	
332	32	II A12g	II層	深鉢	Ⅲ②	口(1/4)	口：縄文？(LR斜)→沈線	ナテ(横)	灰青緑 にぶい黄褐色	砂・石	B	
333	32	II A12n	II層	深鉢	Ⅲ②	胴部片	胴：縄文(LR斜)→沈線	ナテ(横)	黒褐色 灰青緑	砂・石	C	
334	32	II A11g	II層	深鉢	Ⅲ②	残部片	胴：縄文(LR斜)→沈線	ナテ(横)	にぶい黄褐色 灰青緑	砂・石	C	
335	32	II A10b	II層	深鉢	Ⅲ②	胴部片	胴：縄文(LR斜)→沈線	ナテ(横)	灰青緑 灰黄緑	白・雲	A	
336	32	II A12g	II層	深鉢	Ⅲ②	底下～底	胴下：沈線、刺突	ナテ(縦)	黄褐色 灰青緑	砂・石	C	内面にアスファルト？
337	32	II A9b	II層	深鉢	Ⅲ③	口縁部片	口一筋：縄文(LR斜)→沈線、突突	ナテ(横)	灰青緑 黒褐色	砂・石	C	
338	32	II A12b	II層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口：沈線、刺突	ナテ	灰青緑 にぶい黄褐色	砂・白	C	
339	32	II A3g	II層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口一筋：沈線、刺突、縄文？(LR斜)	ナテ(横)	黒褐色 灰青緑	砂・白・雲	C	
340	32	II A13g	II層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴：沈線、刺突、縄文(LR斜)	ナテ(横)	黄褐色 灰青緑	砂・雲	A	
341	32	II A11b	II層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口：縄文(LR横)→沈線、刺突	ナテ(横)	黒褐色 灰青緑	砂・石	B	
342	32	II A8g	II層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	余灰、刺突、沈線	ナテ(横)	灰青緑 灰黄緑	砂・白	C	
343	32	II A8g	II層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口一筋：縄文(LR斜)→沈線	ナテ(縦)	黒褐色 灰青緑	砂・石	C	
344	32	2号溝	埋土中	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	唇：刻み 口：沈線	ナテ(横)	灰青緑 黒褐色	砂・雲	A	
345	33	3号溝	埋土上位	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口：縄文(RL波)→刺突、沈線	ナテ(横)	灰青緑 灰黄緑	砂・雲	C	
347	33	II A5h	II層	深鉢	Ⅲ②	胴部片	胴：沈線	ナテ(横)	灰青緑 灰黄緑	砂・石	C	
348	33	3号溝	埋土下位	台付鉢	Ⅲ④	胴(1/2)	胴：縄文(LR横)→L形文、沈線	ナテ	灰青 灰白	砂・石	C	
349	33	II A11h	II層	深鉢	Ⅲ④	口縁部片	口：沈線、刺突	ナテ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・雲	C	
350	33	II A9h	II層	深鉢	Ⅲ⑤	口縁部片	沈線、円形刺突	ナテ(横)	明赤褐色 灰青緑	砂・石	C	
351	33	II A11g	II層	深鉢	Ⅲ⑤	口縁部片	唇：突起、口：沈線、刺突	ナテ(横)	明赤褐色 明赤褐色	砂・石	C	
352	33	II A11f	II層	深鉢	Ⅲ⑤	口縁部片	口：刺突、帯：沈線	ナテ(横)	浅黄緑 灰青緑	砂・石	B	
353	33	II A3	II層	深鉢	Ⅲ⑤	口縁部片	口：刺突	不明	灰青緑 灰黄緑	砂・雲	A	
354	33	II A13g	II層	深鉢	Ⅲ⑤	口縁部片	口：刺突	ナテ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石・雲	B	
355	33	II A8g	II層	深鉢	Ⅲ⑥	口縁部片	口：刺突	ナテ(横)	黒褐色 灰青緑	砂・石	C	
356	33	II A12h	II層	深鉢	Ⅲ⑥	胴部片	胴：沈線、刺突	ナテ(横)	黒褐色 浅黄緑	白・石	A	
357	33	2号溝	埋土下位	深鉢	Ⅲ	突部片	沈線	-	浅黄緑	砂・石	C	
358	33	II A12g	II層	深鉢	Ⅲ⑥	口縁部片	口：刻み、沈線 胴部：沈線、浅黄緑文(RL)、刻み	ミガキ	灰青緑 灰黄緑	砂・雲	C	
359	33	4号溝	埋土上位	深鉢	Ⅲ⑥	口縁部片	口：押圧、沈線	ナテ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	白・石	B	
360	33	II A13g	II層	鉢	Ⅲ⑥	胴部片	胴：沈線、刻み、縄文(LR斜)	ナテ(横)	黒褐色 灰青緑	砂・石	C	
361	33	3号溝	埋土下位	深鉢	Ⅲ⑥	口縁部片	唇：突起、口：沈線、縄文(LR斜、斜)	ナテ(横)	灰青緑 灰黄緑	砂・石	C	
362	33	II A11h	II層	深鉢	Ⅲ⑥	胴部片	胴：縄文(LR斜、横)、沈線	ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・雲	C	
363	33	II A9h	II層	深鉢	Ⅲ⑥	胴部片	胴：縄文(LR斜)→沈線	ナテ(横)	灰青緑 灰黄緑	白・石	A	

図版 番号	学名 図版	出土位置	出土 部位	器種	分類	残存 部位	外向文様	内面文様 調整	外面色調 内面色調	胎土	装 成	備考
361	33	II A14f	埴土 下位	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	口：沈線	ナデ(横)	灰黄褐色	砂	A	
365	33	II A11f	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	口：縄文(LR斜)、沈線 胴部：縄文(LR斜)、沈線	ミガキ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・雲	C	
366	33	II A9r	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	口：縄文(LR斜)、沈線	ナデ(横)	灰黄褐色	砂・石	B	
367	33	II A13g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴：縄文(LR斜)、沈線	不明	灰黄褐色 淡黄	砂・石	B	
368	33	II A12h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	口：沈線、刺突、胴部： 縄文(RL横)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 濁灰	砂・石	A	
369	33	II A8g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ①	口縁部 片	口：突刺、沈線、口一 環：沈線	ナデ(横)	にぶい黄褐色 浅黄褐色	砂・石	C	
370	33	II A9h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	沈線、縄文(RL斜)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
371	33	II A12g	Ⅱ層	鉢	Ⅲ	胴下～ 底	胴下～底：沈線、縄文 (RL横、斜)	ナデ	濁灰 黄褐色	砂・雲	C	
372	33	3号溝	埴土 下位	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：沈線、口：隆部、刺 突	ナデ(横)	灰白 灰白	白・石	C	
373	33	II A3i	Ⅱ層	鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：沈線、胴：隆部上刺 突、沈線	ナデ(横)	黄 黄褐色	砂・石	C	
374	33	II A6i	Ⅱ層	鉢	Ⅲ	胴部片	胴：隆部上刺突	不明	灰黄 淡黄	砂・石	C	
375	33	II A11h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：沈線、交互刺突	ナデ(横)	黄 にぶい黄褐色	砂・石	A	
376	33	3号溝	埴土 下位	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：沈線、口：沈線	ナデ(横)	灰黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	B	内外面に炭化物
377	33	3号溝	埴土 中	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：突刺	不明	灰黄褐色 にぶい黄褐色	砂・雲	A	
378	33	II A14c	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：刺突、口：沈線	ナデ(横)	灰黄 黄褐色	砂・石	A	
379	33	3号溝	埴土 下位	浅鉢	Ⅲ	胴部片	無文(剥落?)	沈線	濁灰 灰黄褐色	砂・雲	A	内面に炭化物
380	31	II A11h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	口縁部 片	口：無文、胴：沈線	ナデ(横)	浅黄 黄褐色	砂・石	C	
381	34	4号溝	埴土 下位	浅鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：隆部	不明	生 灰白	砂・石	A	
382	34	II A3i	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	胴部片	胴：沈線、垂線	ナデ(横)	灰黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
383	34	II A6i	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ④	胴部片	胴：沈線→縄文(RL斜)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 濁灰	砂・石	C	
384	34	II A15f	Ⅱ層	鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：突刺、沈線、口：沈 線	ナデ(横)	灰白 灰白	白・石	A	
385	34	II A4i	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	胴部片	胴：縄文(R横)、沈線	ナデ(横)	にぶい黄褐色 灰黄褐色	砂・石	C	
386	34	II A4i	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	胴部片	胴：縄文(LR?縦)→沈線	ナデ	灰黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
387	34	II A12h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	胴部片	胴：沈線	ナデ(横)	灰黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
388	34	II A11b	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：突刺、口：沈線 胴：縄文(RL横)	沈線、ナ デ	黄 にぶい黄褐色	砂・石	A	穴孔1個有り
389	31	II A13g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：沈線	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
390	34	II A11h	Ⅱ層	鉢	Ⅲ	口～胴 部	口：縄文(RL斜、斜)、沈 線、胴部：無文	ナデ(横)	濁灰 灰黄褐色	白・石	B	
391	34	II A9h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：縄文押圧(LR)、縄 文?	ナデ(横)	にぶい黄褐色 淡黄	砂・石	C	
392	34	II A9i	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：縄文(LR横)→縄文押 圧(LR) 胴部：縄文(LR 斜)→縄文押圧(LR)	ナデ(横)	浅黄褐色 濁灰	砂・石	A	
393	31	3号溝	埴土 下位	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：縄文(LR横)→縄文押 圧(LR)	ナデ(横)	灰白 にぶい黄褐色	砂・石	A	
394	34	II A10h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：縄文(LR斜) 胴：縄 文押圧(LR)、縄文(LR横)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 黄	砂・石	C	
395	34	II A14g	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：縄文(LR横)、縄文押 圧(LR)	ナデ(横)	黄褐色 にぶい黄褐色	砂・雲	C	
396	34	II A9h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	縄文(R横、縦)、縄文押 圧(LR)	ナデ(横)	灰黄褐色 灰黄褐色	砂・石	B	外面に炭化物
397	34	II A3i	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：縄文押圧(LR) 胴： 縄文(LR縦)	ナデ(横)	濁灰 にぶい黄褐色	砂・石	C	
398	34	II A11h	Ⅱ層	浅鉢	Ⅲ	口縁部 片	口：縄文(RL横)→沈線	ナデ(横)	灰黄褐色 灰黄褐色	砂・石	C	
399	34	II A9h	Ⅱ層	深鉢	Ⅲ	口縁部 片	沈線、縄文(LR横)	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・雲	C	

実収番号	写真版	出土位置	出土層位	器種	分類	発存部位	外面文様	内面文様 内面調整	外面色調 内面色調	胎土	底成	備考
400	34	II A10h	II 胎	深鉢	III	口縁部片	口：沈線、縄文(LR横)	ナデ(横)	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・石	A	
401	34	II A11f	II 胎	深鉢	III	口縁部片	唇：沈線 口：縄文(LR横)、沈線	唇：沈線 口：ナ デ横	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・石	C	
402	34	II A11f	II 胎	深鉢	III	口縁部片	縄文(RL横)→比漉	ナデ(横)	灰青褐色 灰青褐色	砂・石	C	
403	34	II A11f	II 胎	深鉢	III	口縁部片	口：縄文(RL斜、横)、沈線	ナデ(横)	黄 浅黄	砂・黄	C	
404	34	II A11f	II 胎	深鉢	III	口縁部片	縄文(RL斜)→比漉	ナデ(横)	にぶい黄緑 灰青褐色	砂・石	C	
405	34	II A11f	II 胎	深鉢	III	口縁部片	口：縄文(LR斜)、沈線	ナデ(横)	明赤褐色 にぶい黄	砂・石	B	
406	34	II A11f	II 胎	深鉢	III	口縁部片	沈線	不明	浅黄褐色 浅黄褐色	砂	A	
407	34	II A11h	II 胎	深鉢	III	口縁部片	口：羽状縄文(非羽東RL横)、沈線	ナデ(横)	にぶい赤褐色	砂・石・黄	C	
408	34	II A12g	II 胎	甗	III	胴部片	口：縄文(RL横)、比漉 脚：縄文(RL斜)、沈線	不明	浅黄褐色 灰白	砂	A	
409	33	II A12h	II 胎	片口土器?	III	片口部片	片口：縄文(LR横、斜)	ナデ	浅黄褐色 灰白	砂・石	A	
410	34	II A14f	II 胎	注口土器	III	注口部	注口：沈線	ケズリ	灰青褐色	砂・石	C	
411	34	II A11f	II 胎	注口土器	III	注口部	注口：無文	不明	灰青褐色 浅黄褐色	砂・石	C	
412	34	II A12g	II 胎	注口土器	III	注口部	注口：沈線	ケズリ	黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
413	34	2号溝	埋土中	深鉢	-	口縁部片	唇：斜口 口：黒文	ナデ(横)	灰青褐色 灰青	砂・石	C	
414	35	II A11h	II 胎	深鉢	-	胴下1/2部	胴上：沈線	ナデ(横)	灰青褐色 灰青褐色	砂・石	B	
415	35	II A14g	II 胎	深鉢	IV	口縁部片	口：押花(口唇)、沈線	ナデ(横)	にぶい黄緑 灰青褐色	砂・石	C	
416	35	4号溝	埋土上位	深鉢	IV	口縁部片	唇：突起 口：沈線、斜突起 脚：縄文(LR横)→沈線	沈線、ミ ガキ	灰青褐色 灰青褐色	白	A	
417	35	3号溝	埋土中	浅鉢	IV	口縁部片	唇：突起、沈線 脚：突起 口：沈線	沈線、ナ デ(横)	灰青褐色 陶灰	白・石	C	
418	35	II A17g	II 胎	甗	IV	口縁上(2/3)	口：沈線、突起 脚：L 字文、筋目	口：沈線、 ミガキ	にぶい黄褐色 灰褐色	白	C	
419	35	II A11g	II 胎	甗	IV	口縁部片	唇：突起 口：沈線	沈線、ナ デ(横)	黄褐色 明赤褐色	砂・黄 A		
420	28	II A11g	II 胎	甗	IV	口縁部片	口：沈線 胴上：沈線	沈線、ナ デ(横)	にぶい赤褐色	砂・黄	C	
421	35	II A11h	II 胎	甗	IV	口縁部片	唇：突起 口：沈線 脚：縄文(LR斜、斜)	沈線、ナ デ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	外面に灰化物
422	35	4号溝	埋土上位	浅鉢	IV	胴部片	胴：B突起、上字文	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	白	C	
423	35	II A12g	II 胎	深鉢	V	胴部片	胴：沈線	ナデ(横)	陶灰 にぶい黄褐色	白・石	C	
424	35	II A11h	II 胎	深鉢	V	胴部片	胴：縄文(LR斜)	ナデ(斜)	にぶい黄褐色 黒褐色	砂・石	C	内面にアスファルト?
425	35	4号溝	埋土下位	浅鉢	V	口縁部片	口一胴上：沈線、変形L 字文(沈線)	沈線、ナ デ(横)	にぶい黄褐色 にぶい赤褐色	砂・黄	B	
426	35	II A12g	II 胎	浅鉢	V	口縁部片	口：沈線 胴：変形L字 文(沈線)	沈線、ナ デ(横)	にぶい赤褐色 灰褐色	砂・石	C	
427	35	4号溝	埋土下位	浅鉢	V	口縁部片	口一胴：沈線	沈線、ナ デ(横)	黒褐色 黒褐色	砂・石・黄	B	
428	35	II A12f	II 胎	鉢?	V	口縁部片	口：沈線	ナデ(横、 斜?)	にぶい黄褐色 灰青褐色	白・石	C	
429	35	II A16f	II 胎	深鉢	V	胴部片	沈線、交互刺突文	ナデ(斜)	黄褐色 にぶい黄褐色	砂・黄	C	
430	33	II A16f	II 胎	深鉢	V	口縁部片	口：突起、刺突 胴：交互 刺突 唇：沈線	ナデ(横)	灰白 黄褐色	砂・石	C	
431	35	II A12g	II 胎	深鉢	VI	口一胴上(1/4)	口一胴上：縄文(LR横、 斜)	口一胴上： ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	C	
432	35	II A11f	II 胎	深鉢	VI	口一胴上(1/4)	口一胴上：縄文(LR斜、 斜)	ナデ(横)	黒褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
433	35	II A6f	II 胎	深鉢	VI	口一胴部片	口一胴下：縄文(LR横)	ナデ(横、 斜?)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	B	
434	35	II A13g	II 胎	浅鉢	VI	口縁部片	口一胴：縄文(LR横)	ケズリ(斜) ナデ(横)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石・黄	C	
435	35	II A11g	II 胎	深鉢	VI	口縁部片	口一胴：縄文(LR横)	ナデ(横)	にぶい黄褐色	砂・石	C	

図版番号	写真図版	出土位置	出土層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色派・内面色派	胎土	焼成	備考
436	35	II A8g	II層	深鉢	VI	口縁部片	口：縄文(LR横) 母：縄文(LR) 口：縄文(LR横、斜)	ナデ(横)	灰青褐色 灰青褐色	砂・石	C	
437	35	II A14f	II層	深鉢	VI	口縁部片		ナデ(横)	厚褐色 灰青褐色	砂・石	A	
438	35	II A11f	II層	深鉢	VI	口縁部片	口～胴：縄文(LR斜)	ナデ(横)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	B	
439	36	3号溝	周土中	深鉢	VI	口縁部片	胴：RL横	ケズリ→ ナデ(横)	灰白 灰白	砂・石	C	
440	36	II A8g	II層	深鉢	VI	口縁部片	縄文(LR横)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 黒灰	砂・雲	A	
441	36	II A7h	II層	深鉢	VI	口縁部片	胴：縄文押付(RL)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 浅黄褐色	砂・石・雲	C	
442	36	II A11f	II層	深鉢	VI	口縁部片	口：縄文(R横)	ナデ(横)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石・雲	C	
443	36	II A7i	II層	深鉢	VI	口縁部片	胴：突起	不明	にぶい黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	補修孔1個あり
444	36	II A9h	II層	深鉢	VI	胴部片	口～胴：縄文(LR横)	不明	にぶい黄褐色 浅黄褐色	砂・石	A	
445	36	II A11f	II層	深鉢	VI	胴部片	胴：縄文(LR斜)	ナデ(横)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
446	36	II A10h	II層	深鉢	VI	胴部片	胴：縄文(L横、斜)	ナデ(斜)	黒 にぶい黄褐色	砂・雲	C	
447	36	4号溝	周土下位	深鉢	VI	胴部片	胴：沈線	ケズリ (斜)	灰白 浅黄褐色	石	B	内外面に炭化物
448	36	II A12g	II層	深鉢	VI	胴部片	胴：縄文(LR横)	不明	にぶい黄褐色 黒	砂・雲	C	内面に塗?
449	36	II A14f	II層	甕	-	胴下～底	胴下：縄文(RL斜)	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
450	36	II A16f	II層	浅鉢	-	底部片	胴下：縄文(LR斜)→沈線	北側にいる 3号ナデ	黒灰 にぶい黄褐色	砂・雲	C	
451	36	II A11g	II層	甕	-	台部(2/3)	台：縄文(LR斜)	北側にいる 3号ナデ	灰白 灰青	砂・石	A	
452	36	II A11h	II層	鉢	VI	口～底(1/3)	口～底：無文	ナデ(横)	灰青褐色 灰青褐色	砂・石	C	
453	36	II A11h	II層	甕	-	胴下～底	胴下～底：無文	ナデ(斜)	灰青褐色 黒	砂・石	A	
454	36	II A11h	II層	深鉢	-	胴下～底(1/3)	胴下：無文	ナデ(横)	灰青褐色 灰	砂・石	A	内面にアスファルト付着
455	36	II A11f	II層	ミニチュア	-	台部欠損	英文(指環による彫形俱あり)	ナデ(横)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
456	36	II A8g	II層	ミニチュア	-	口縁部欠損	口～底：無文	ナデ(斜)	浅黄褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
457	36	II A11g	II層	ミニチュア	-	口～底(1/4)	口～底：無文	ナデ(斜)	灰白 灰青	砂・雲	A	
458	36	II A11f	II層	深鉢	-	底部片	胴下：縄文(RL斜) 底：網代灰	ナデ	灰白 黄	砂・石	C	
459	36	II A11h	II層	深鉢	-	胴下～底(1/2)	胴下：縄文(LR横) 底：網代灰	ケズリ・ ナデ(横)	にぶい黄褐色 黒	砂・石・雲	C	
460	36	II A13g	II層	深鉢	-	胴下～底	胴下：縄文(LR横) 底：網代灰	ナデ(横、 斜)	にぶい黄褐色 灰褐色	砂・雲	C	
461	36	II A16c	II層	深鉢	-	胴下～底	胴下：無文 底：網代灰	ケズリ→ ナデ(斜)	灰青褐色 にぶい黄褐色	砂・石	C	
462	36	II A13g	II層	深鉢	-	底部片	底：網代灰	ケズリ	にぶい黄褐色 灰青褐色	砂・石	C	
463	37	II A9h	II層	深鉢	-	底部片	底：網代灰	不明	黄 灰青褐色	砂・雲	C	
464	37	5号溝	周土下位	甕	-	胴下～底(1/3)	胴下：無文 底：網代灰	ケズリ→ ナデ	浅黄褐色 灰白	砂・石	A	
465	37	II A9i	II層	深鉢	-	底部片	底：木葉灰	ナデ(横)	灰青褐色 黒	白・雲	C	
466	37	II A13g	II層	深鉢	-	底部片	底：木葉灰	ナデ	にぶい黄褐色 浅黄褐色	砂・石	C	

第5表 土製品観察表

図版番号	写真図版	出土位置	出土層位	器種	残存部位	外面文様	外彩色調	胎土	焼成	重量 (g)
467	37	ⅡA9a	Ⅱ層	土鍋	体(踵)部のみ	円形刺突	にぶい黄橙	砂・灰	C	146.82
468	37	Ⅱ5号土坑	Ⅱ層中	土鍋	体(踵)部のみ	無文	にぶい黄橙	砂・灰	A	41.30
469	37	5号土坑	Ⅱ層中	土鍋	胴部のみ	無文	にぶい黄橙	砂・灰	C	6.88
470	37	1号住居状遺構	Ⅱ層下位	土鍋	胴部のみ?	無文	灰白	砂・灰	A	1.23
471	37	3号溝(ⅡA12c)	Ⅱ層中	土鍋	胴部のみ	無文	浅黄橙	砂・灰	A	3.48
472	37	ⅡA9b	Ⅱ層	土鍋	胴部のみ	無文	黒灰	砂・灰	A	12.40
473	37	1号住居状遺構	Ⅱ層下位	土鍋	胴部のみ	沈線、網文	にぶい黄橙	砂・灰	C	26.75
474	37	ⅡA14g	Ⅱ層	土鍋	胴部のみ	無文	灰白	砂・灰	C	18.15
475	37	ⅡA5b	Ⅱ層	土鍋	胴部のみ	無文	にぶい橙	砂・灰	C	28.99
476	37	8号土坑	Ⅱ層下位	土鍋	足部のみ	無文	にぶい橙	砂・灰	A	61.65
477	37	ⅡA11h	Ⅱ層	土鍋	足部のみ	無文	灰白	砂	C	9.43
478	37	2号住居状遺構	Ⅱ層下位	土製耳飾り	完形	無文	黒灰	砂・灰	C	6.96
479	37	ⅡA9a	Ⅱ層	土製耳飾り	略半形	無	浅黄橙	砂・灰	C	8.73
480	37	ⅡA11h	Ⅱ層	土鉢	完形	沈線	灰白	砂	A	9.47
481	37	ⅡA14f	Ⅱ層	土鉢	完形	沈線	にぶい黄橙	砂・灰	A	19.61
482	37	3号住居状遺構	Ⅱ層上位	土鉢	完形	沈線	にぶい黄橙	砂・灰	A	13.15
483	37	7号土坑	Ⅱ層下位	土製品	赤銅部欠損	沈線・穿孔	黒	砂・白	A	5.86
484	37	2号住居状遺構	Ⅱ層下位	土製品	略定形?	刺突文	灰白	砂	A	6.08
485	37	1号住居状遺構	Ⅱ層中	土製品	台部?	無文	浅黄 浅黄	砂・灰	C	11.38
486	37	5号溝	Ⅱ層中	土製円板	完形	縄文	にぶい黄橙	砂・灰	C	23.52
487	37	ⅡA11f	Ⅱ層	土製円板	完形	縄文	にぶい黄橙	砂・灰	C	12.09
488	37	23号土坑	Ⅱ層上位	土製円板	完形	縄文	にぶい橙	砂・灰	C	8.45
489	37	3号土坑	Ⅱ層中	分銅形土製品	体部のみ	縄文	黒陶	砂・灰	C	43.88
490	37	ⅡA4i	Ⅱ層	粘土塊	-	-	橙	砂	A	12.21
491	37	ⅡA11g	Ⅱ層	粘土塊	-	-	にぶい橙	砂・灰	A	17.83
492	37	ⅡA4i	Ⅱ層	粘土塊	-	-	橙	砂	A	3.38
493	37	ⅡA14f	Ⅱ層	粘土塊	-	-	浅黄	白	C	2.40

第6表 石器観察表

図版番号	写真図版	複製	器種名	層位	分類	残存部位	石材	産地	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
7	38	打製石斧	1号住居	Ⅱ層上	-	刃部欠	ホルンフェルス	北上山地 古年代	(329.04)	(84.74)	91.69	23.51	
8	38	石核	1号住居	Ⅱ層上	-	-	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	71.21	45.70	32.78	32.60	
31	38	石鏃	2号住居	Ⅱ層上	8組	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	1.41	26.59	15.20	5.26	
32	38	石鏃	2号住居	Ⅱ層上	5組	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	1.24	25.07	16.10	3.50	
33	38	スクレイパー	2号住居	Ⅱ層下	1個	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	2.01	20.45	22.17	5.26	
34	38	スクレイパー	2号住居	Ⅱ層下	1個	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	4.47	29.43	23.70	7.43	

図版番号	写真回数	種別	遺物名	層位	分類	産出部位	石材	産地	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
33	38	磨製石斧	2号石斧	床面	1類	完形	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	413.19	82.25	71.90	48.86	
36	38	磨製石斧	2号石斧	室内	—	体部~ 刃部欠	鮫紋岩	北上山地 古生代オルドビス紀	(39.20)	55.04	(34.58)	15.56	早池峠付近、富守
37	38	磨製石斧	2号石斧	床下土塊	—	体部欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(18.52)	(24.01)	(36.41)	(16.76)	
38	38	磨製石斧	2号石斧	埋土上位	3類	未完成品	はんれい岩	北上山地 中生代白堊紀	200.69	86.13	48.86	27.51	
83	38	石剣	1号石剣状	埋土下位	1類	半記欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(1.12)	(24.48)	13.84	3.57	
84	38	石剣	1号石剣状	埋土下位	—	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	21.29	74.57	37.92	7.75	縦型・横径18.01cm
85	38	石剣	1号石剣状	埋土下位	2類	完形	赤色頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	13.28	37.66	29.71	11.74	
134	38	石剣	2号石剣状	埋土上位	1類	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	41.18	45.16	49.69	21.08	
149	38	石剣	3号石剣状	埋土上位	1類	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	0.77	22.83	12.56	4.56	
150	38	石剣	3号石剣状	埋土上位	—	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	8.56	54.32	31.75	9.48	縦型・横径7.66cm
151	38	石剣	4号石剣状	埋土下位	1類	基部割欠	地層頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(1.31)	29.71	(15.95)	3.61	
152	38	石剣	4号石剣状	埋土下位	1類	基部割欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(0.86)	19.09	(13.55)	4.12	
153	38	石剣	4号石剣状	埋土中	6類	先端部~ 基部欠	赤色頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	0.36	(17.88)	16.11	1.84	
154	38	石剣	4号石剣状	埋土上位	4類	基部欠	アイサイト	奥羽山脈 新生代新第三紀	(173.36)	101.62	78.76	55.86	
286	39	磨製石斧	2号土塊	埋土上位	1類	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	10.64	65.25	26.82	9.52	
287	39	磨製石斧	2号土塊	埋土下位	4類	完形	アイサイト	奥羽山脈 新生代新第三紀	480.96	136.54	69.74	33.40	
288	39	磨製石斧	5号土塊	埋土中	1類	完形	赤色頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	10.14	31.27	37.40	11.39	
289	39	石剣	8号土塊	埋土上位	1類	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	0.94	22.92	17.86	4.18	
290	39	石剣	8号土塊	埋土中	1類	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	3.41	22.05	20.63	7.49	
291	39	石剣	8号土塊	埋土上位	1類	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	12.63	56.87	37.16	8.64	
292	39	石剣	8号土塊	埋土中	3a類	—	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	1.82	23.75	22.21	5.46	
293	39	石剣	SK25	埋土下位	3c類	—	黒曜石	不明	0.22	10.68	11.89	3.09	
294	39	磨製石斧	11号土塊	埋土中	—	体部~ 刃部欠	鮫紋岩	北上山地 古生代オルドビス紀	(93.56)	(103.25)	43.80	(17.02)	早池峠付近、富守
295	39	石皿	11号土塊	埋土上位	1類	1/3欠	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(642.05)	123.40	119.26	27.87	
296	39	磨製石斧	12号土塊	埋土中	1類	完形	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	725.98	94.13	93.74	51.88	
297	39	石皿	14号土塊	埋土中	1類	1/3欠	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	412.05	131.06	98.45	29.49	
298	39	石皿	19号土塊	埋土上位	1類	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	44.76	47.01	81.27	16.62	
299	39	石皿	19号土塊	埋土下位	1類	完形	コンツフェニス	北上山地 古生代	90.31	102.87	37.33	22.20	中生代白堊紀に变成
300	39	石皿	19号土塊	埋土下位	1c類	—	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	4.95	28.35	28.18	8.24	
495	39	石剣	II A12f	II層	6類	完形	1類(薄板状)	奥羽山脈 新生代新第三紀	0.72	26.69	15.04	3.10	
496	39	石剣	II A1e	II層	6類	基部割欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(0.93)	30.79	(13.64)	2.85	
497	39	石剣	II A12g	II層	6類	先端部欠	赤色頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(0.67)	(18.26)	17.04	2.74	
498	39	石剣	II A15d	II層	6類	体部欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(0.30)	17.60	12.30	2.40	
499	39	石剣	3号性格不明	埋土下位	4類	完形	赤色頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	0.39	17.50	10.73	3.16	
500	39	石剣	3号性格不明	埋土中	4類	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	0.39	16.82	12.18	3.62	
501	39	石剣	II A11h	II層	1類	完形	赤色頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	0.40	17.46	10.72	3.57	
502	39	石剣	II A11g	II層	1類	基部割欠	赤色頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(0.27)	17.36	(11.31)	2.10	

図版番号	写真 図版	種別	遺構名	階位	分類	残存 部位	石材	産地	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
303	39	石壁	II A15f	II層	2階	床部欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(285)	(426.1)	14.89	5.25	
304	39	石壁	II A17e	II層	7階	完形	頁岩 (徳 島産)	奥羽山脈 新生代新第三紀	0.33	16.36	8.89	2.73	
305	39	石壁	II A11g	II層	2階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	0.71	23.63	11.71	3.63	
306	39	石壁	II A14f	II層	2階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	0.36	17.41	10.10	3.05	
307	40	石壁	3号性格 不明	II層 中	3階	先階部 床部欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(127)	(24.06)	13.44	4.65	
308	40	石壁	II A10h	II層	3階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	4.20	37.88	18.96	10.15	
309	40	石壁	II A12g	II層	7階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	1.40	25.98	14.21	4.83	
310	40	石壁	II A15f	II層	9階	先階部 欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(1.09)	(26.37)	9.04	4.37	
311	40	石壁	II A13g	II層	1a階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	2.00	35.70	18.28	6.68	
312	40	心礎	II A13c	II層	1a階	床部欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(2.18)	(23.47)	21.99	5.09	
313	40	石壁	3号性格 不明	II層	1b階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	1.83	22.08	25.09	5.00	
314	40	石壁	II A13g	II層	1a	床部欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(10.94)	(41.28)	31.76	12.00	
315	40	心礎	II A11g	II層	2階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	1.52	37.23	8.29	5.64	
316	40	石壁	3号性格 不明	II層 下位	2階	床部欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(2.49)	(38.83)	9.58	6.98	
317	40	土版器	II A4i	II層	-	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	21.79	68.45	31.54	9.21	
318	40	地伏石 器	II A7h	II層	-	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	63.95	78.37	42.31	17.92	
319	40	地伏石 器	3号性格 不明	II層 上位	-	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	91.47	87.66	42.31	29.22	
320	40	スタレ イバー	II A10g	II層	2階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	4.10	23.49	22.42	8.63	
321	40	スタレ イバー	II A17i	II層 下位	1階	床部欠	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(43.71)	59.91	46.67	16.39	打製石片の 欠損品か
322	40	スタレ イバー	II A10h	II層	1階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	130.40	115.97	127.77	20.21	
323	40	スタレ イバー	II A11i	II層 中	3階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	21.32	33.21	51.35	14.21	
324	40	スタレ イバー	3号性格 不明	II層 中	3階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	44.05	44.35	14.69	16.83	
325	40	打製石 器	II A17g	II層	-	完形	砂岩	北上山地 古生代	195.63	119.00	50.50	26.47	
326	40	磨製石 器	II A8g	II層	-	床部欠	蛇紋岩	北上山地 古生代オールドビス紀	(80.16)	(58.36)	39.03	20.35	早池埦付 近、宮守
327	41	灰石	5号溝	II層 上	-	床部欠?	砂岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(173.27)	74.78	63.79	29.42	
328	41	陶磁石 器	II A9h	II層	1階	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	69.80	57.86	47.66	21.40	
329	41	陶磁石 器	II A12g	II層	2階	完形	赤色頁 岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	27.15	39.06	35.33	18.53	
330	41	陶器	II A14c	II層	-	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	843.09	115.98	149.40	41.78	
331	41	陶器	II A15g	II層	-	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	482.41	96.06	105.75	51.11	
332	41	陶器器 類	II A12g	II層	4階	完形	デイサ イト	奥羽山脈 新生代新第三紀	589.11	106.83	70.39	57.87	
333	41	陶器器 類	II A15g	II層	2階	完形	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	392.16	101.49	63.80	39.21	
334	41	陶器器 類	II A17i	II層	2階	完形	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	446.23	104.94	78.56	50.29	
335	41	陶器器 類	II A10h	II層	4階	完形	閃緑岩	北上山地 中生代白堊紀	349.87	86.55	75.66	38.51	
336	41	陶器器 類	II A12g	II層	2階	完形	凝灰岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	297.66	116.20	82.10	38.48	正面に深 痕あり
337	41	陶器器 類	II A17g	II層	4階	完形	デイサ イト	奥羽山脈 新生代新第三紀	706.86	150.07	74.87	51.72	
338	41	陶器器 類	II A12g	II層	5階	完形	安山岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	801.55	113.98	85.35	49.84	
339	41	磁石	II A16f	II層	-	床部	砂岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	(240.84)	(62.85)	50.63	40.61	

図版 番号	写真 図版	種別	遺構名	階位	分類	地層 部位	石材	産地	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	備考
540	41	敵石	ⅡA12g	Ⅱ層	-	完形	頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	307.72	84.97	61.71	45.90	
541	42	石核	ⅡA15g	Ⅱ層	-		頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	312.13	71.45	98.70	50.59	
542	42	石核	ⅡA16g	Ⅱ層	-		頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	595.29	78.63	110.87	80.54	
543	42	石核	ⅡA9h	Ⅱ層	-		頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	1022.23	46.59	68.06	28.08	
544	42	Rフレ イク	ⅡA10h	Ⅱ層	-		黒曜石	不明	0.36	16.16	15.62	1.72	
545	42	Rフレ イク	ⅡA14i	Ⅱ層	-		黒曜石	不明	1.91	24.37	21.27	7.11	
546	43	フレ イク	ⅡA3i	Ⅱ層	1a類		頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	3.37	21.31	21.18	6.68	
547	43	フレ イク	ⅡA11h	Ⅱ層	1b類		黒曜石	不明	2.24	19.28	27.28	6.00	
548	43	フレ イク	ⅡA10b	Ⅱ層	2a類		頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	14.30	42.12	41.84	10.87	
549	43	フレ イク	ⅡA11k	Ⅱ層	2b類		頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	1319	37.00	36.83	14.51	
550	43	フレ イク	ⅡA15d	Ⅱ層	2c類		頁岩	奥羽山脈 新生代新第三紀	10.87	34.18	42.95	9.21	
551	43	フレ イク	ⅡA14e	Ⅱ層	4b類		黒曜石	不明	0.92	18.98	10.99	4.98	
552	43	フレ イク	ⅡA12g	Ⅱ層	1b類		黒曜石	不明	0.95	18.13	14.47	5.22	

第7表 土師器・須恵器・陶磁器観察表

図版番号	写真図版	出土位置	出土部位	器種	残存部位	外面色調	胎土色調	備考
552	43	30号土坑	埴土中	須恵器・杯	口縁部のみ	灰白	灰白	
553	43	30号土坑	埴土中	陶器・壺	体部上半	灰白	黄灰	常滑
554	43	22号土坑	埴土中	陶器・碗	口縁部のみ	灰オリーブ	浅黄	
555	43	22号土坑	埴土中	陶器・碗	口縁部のみ	灰白	灰白	
556	43	22号土坑	埴土中	須恵器・壺	体部のみ	暗灰黄	灰	
557	43	22号土坑	埴土中	須恵器・壺	体部のみ	暗灰黄	灰	
558	43	24号土坑	埴土中	須恵器・碗	体部～底部	灰白	灰白	染付
559	43	3号性格不明遺構	埴土中	須恵器・壺	体部のみ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	焼成不良
569	43	2号溝跡	埴土中	須恵器・壺	底片	灰黄褐色	灰	
570	43	3号溝跡	埴土中	土師器・壺	口縁部のみ	淡黄	淡黄	
571	43	3号溝跡	埴土中	土師器・壺	柄み～体部	淡黄橙	淡黄橙	
572	43	4号溝跡	埴土中	陶器・壺	体部のみ	灰白	灰白	

第8表 石製品観察表

図版番号	写真図版	種別	遺構名	層位	残存部位	石材	産地	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
565	44	石臼	23号土坑	掘土中	3/4欠	砂岩	奥羽山脈 新世代新第三紀	(4050.00)	径150.00	-	103.54	
566	44	石臼	23号土坑	掘土中	3/4欠	砂岩	奥羽山脈 新世代新第三紀	(3485.00)	径156.57	-	101.37	
567	44	砥石	22号土坑	掘土中	体部欠	砂岩	奥羽山脈 新世代新第三紀	(11293)	(45.90)	(95.34)	(21.82)	
568	44	石釜底	22号土坑	掘土中	完形	ダイオナイト	奥羽山脈 新世代新第三紀	370.93	121.27	102.34	24.19	両面にスズが付着
573	44	砥石	II A15f	II層	完形	砂岩	奥羽山脈 新世代新第三紀	545.62	89.06	63.71	71.23	
574	44	砥石	II A10f	II層	先端部欠損	砂岩	奥羽山脈 新世代新第三紀	(147.96)	(96.96)	42.83	23.03	
575	44	砥石	II A16f	II層	1/2欠	砂岩	奥羽山脈 新世代新第三紀	(439.66)	(90.79)	(89.91)	35.40	
576	44	石製底	ST12	掘土下位	完形	凝灰岩	奥羽山脈 新世代新第三紀	117.19	121.69	43.06	15.75	

第9表 木製品観察表

図版番号	写真図版	出土位置	出土層位	器種	残存部位	法量 (長さ×幅×厚さ・cm)	備考
560	45	23号土坑	掘土中	不明		14.1×13.4×4.9	
561	45	23号土坑	掘土中	不明		径10.3×0.9	底板か
562	45	23号土坑	掘土下位	鉢	完形	径：116.2×4.1×3.2 高：28.6×9.8×4.0	
563	45	25号土坑	掘土中	鉢	1/2欠か	45.7×9.9×4.9	
564	45	25号土坑	掘土中	曲物	底板欠	径25.0×10.0	
577	45	II A18f	II層	輪	口縁部、台部欠損	残存径27.2、残高4.0	

第10表 銭貨観察表

図版番号	写真図版	出土位置	出土層位	銭貨名	番号	初鑄年 (西暦年)	材質	たて (mm)	よこ (mm)	厚さ (mm)	空径 (mm)	重量 (g)
578	46	3号性格不明遺構	底面上	寛永通宝	古寛永	1636	鉄	24.73	24.69	1.25	5.78	3.04
579	46	II A11g	II層	永楽通宝		1408	銅	23.19	23.24	0.99	5.55	2.06
580	46	II A12g	II層	永楽通宝		1408	銅	21.27	24.33	1.32	5.12	2.9
581	46	II A14e	II層	元祐通寶	1/2欠損	1086・北宋	銅	(19.37)	23.66	1.19	7.17	(1.59)

第11表 鉄製品観察表

図版番号	写真図版	出土位置	出土層位	器種	残存部位	法量 (長さ×幅、直径・cm)	備考
582	46	3号性格不明遺構	底面	キセル	摩西のみ	(1.0)×1.6、径1.6	

写 真 图 版



調査区全景 (西から)



基本層序 (西から)

写真図版 1 調査区全景・基本層序



1号住居跡 (北東から)



1号住居跡断面 (南から)



1号住居跡断面 (西から)



2号住居跡 (北東から)



2号住居跡断面 (西から)



2号住居跡 炉 (南西から)

写真図版3 2号住居跡



1号住居状遺構 (南西から)



1号住居状遺構断面 (西から)



1号住居状遺構
遺物出土状況 (東から)



2号住居状遺構 (北から)



2号住居状遺構断面 (北西から)



3号住居状遺構 (北東から)

写真図版 5 2・3号住居状遺構

3号住居状遺構断面 (南西から)

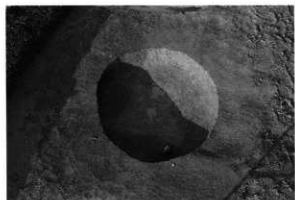


4号住居状遺構 (北西から)



4号住居状遺構断面 (南から)





1号土坑 (南から)



1号土坑断面 (東から)



2号土坑 (南から)



2号土坑断面 (西から)



3号土坑 (西から)



3号土坑断面 (南から)



4号土坑 (西から)



4号土坑断面 (南から)

写真図版 7 1～4号土坑



5号土坑 (東から)



5号土坑断面 (西から)



6号土坑 (北東から)



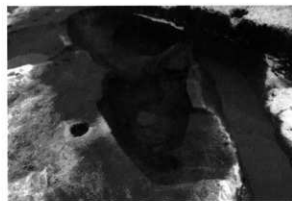
6号土坑断面 (南東から)



7号土坑 (北東から)



7号土坑断面 (南西から)



8号土坑 (東から)



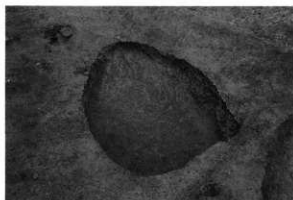
8号土坑断面 (東から)



9号土坑 (西から)



9号土坑断面 (西から)



10号土坑 (南から)



10号土坑断面 (南西から)



11号土坑 (南から)



11号土坑断面 (南から)



12号土坑 (南西から)



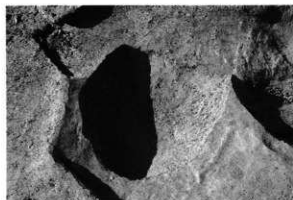
12号土坑断面 (西から)



13号土坑 (北西から)



13号土坑断面 (南東から)



14号土坑 (東から)



14号土坑断面 (南から)



15号土坑 (西から)



15号土坑断面 (北西から)



16号土坑 (北から)



16号土坑断面 (西から)



17号土坑 (西から)



17号土坑断面 (南から)



18号土坑 (北東から)



18号土坑断面 (南東から)



19号土坑 (東から)



19号土坑断面 (南から)

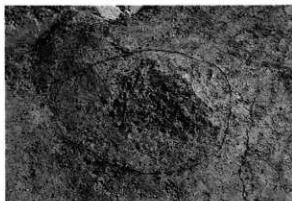


1号焼土 (南西から)



1号焼土断面

写真図版11 17~19号土坑・1号焼土



2号焼土 (北東から)



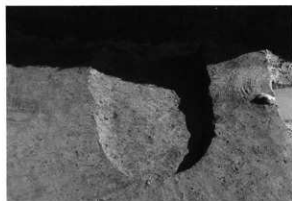
2号焼土断面 (北東から)



20号土坑 (南西から)



20号土坑断面 (南から)



21号土坑 (西から)



21号土坑断面 (南から)



22号土坑 (東から)



22号土坑断面 (南から)



23号土坑 (北西から)



24号土坑木製線出土状況 (南西から)



24号土坑 (南西から)



24号土坑断面 (西から)



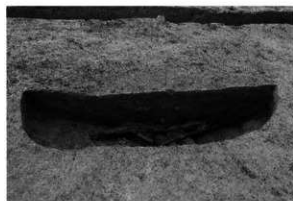
25号土坑 (西から)



25号土坑曲物出土状況 (西から)



26号土坑 (東から)



26号土坑断面 (南から)



27号土坑 (北から)



27号土坑断面 (南から)



28号土坑 (北西から)



28号土坑断面 (北西から)



作業風景



現地説明会



地元小学生による発掘体験



1号性格不明遺構（北東から）



2号性格不明遺構（南東から）



2号性格不明遺構断面（東から）

写真図版15 1・2号性格不明遺構



3号性格不明遺構 (北東から)



3号性格不明遺構断面A-A'
(南東から)



3号性格不明遺構断面B-B'
(南西から)



1号溝跡 (北東から)



1号溝跡断面A-A' (南西から)



2号溝跡 (南西から)

2・6号溝跡断面E-E' (南から)



3号溝跡 (北東から)



3号溝跡断面G-G' (南から)





4号溝跡 (北東から)



4・5号溝跡断面K-K' (南から)



5号溝跡 (北西から)



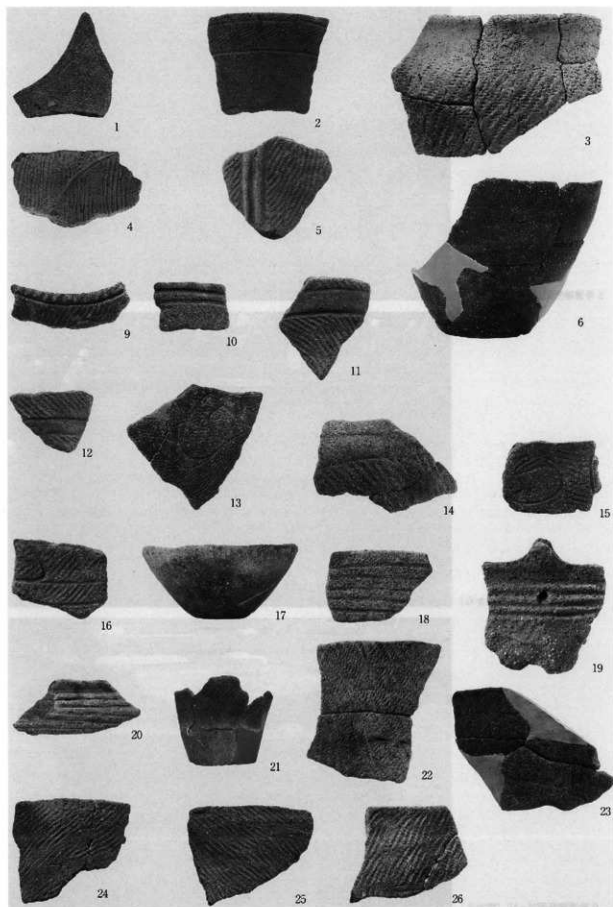
5号溝跡断面L-L' (北西から)



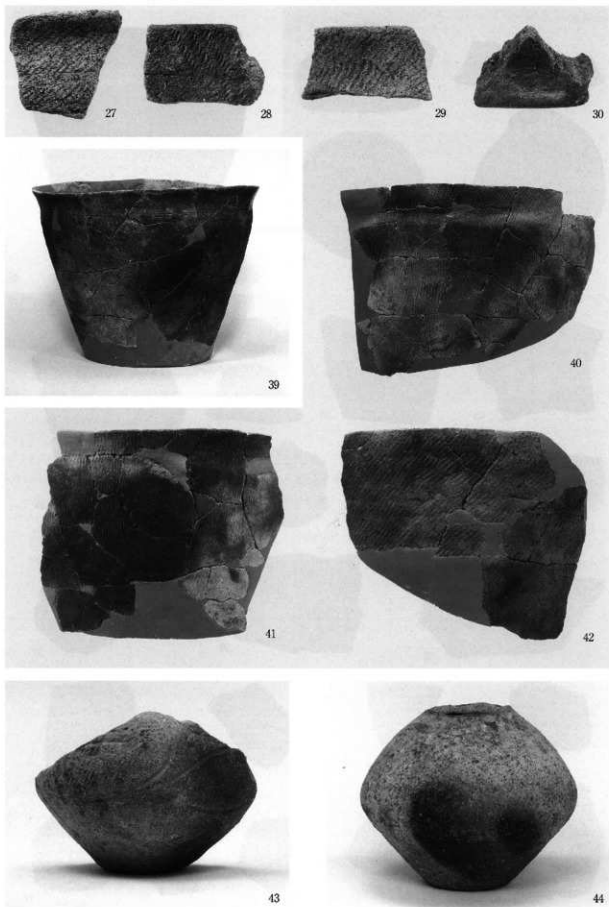
6号溝跡 (南東から)



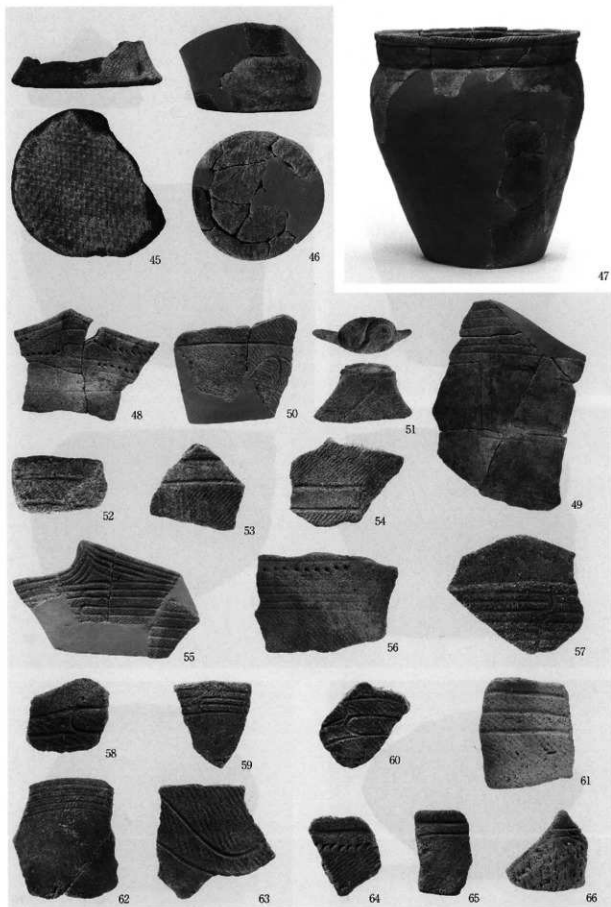
6号溝跡断面N-N' (南から)



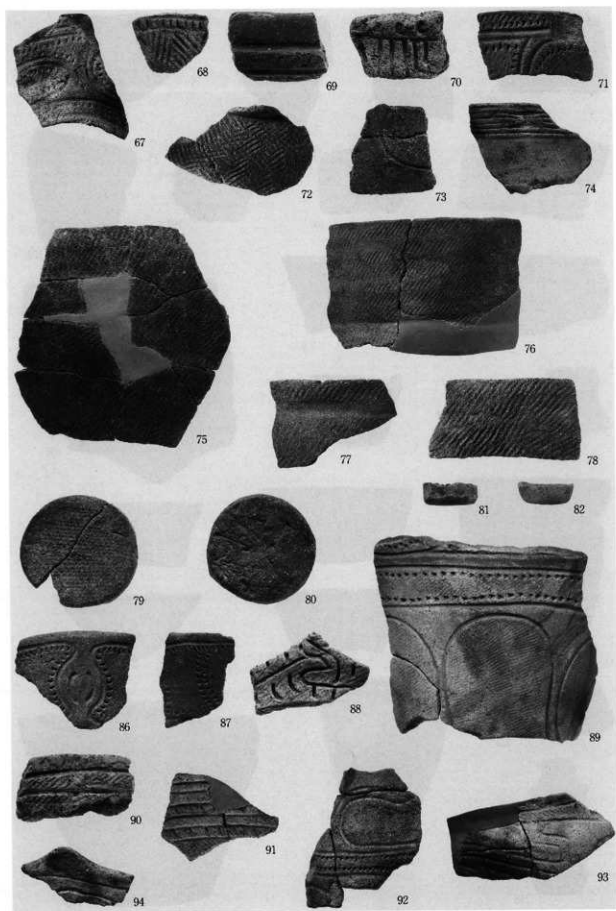
写真図版21 1・2号住居跡出土土器



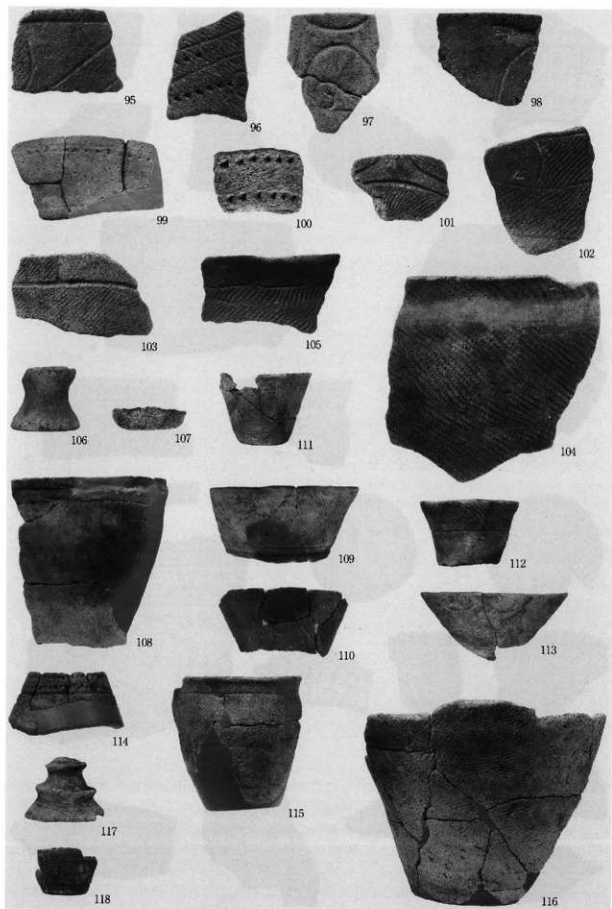
写真图版22 2号住居跡・1号住居状遺構出土土器



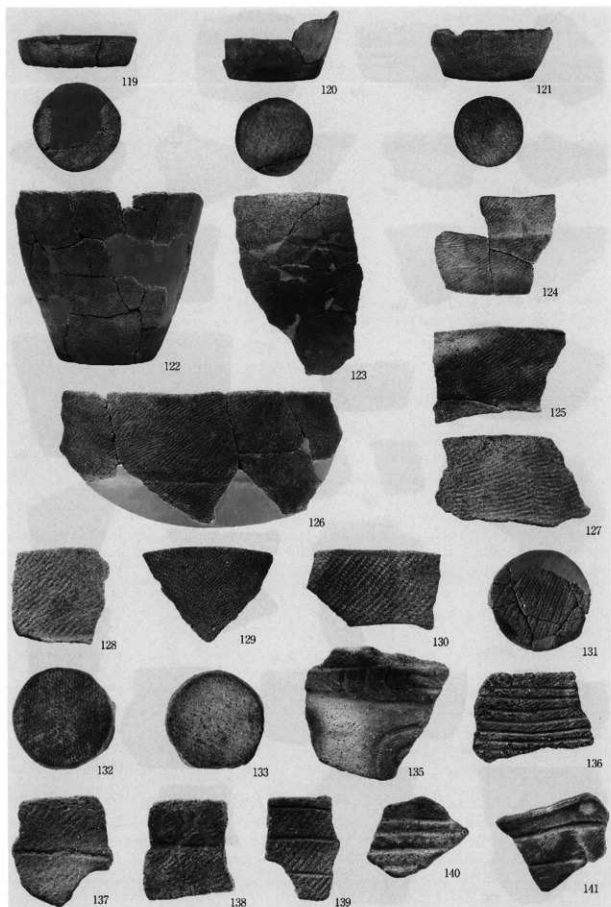
写真図版23 1号住居状遺構出土土器



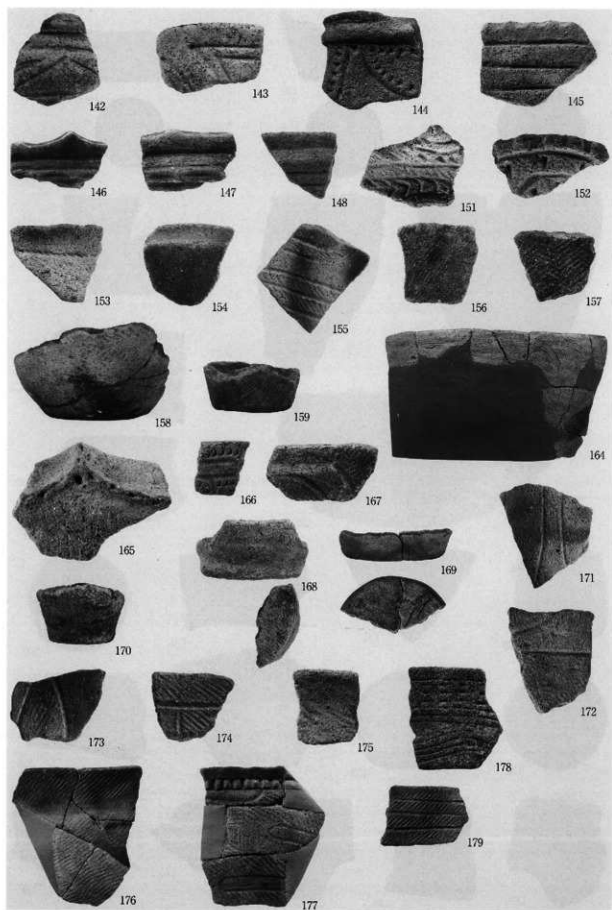
写真图版24 1·2号住居状遗構出土土器



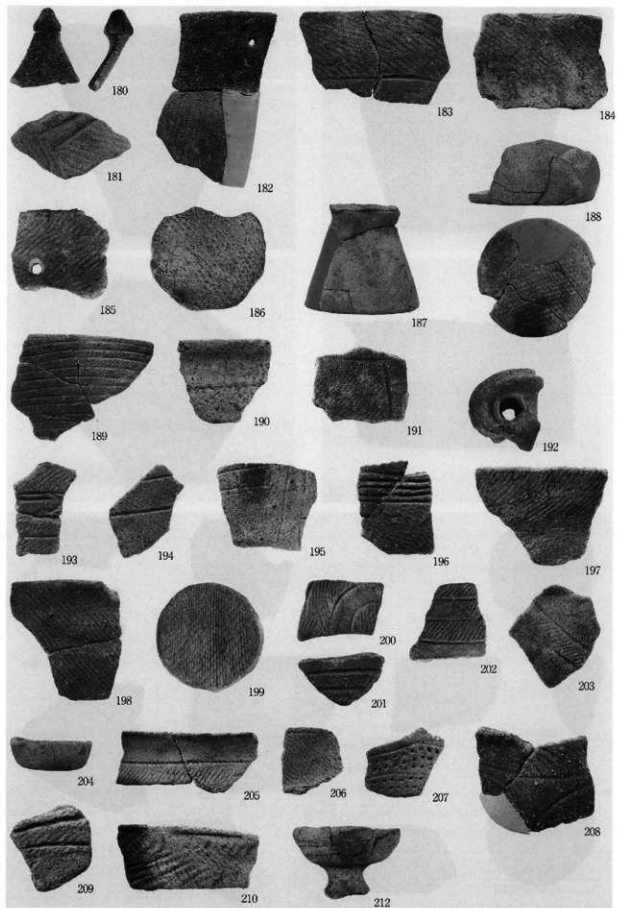
写真図版25 2号住居状遺構出土遺物



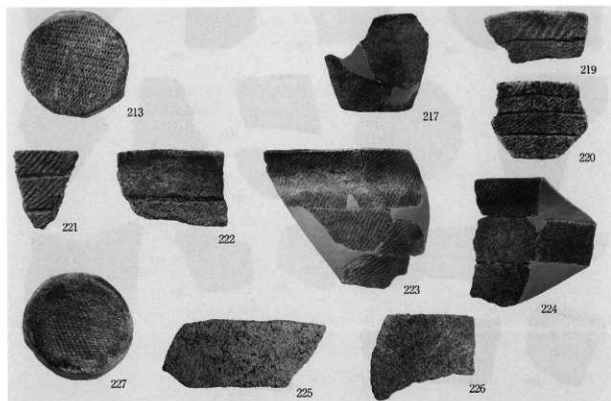
写真图版26 2·3号住居状遺構出土遺物



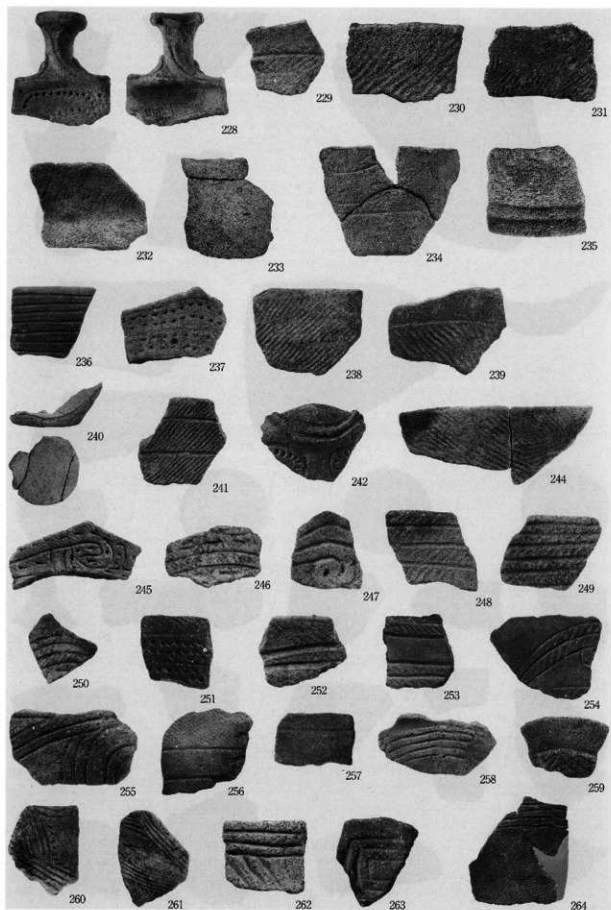
写真図版27 3・4号住居状遺構・土坑出土土器



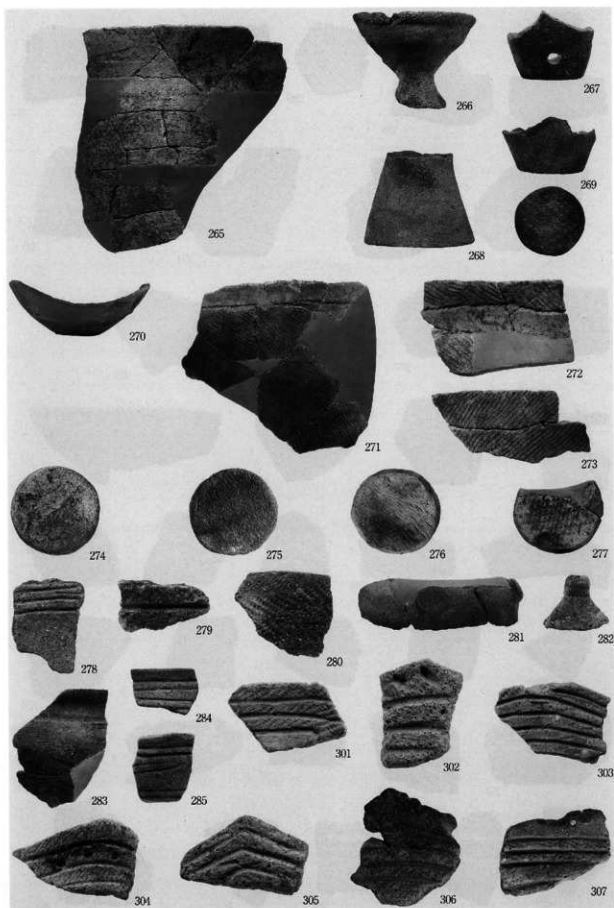
写真図版28 土坑出土土器(1)



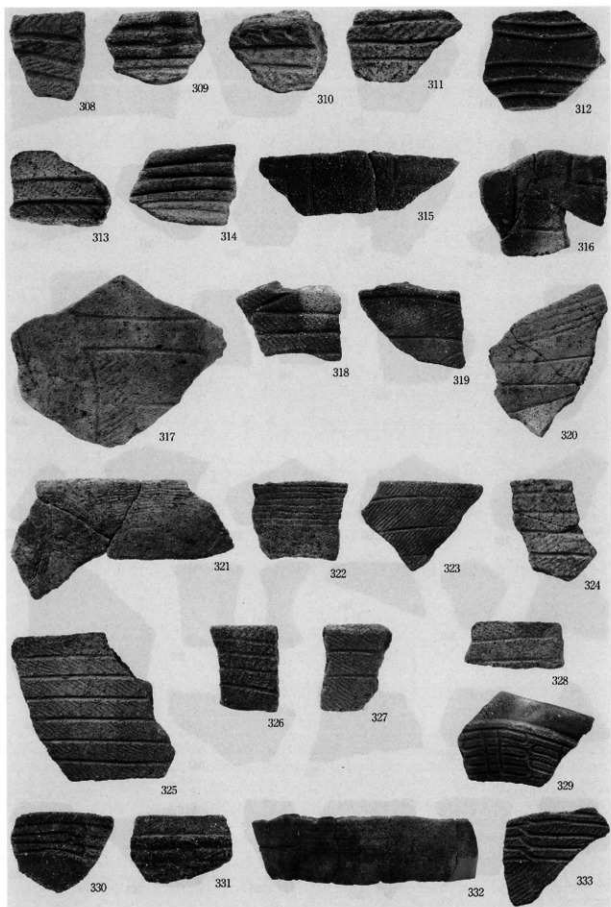
写真図版29 土坑出土土器(2)



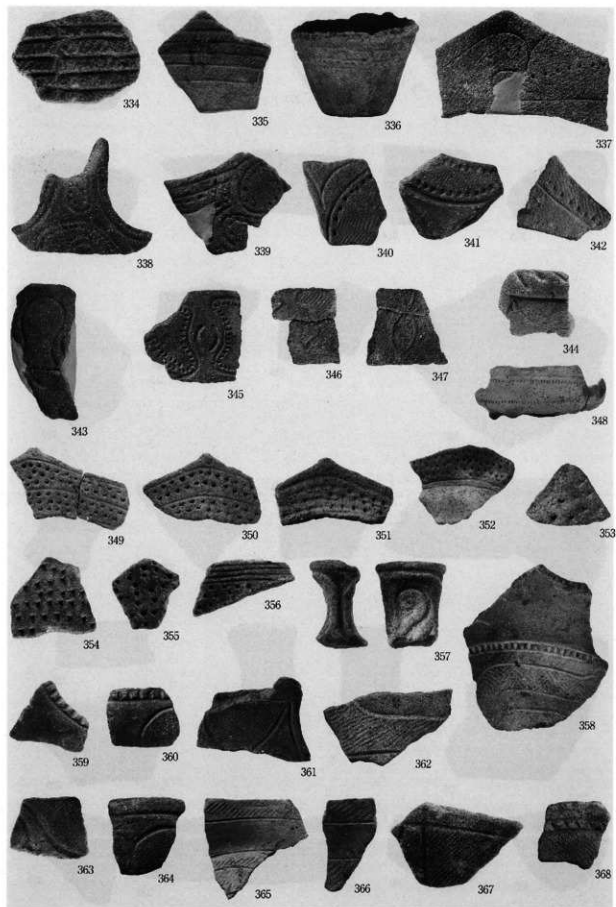
写真図版30 土坑出土土器(3)



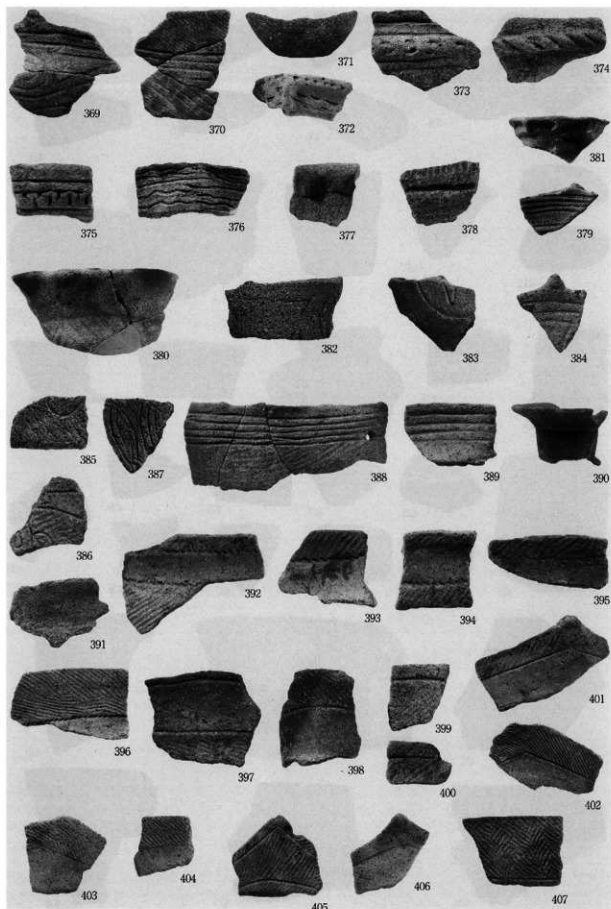
写真図版31 土坑出土・遺構外出土土器



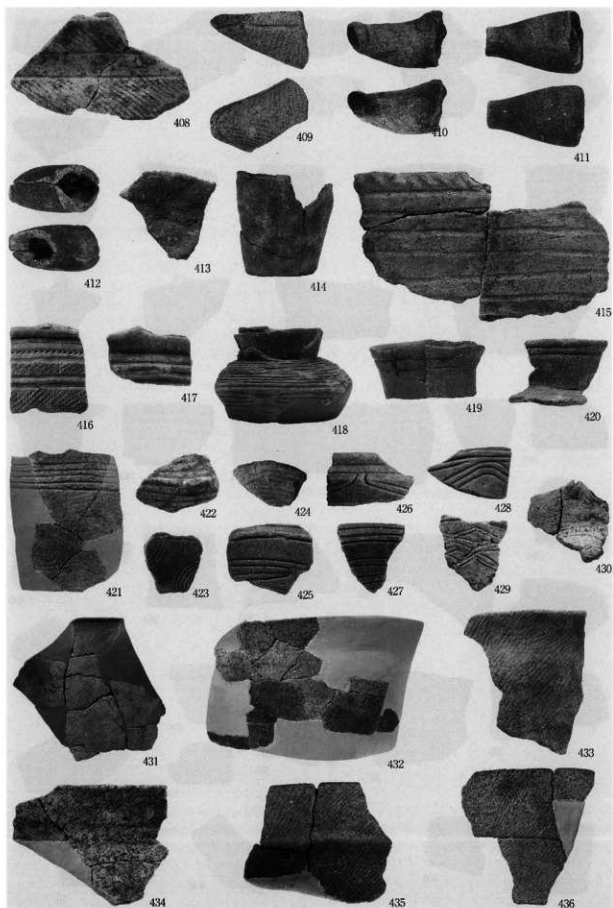
写真図版32 遺構外出土土器 (1)



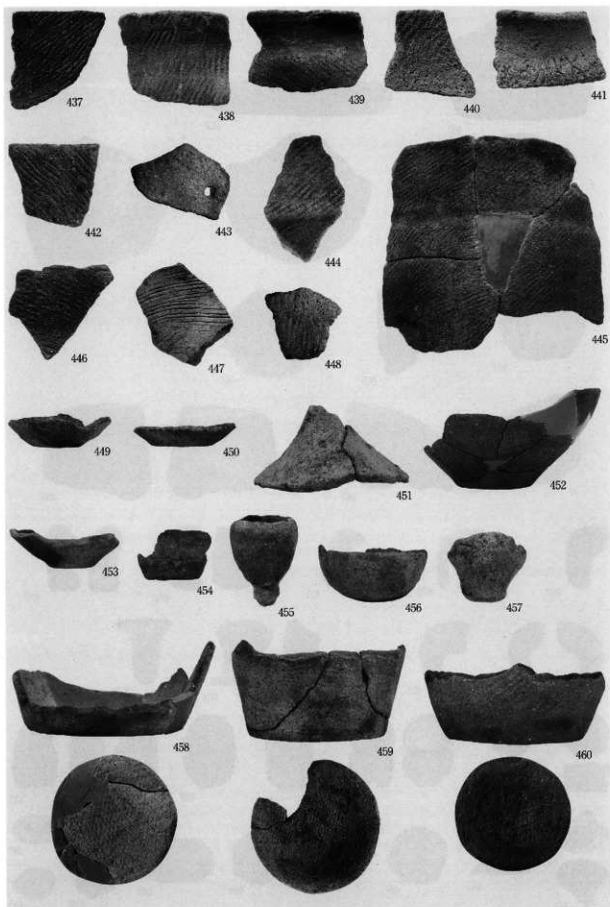
写真図版33 遺構外出土土器(2)



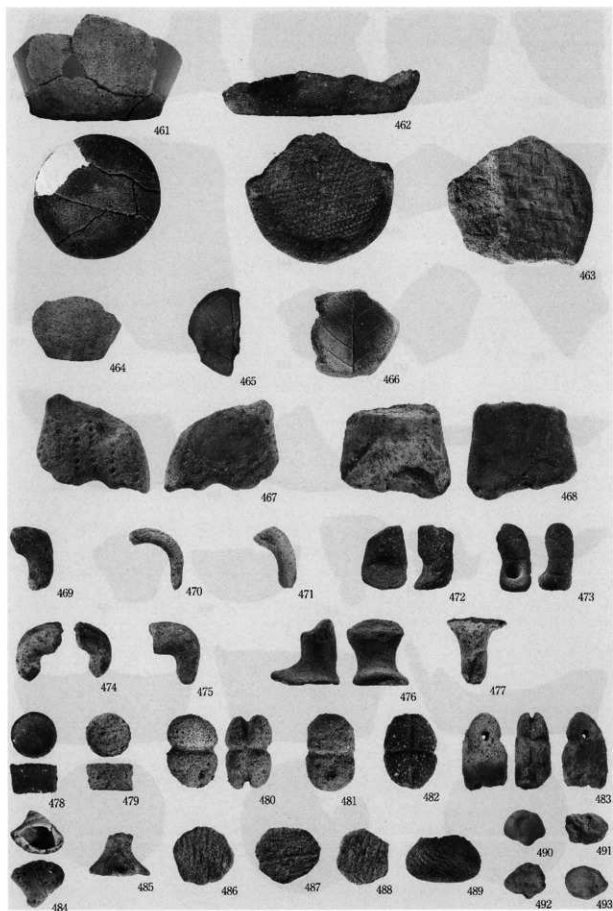
写真図版34 遺構外出土器(3)



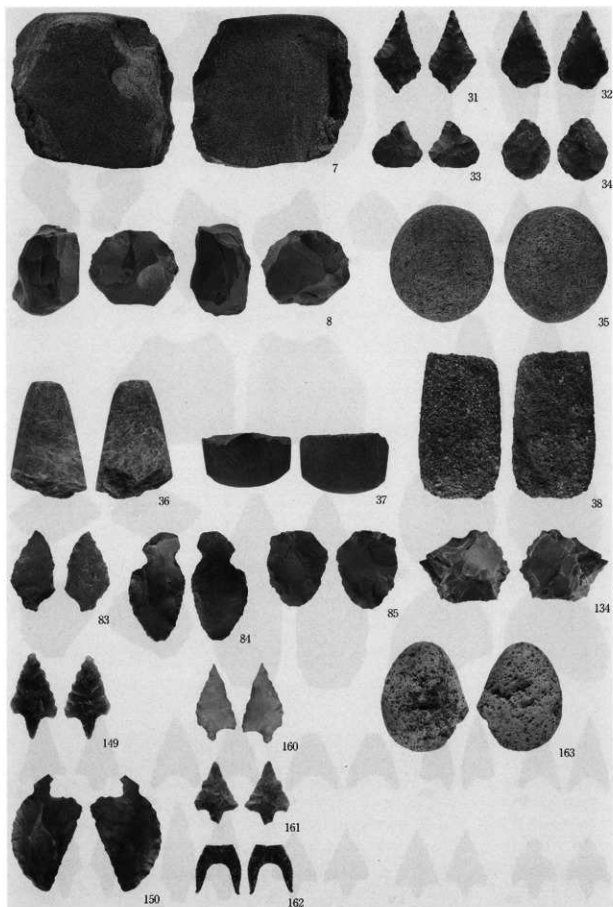
写真図版35 遺構外出土土器(4)



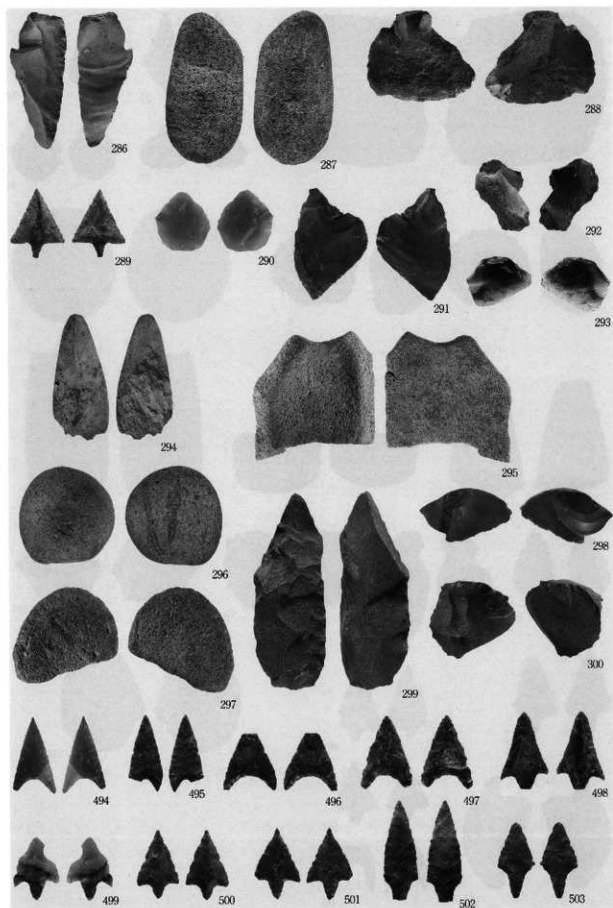
写真図版36 遺構外出土土器（5）



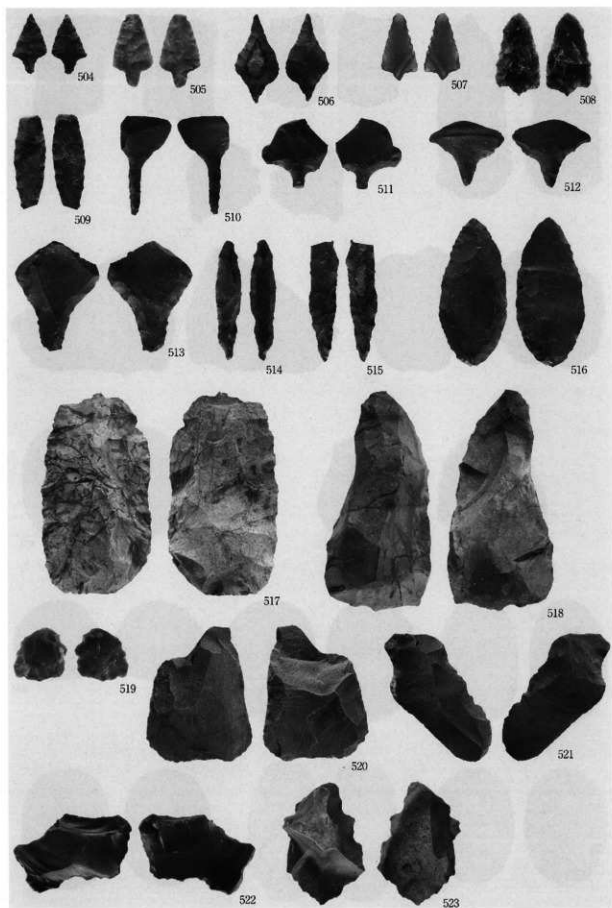
写真図版37 遺構外出土土器・土製品



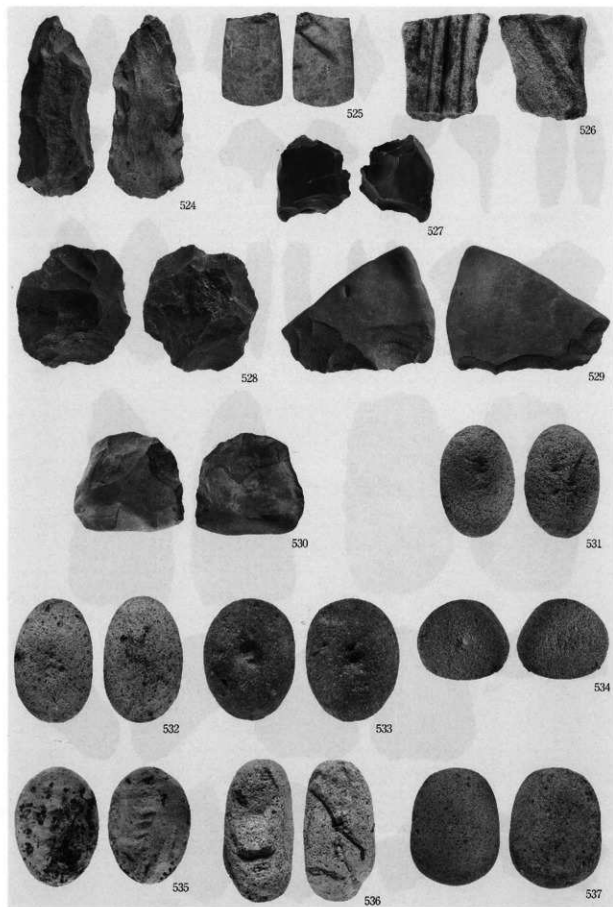
写真図版38 壑穴住居跡・住居状遺構出土石器



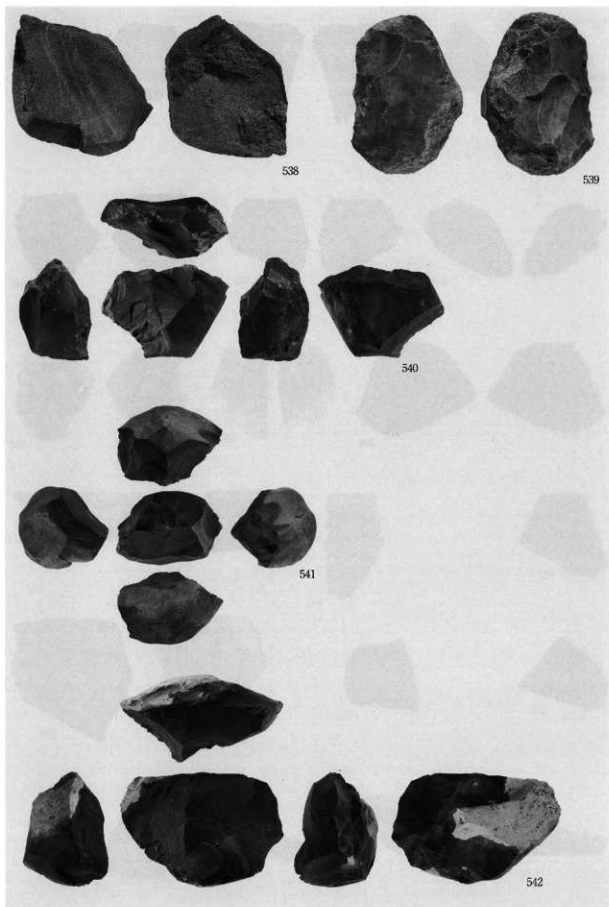
写真図版39 土坑出土・遺構外出土石器



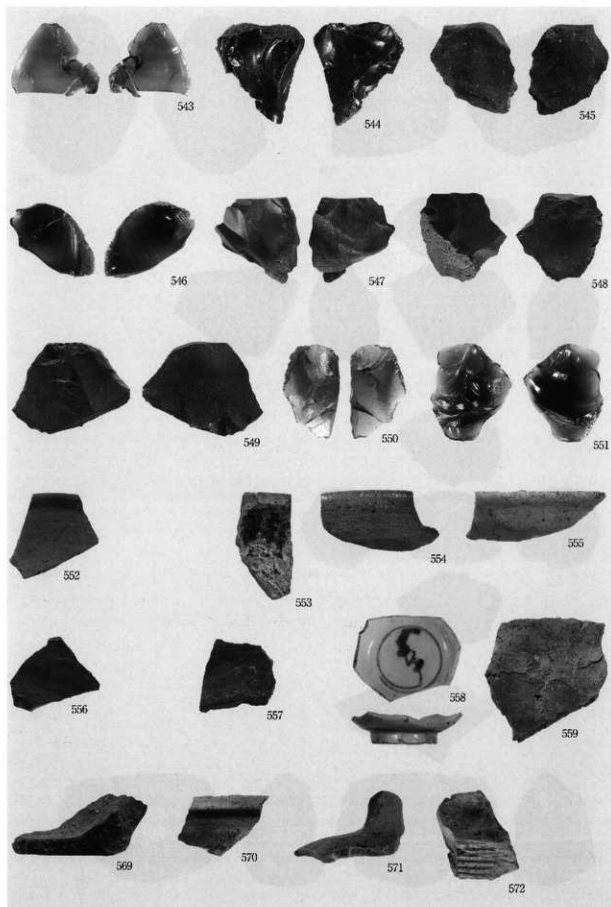
写真図版40 遺構外出土石器（1）



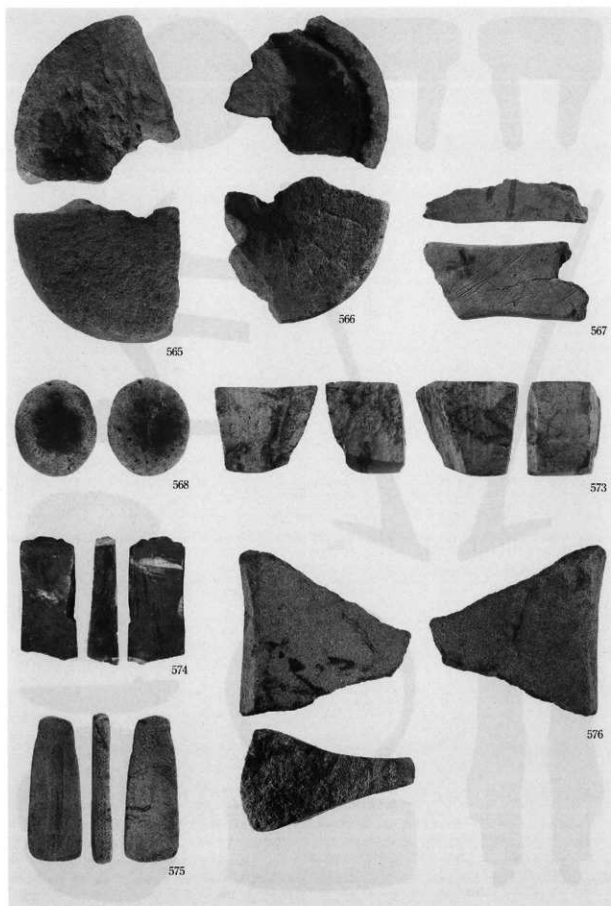
写真図版41 遺構外出土石器（2）



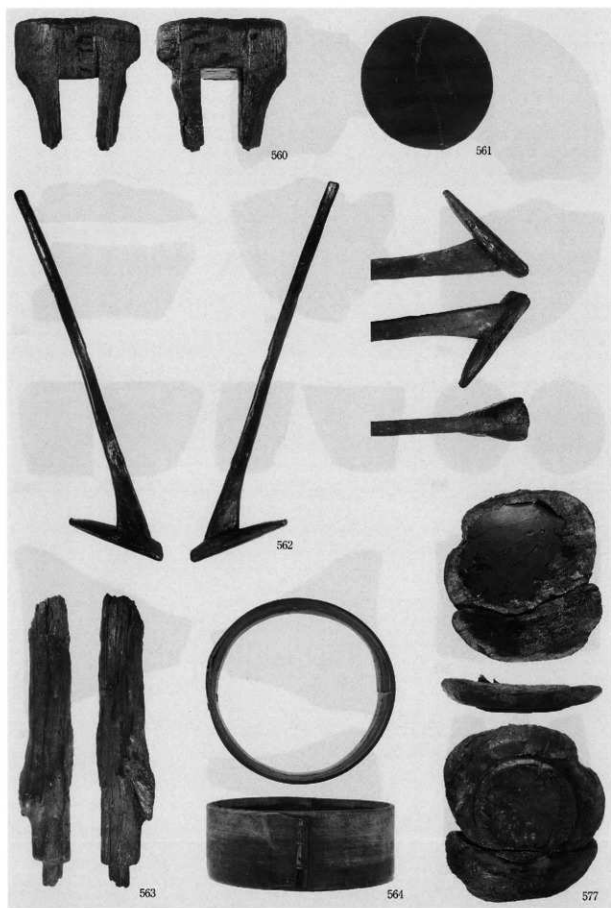
写真図版42 遺構外出土石器(3)



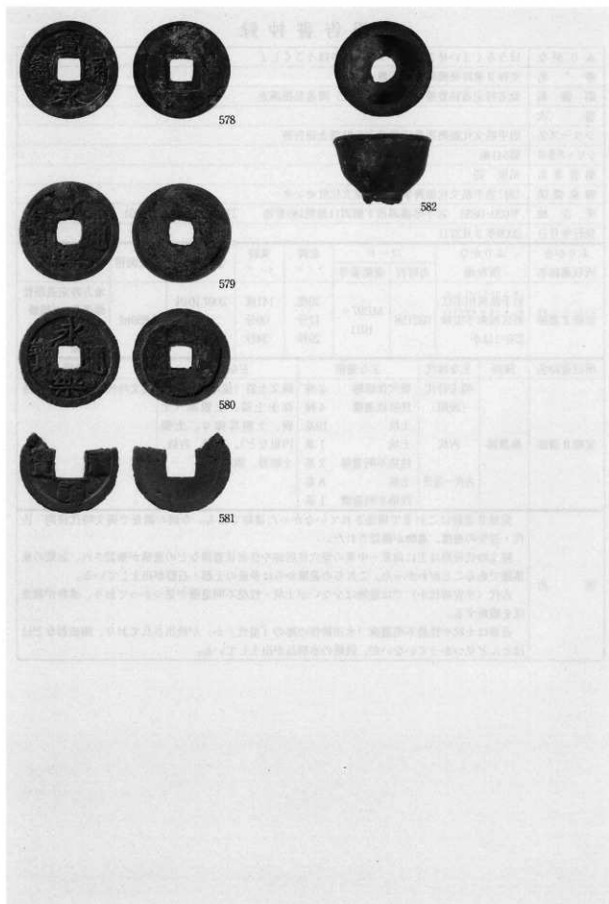
写真図版43 遺構外出土石器・古代・近世の土器



写真図版44 近世石製品



写真図版45 近世木製品



報告書抄録

ふりがな	ほうろく2いせきはくつちようさほうこくしょ								
書名	宝祿Ⅱ遺跡発掘調査報告書								
副書名	地方特定道路整備事業（稲瀬1区）関連発掘調査								
巻次									
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第541集								
編者名	須原 拓								
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001								
発行年月日	2009年2月27日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
宝祿Ⅱ遺跡	岩手県奥州市江刺区稲瀬字宝祿276-1ほか	032158	ME97-1011	39度 12分 29秒	141度 09分 34秒	2007.10.01 ～ 2007.12.14	1,850㎡	地方特定道路整備事業（稲瀬1区）関連発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
宝祿Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代（後期）	竪穴住居跡 住居状遺構 土坑	2棟 4棟 19基	縄文土器（後期～晩期）、 弥生土器、土製品（土 偶、土製耳飾り、土製 円板など）、石器、古銭、 土師器、須恵器		縄文時代後期の集落遺跡		
		古代	土坑 性格不明遺構	1基 2基					
	古代～近世	土坑 性格不明遺構	8基 1基						
要約	<p>宝祿Ⅱ遺跡はこれまで周知されていなかった遺跡である。今回の調査で縄文時代後期・古代・近世の遺構、遺物が確認された。</p> <p>縄文時代後期は主に前葉～中葉の竪穴住居跡や住居状遺構などの遺構が確認され、該期の集落跡であることがわかった。これらの遺構からは多量の上器・石器が出土している。</p> <p>古代（平安時代か）では遺物は少ないが土坑・性格不明遺構が見つかっており、溝群が調査区を縦断する。</p> <p>近世は土坑や性格不明遺構（水田耕作の際の「前代」か）が検出されており、陶磁器などはほとんど見つからないが、該期の木製品が出土している。</p>								

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第541集

宝祿Ⅱ遺跡発掘調査報告書

地方特定道路整備事業（稲瀬工区）関連発掘調査

印刷 平成21年2月24日

発行 平成21年2月27日

- 編集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019)638-9001
- 発行 岩手県南広域振興局土木部
〒023-0053 岩手県奥州市水沢区大手町1-2
電話 (0197)22-2881
(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019)654-2235
- 印刷 有限会社 セーコー印刷
〒020-0877 岩手県盛岡市下の橋町2-23
電話 (019)651-3606

